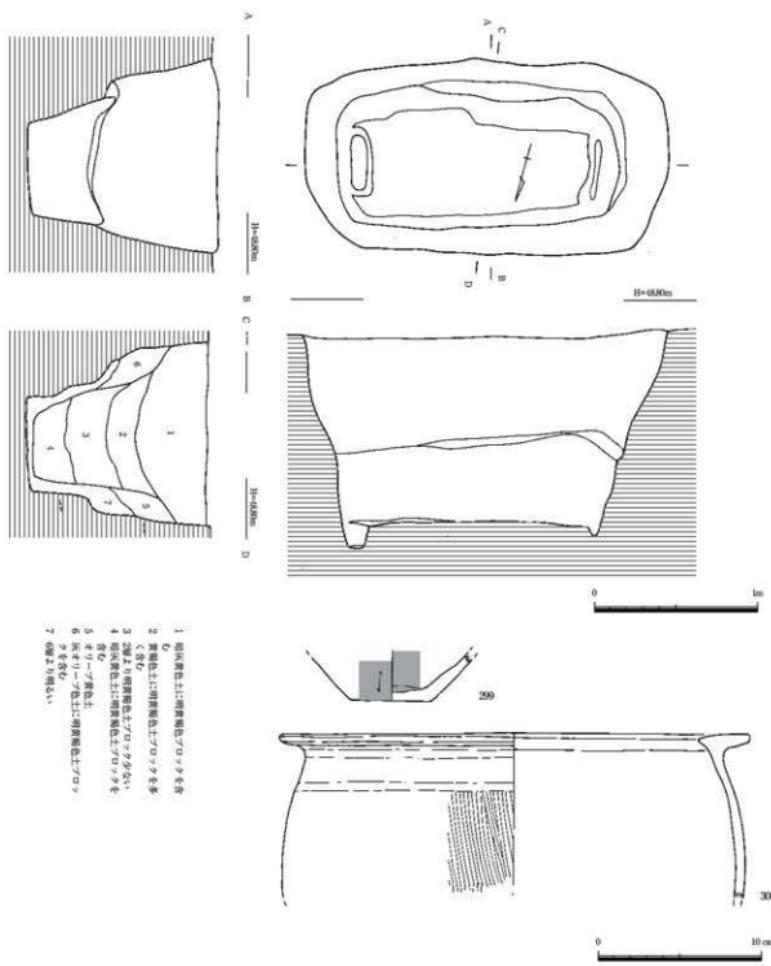




第67図 土坑墓・木棺墓・甕棺墓配置図（1／400）

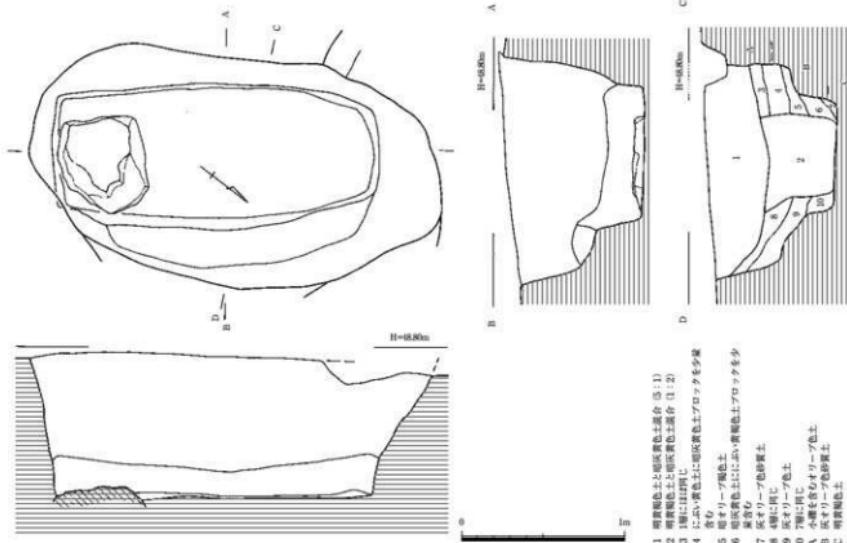


第68図 SR0425及び出土遺物実測図（1／30、1／3）

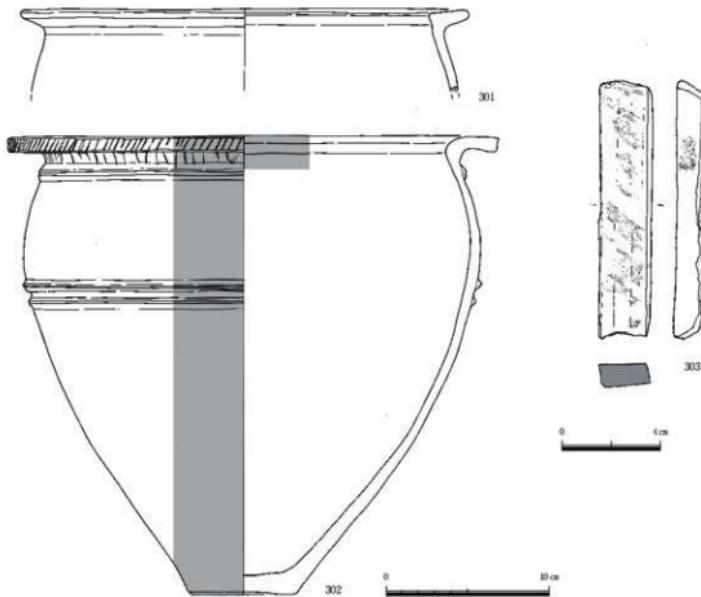
SR0425（第68図、写真129～131）

北群中央部で検出した木棺墓である。K0429・0430→SR0425の先後関係となる。墓坑底は平坦で幅55～65cm、両側小口部分に長さ40cmほどの掘り込みを有する。丹塗り土器を含む弥生時代中期後半～末に位置付けられる小破片が出土しており、甕棺墓との関係より弥生時代中期末以降と考えられる。

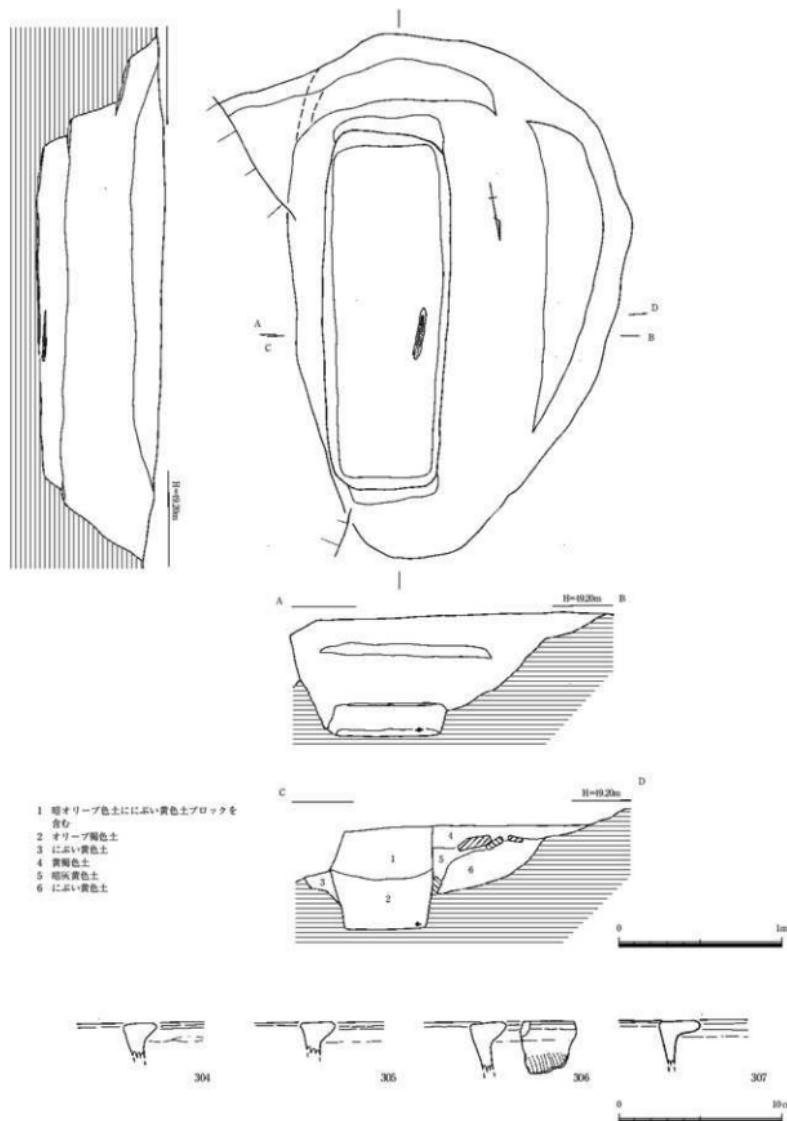
出土遺物（第68図） 299は丹塗り土器の底部破片である。器面の剥落が進んでいるが、内外面に



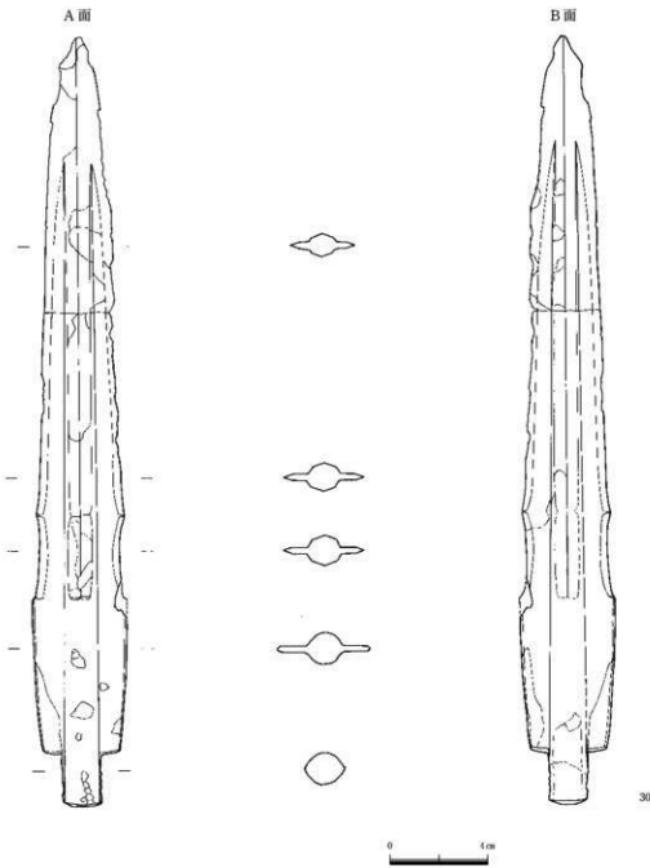
- 1 明褐色土と褐灰色土混合 (5:1)
 2 明褐色土と褐灰色土混合 (1:2)
 3 1mに11.04mC
 4 にふく黄色土に地の黄褐色土
 5 黄褐色土
 6 褐色土
 7 深オーブ地砂質土
 8 地に同
 9 地リープ土
 10 小木を含むリード色土
 B 深リード色質土
 C 明褐色土



第69図 SR0431及び出土遺物実測図 (1/30、303は1/2、その他は1/3)



第70図 SR0437及び出土遺物実測図1 (1/30、1/3)



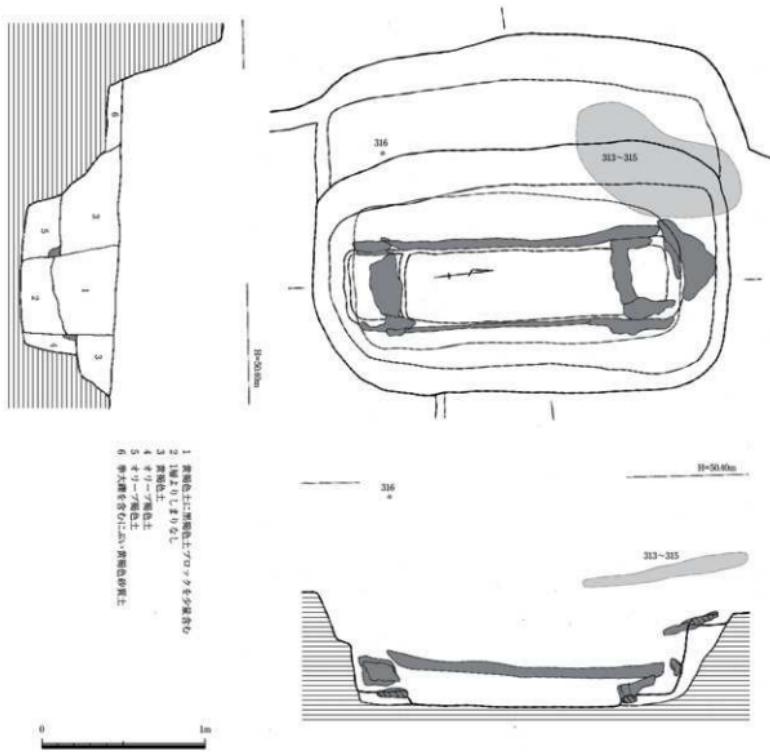
第71図 SR0437出土遺物実測図2 (1/2)

赤色顔料の塗布が認められる。300は断面菱形の甕口縁部である。色調は浅黄橙色を呈する。

SR0431 (第69図、写真132~134)

北群中央部で検出した木棺墓で、K0429・0430を切る。墓坑底面南端部分に板状の花崗岩を検出した。当初墓坑底に据えられたものとして周辺の掘り下げを行ったが、石材が壁面より奥に入り、周辺埋土も地山との差異を見いだせなかつたため、地山に包含される巨礫と判断した。弥生時代中期後半～末に位置付けられる土器片の出土と、甕棺墓との関係から弥生時代中期末以降に位置付けられる。

出土遺物（第69図） 301は断面逆L字形を呈する甕口縁部破片である。302は全体の1/2が残存している丹塗り土器の甕である。外面全面および頸部内面まで丹塗りが行われている。口縁端部に刻



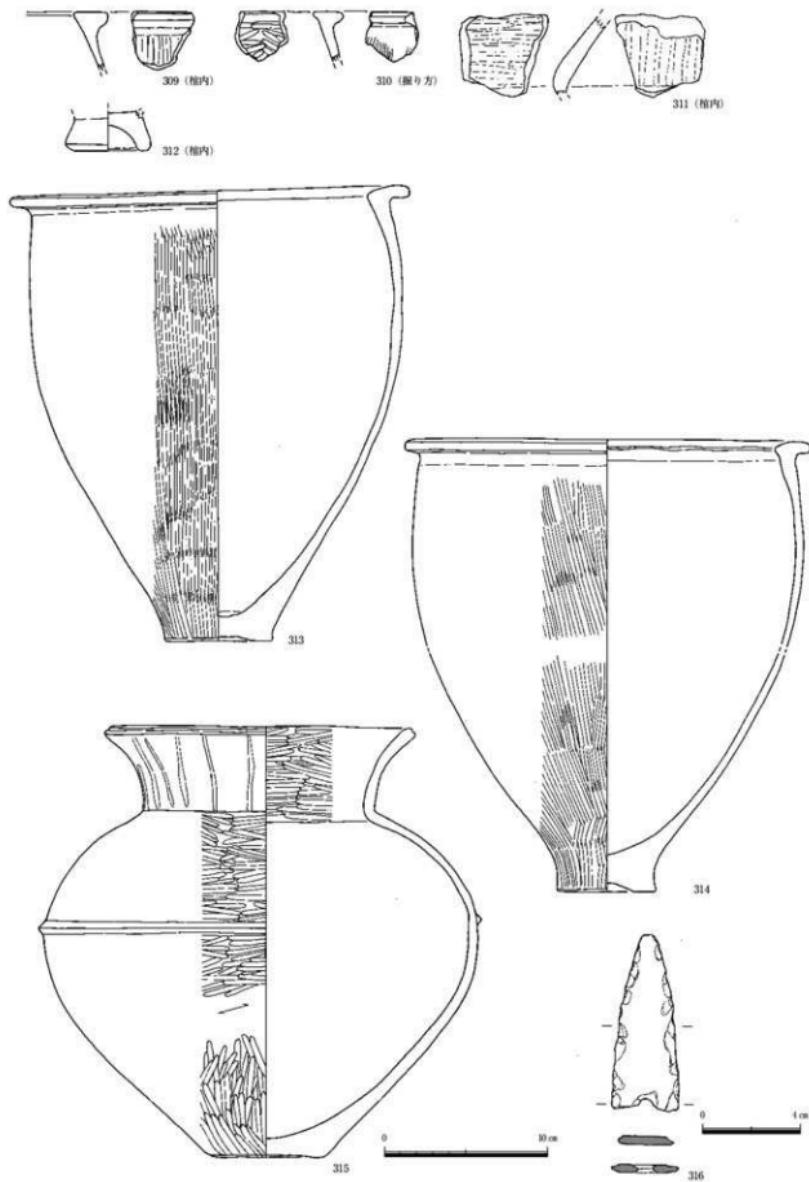
第72図 SR0475実測図 (1/30)

みを行い、頭部外面にも刺突痕が全体に巡る。頭部に1条、胴部に2条の断面M字形突帯を貼付する。303は砥石である。剥落・折損により5面が破面となるが、破面にも研磨の痕跡が残る。

SR0437 (第70図、写真135~143)

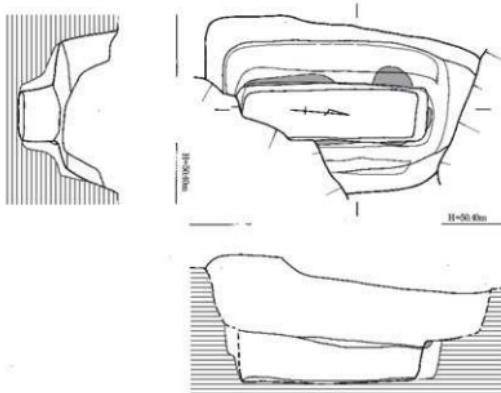
北群で検出した木棺墓で、並列するK0420に切られる。木棺内西壁際で鋒を南に向けた銅剣1本が出土した。底面から3cmほど浮いて、ほぼ水平を保った状態で出土している。また銅剣の周囲のみ黒褐色土で覆われており、茎の裏側にわずかに木質が認められたことなどから、鞘が腐食したものと考えられる。弥生時代中期初頭～前半に位置付けられる土器小破片が出土している。

出土遺物（第70・71図、写真344） 304~307はいずれも上面から出土した口縁部小破片である。304~306は粘土帶の貼付けにより断面三角形に仕上げ、307は断面逆L字形を呈する。308は鋒部分を部分的に鋳造により失い、剣身部中ほどで折損しているが、ほぼ完存する細形銅剣である。全長31.6cm、剣身長29.5cm、茎部長2.1cm、幅は茎部1.6cm、関部3.2cm、剣方下端4.0cm、剣方上端3.6cm、剣方最少幅3.3cmで、剣方下端部が最大幅となる。全体に漆黒色を呈するが、B面の剣方部分には一部に白銅

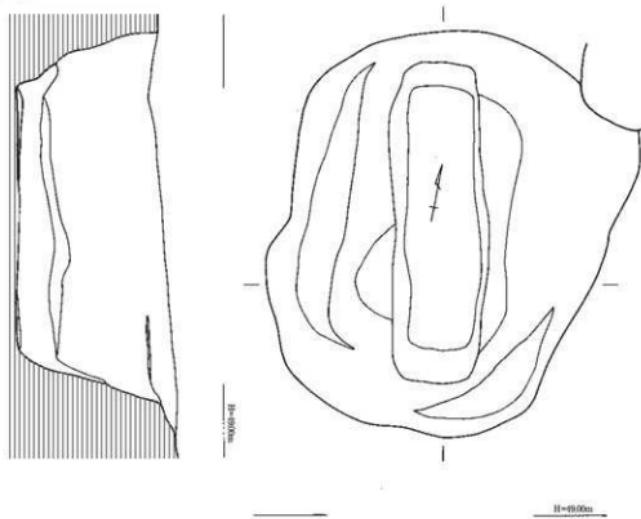


第73図 SR0475出土遺物実測図 (316は1/2、その他は1/3)

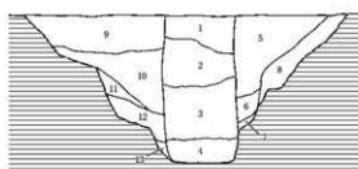
SR0498



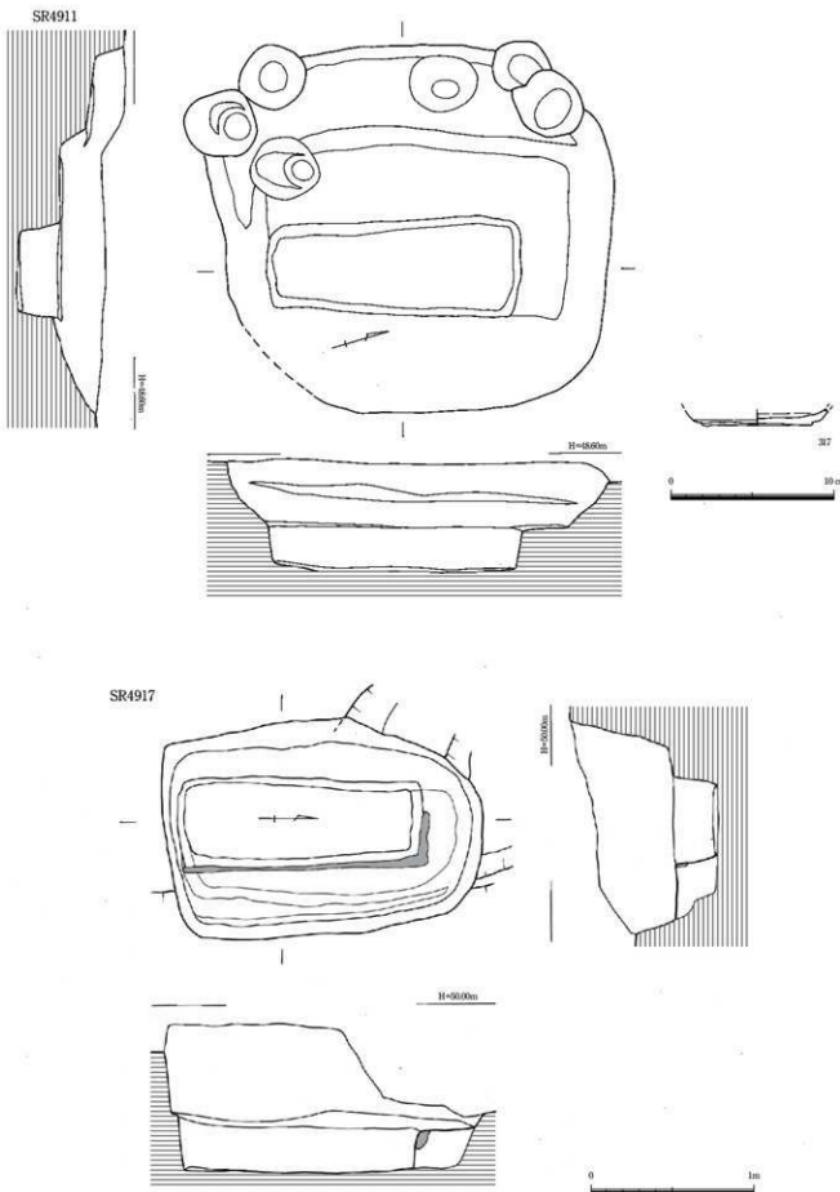
SR4910



- 1 黒褐色土とにじみ黄褐色土混合 (1:1)
- 2 暗灰黃色土ににじみ黄褐色土ブロックを含む
- 3 暗灰黃色土と褐色土と黒褐色土混合 (4:1:1)
- 4 暗灰黃色土と黒褐色土混合 (3:1)
- 5 にじみ黄褐色土と暗灰黃色土混合 (1:1)
- 6 从黃色土
- 7 にじみ黄褐色土
- 8 暗灰黃色土と褐色土混合 (1:2)
- 9 小礫を多く含む暗灰黃色土
- 10 暗灰黃色土に黒褐色土と褐色土ブロックを含む
- 11 暗灰黃色土と褐色土混合 (1:1)
- 12 10層に同じ
- 13 11層に同じ



第74図 SR0498・4910実測図 (1/30)



第75図 SR4911・4917及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)

色をとどめる。鏽は剖方下端まで行われるが、下端部の研ぎ出しはある。また剖方上部の節帯は脊にも研磨が行われ山形を呈する。剖方以下の翼部は厚み2.5mmで端部まで均等な厚みを保っている。茎部は厚さ1.2cmで断面偏平な円形を呈し側縁にはバリが残っている。また茎部側面には緊縛のための刻みが認められる。

SR0475 (第72図、写真144~147)

南群で検出した木棺墓で、K4916を切り木棺墓の掘り方で壺棺の一部を破損している（第129図参照）。土層観察より幅47cmの木棺を埋置したものと考えられ、棺材の外周には青白色～灰白色粘土が貼付されている。掘り方上層には土器がまとまって出土している。313・315はほぼ完形に復元でき、木棺埋置に伴う副葬土器の可能性も考えられる。弥生時代中期前半に位置付けられる。

出土遺物（第73図、写真324、355） 309・311は断面三角形の壺口縁部、311は内外面に黒色顔料を塗布する壺頭部、312は上げ底の底部破片である。313~315は掘り方上面からまとめて出土しており、いずれもほぼ完形に復元できる。313・314はともに口縁部断面逆L字形、底部はやや薄手の上げ底である。外面全面および内面下半に煤が付着している。315は小型壺である。偏球形の胴部に、頭部～口縁部は外方に開きながら立ちあがる。外面から頭部内面まで黒色顔料を塗布している。

SR0498 (第74図、写真148)

南群で検出した木棺墓で、K0457・0471に切られる。掘り方中央に木棺を埋置し、棺材の外周には灰白色粘土が貼付される。棺内埋土はオリーブ褐色土、棺外は黄褐色土にぶい黄色土をブロック状に混合する。出土遺物は小破片1点のみだが、弥生時代前期末～中期初頭以前に位置付けられる。

SR4910 (第74図、写真149・150)

北群で検出した木棺墓で、K4901に掘り方の一部を切られる。壁面は階段状に掘り下げ、幅45cmの木棺を埋置したものと考えられる。小破片が9点出土するのみであるが、切り合い関係より弥生時代中期後半以前に位置付けられる。

SR4911 (第75図、写真151)

北群で検出するが木棺の痕跡は不明である。掘り方西側に一段平坦面を有し、さらに南北長155m、東西長0.58mの掘り込みを行う。埋土は黒褐色土である。遺物は小破片のみで土師器小皿破片（317）が出土しているが、周辺に中世の遺物を含むピットがまとめており、混入の可能性が高い。

出土遺物（第75図） 317は土師器小皿破片である。外底面は糸切りを行う。

SR4917 (第75図、写真152)

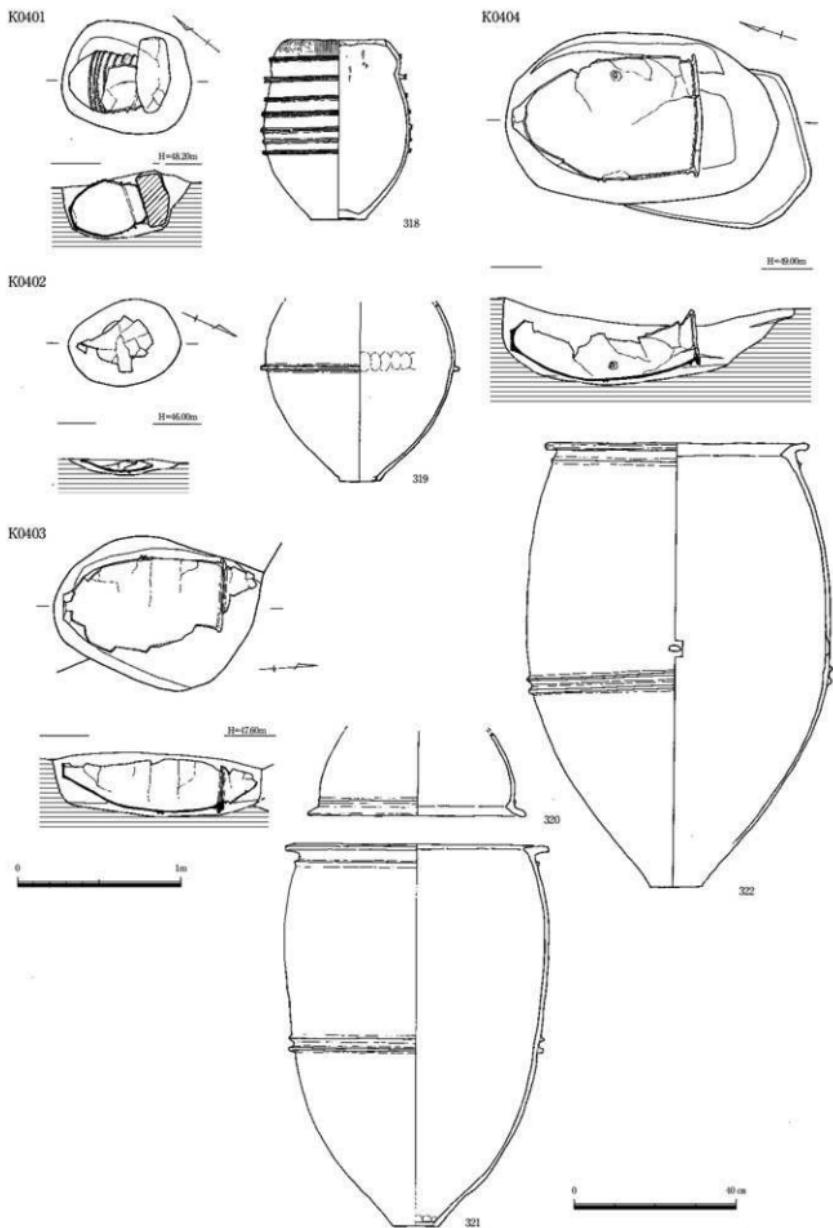
南群で検出した木棺墓で、K0499に切られる。掘り方中央で東及び北側に木棺に伴う橙色粘土を確認するが、木棺痕跡は上面では確認できなかった。棺内埋土はにぶい黄褐色土にぶい黄色土ブロックを含む。また、木棺確認面までの掘り方埋土はにぶい黄褐色土とにぶい黄色土が混合している。木棺確認以下の掘り方埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は小破片4点のみで時期は不詳であるが、切り合い関係より弥生時代中期前半以前に位置付けられる。

(6) 壺棺墓（K）

壺棺墓が埋葬構造の主体であり、弥生時代前期末～中期末を中心とした埋葬が行われており、後期後半まで一部埋葬が継続している。墓群は空闊地をはさんで北群と南群に分けることができる。壺棺墓坑埋土は暗灰黄色土～オリーブ褐色土（2.5Y4/2～4/3）を主体とする。

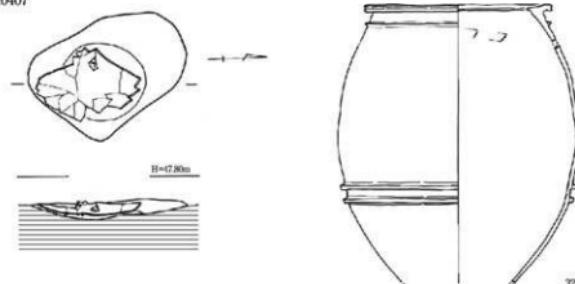
K0401 (第76図、写真155)

北群北側で検出する。周囲からやや離れた斜面際に位置し、口縁部を打ち欠いた瓢形土器に花崗岩自然礫を蓋としている。埋土はオリーブ褐色土である。

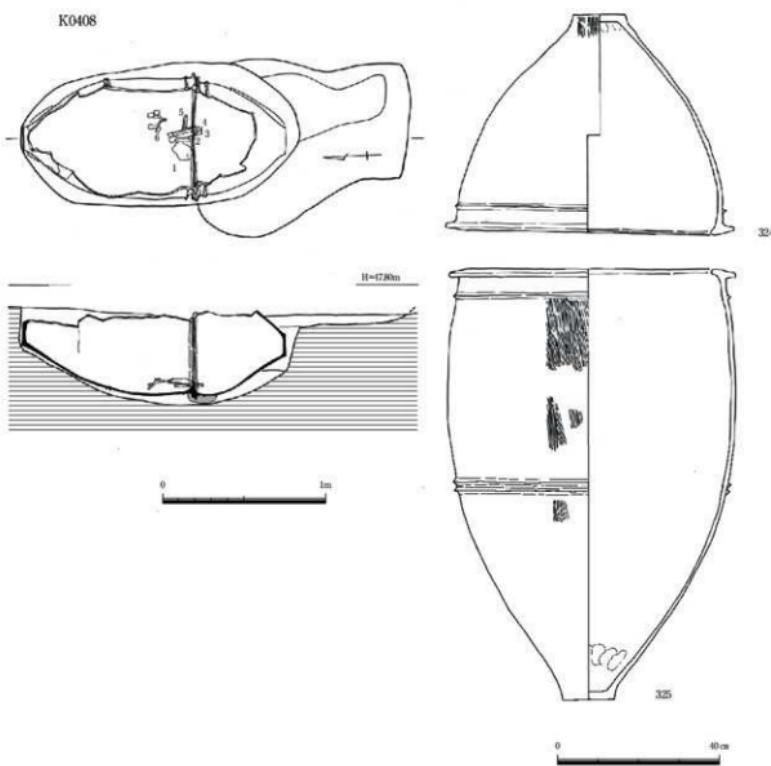


第76図 K0401・0402・0403・0404及び出土遺物実測図 (1/30、1/12)

K0407



K0408



第77図 K0407・0408及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

出土遺物（第76図318、写真326） 瓢形土器の口縁部を打ち欠く。器面の剥落が進んでいるが外面上位に丹塗りを行う。外面最上位には暗文状の縦ミガキを施す。

K0402 (第76図、写真156)

北群東端で検出する。斜面上の平坦面東端に位置している。検出状況から周辺にはさらに埋葬遺構が存在していた可能性が高い。下壺胴部の一部が残存するのみで、埋土は暗黄灰色シルトである。

出土遺物（第76図319、写真326） 底部は平底であろう。偏球形の胴部中位には断面コ字形の突帯を貼付している。調整は外外面ナデにより、にぶい赤褐色を呈する。

K0403 (第76図、写真157)

北群東側で検出する。斜面上の平坦面に位置するため、削平が進んでおり上下両壺の1/3程度が残存するのみである。埋土はオリーブ褐色土である。

出土遺物（第76図320・321、写真326） 320は上壺の鉢である。断面鉤形の口縁部は強く内傾する。内外面ナデを行う。321はにぶい橙色を呈する下壺である。口縁部は逆L字形を呈し、わずかに内傾している。胴部は上位に最大径を有し、頭部に向かってややすぼまる。頭部に1条三角形、胴部の2条のコ字形突帯を貼付する。調整は外外面ナデによる。

K0404 (第76図、写真158)

北群中央で検出する。削平により单棺の1/2程度が残存するのみである。墓坑南壁は斜めに掘り込み、埋土は黄褐色土である。

出土遺物（第76図322、写真326） 口縁部は断面逆L字形で、上面は内傾する。胴部は中位に最大径を有し、断面コ字形突帯2条を貼付する。胴部下位には外面からの焼成前穿孔を行う。器面色調は灰白色を呈し、調整は内外面ナデによる。

K0407 (第77図、写真159)

北群南東側で検出する。斜面上の平坦面に位置しK0408と主軸方位を揃えて並ぶ。墓坑底の一部と下壺胴部の一部が残存するのみである。埋土中から口縁部破片が出土し、部分的に復元が可能である。

出土遺物（第77図323、写真327） 口縁部はわずかに内傾し、断面逆L字形である。胴部は頭部に向かってすぼまり、丸みを帯びている。色調は明褐灰色を呈し、外外面はナデによる。

K0408 (第77図、写真160~162)

北群南東側で検出する。斜面上の平坦面に位置し、K0407と主軸方位を揃える。壺棺は接口式で接合部の下部に橙色粘土による目張りを行う。埋土は黄褐色土である。棺接合部位を中心として人骨がわずかに残存している。残存部分は後頭骨（1）、大腿骨（2・3）、脛骨（4・5）、下顎骨（6）と考えられる。大腿骨が壠った状態であることなどから、横向きの正座に近い状態で下壺の底に向かって頭を低くした埋葬姿勢の可能性が考えられる。

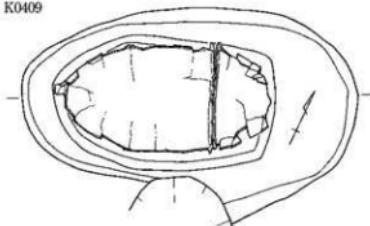
出土遺物（第77図324・325、写真326） 324は上壺の鉢である。T字形の口縁部は外傾し、口縁下に1条の三角形突帯を貼付する。外面に黒色顔料の痕跡が残る。325は口縁部は外傾するT字形を呈する。胴部は砲弾形で、外面上位に継刷毛が残るが全体にナデを行う。胴部外面から口縁部上面までは黒色顔料が認められ、内面にも痕跡的に顔料が残る。色調はにぶい赤褐色である。

K0409 (第78図、写真163・164)

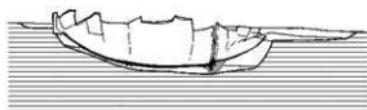
北群南端で検出する。斜面上の平坦面に位置し、K0409→K0410の先後関係となる。埋土は暗黄灰色土である。壺棺は接口式で接合部の下部に橙色粘土による目張りを行う。

出土遺物（第78図326・327、写真326） 326は上壺である。逆L字形の口縁部上面は平坦で、外側が垂れ下がる。327は下壺である。口縁部は外傾するT字形、胴部は砲弾形を呈する。浅黄橙色を呈

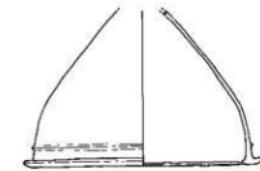
K0409



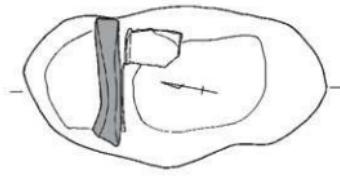
H=48.00m



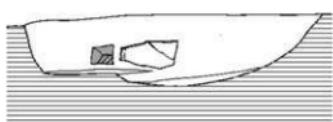
326



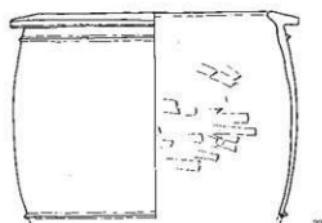
K0410



H=48.00m



0 1m

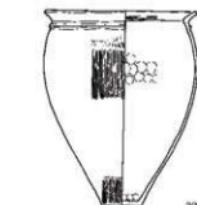
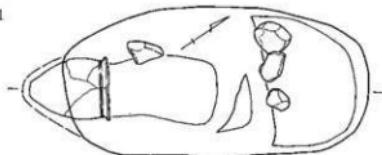


327

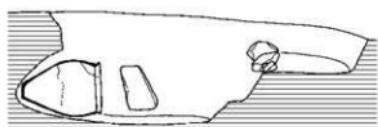
0 40 cm

第78図 K0409・0410及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

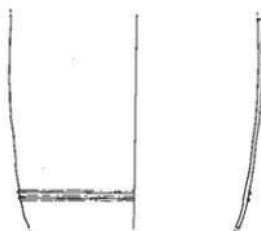
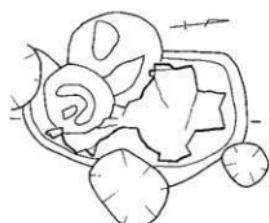
K0411



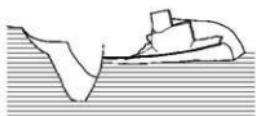
329



K0412

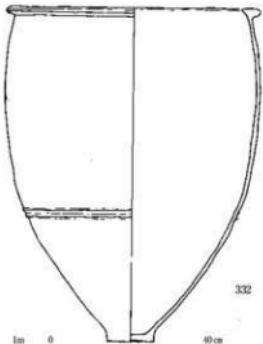
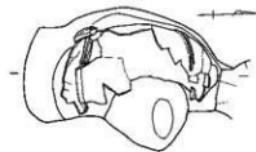


330



331

K0413



332



332

第79図 K0411・0412・0413及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

し、口縁部上面から外面上半に痕跡的に黒色顔料が残っている。

K0410 (第78図、写真163・165)

北群南端で検出し斜面上の平坦面に位置する。埋土はオリーブ褐色土にぶい黄色土ブロックを混含している。墓坑内に少数の甕棺破片が散乱した状態で出土しており、通常の甕棺配置の位置にあつた1破片のみを残して図示している。また、この破片に合わせるように北側に長さ80cm、高さ10cmの橙色粘土を確認した。当初は擾乱の可能性を考えたが、埋土の状態や目張り粘土の残存状況から、甕棺破片で遺体を覆うように埋置したうえで北側に木蓋を設けた埋葬施設であると推定した。

出土遺物 (第78図328) 出土状況に図示した甕破片である。口縁部は外傾するT字形で、口縁下に1条の三角形突帯を貼付する。このほか図示していないが大型甕の破片も出土している。

K0411 (第79図、写真166)

北群南側で検出する。墓坑北側平坦面には花崗岩自然礫3個を据えている。墓坑底には小型甕をほぼ水平に埋置し、甕棺北側には花崗岩自然礫が据えられており、木蓋固定の施設とも考えられる。

出土遺物 (第79図329、写真327) 口縁部は内傾する逆L字形で胴部上位が張り出している。胴部外面に縱刷毛を行い、黒色顔料が明瞭に残る。胴部下半の剥落が進んでいる。

K0412 (第79図、写真167・168)

北群南側で検出する。斜面縁辺に位置し、K0412～0414・0416の4基で一群をなしている。削平が著しく、墓坑底の一部と甕胴部の一部が残存するのみである。埋土は暗灰黄色シルトである。

出土遺物 (第79図330、写真327) 浅黃橙色を呈する胴部破片である。胴部外面はナデを行い、2条の三角形突帯を貼付する。外面のみ黒色顔料が残る。

K0413 (第79図、写真167・169)

北群南側で検出する。斜面縁辺に位置し、K0412～0414・0416の4基で一群をなす。K0412の南側に隣接するが、先後関係は明らかでない。上甕の多くは擾乱を受けていた。埋土は灰黄褐色土である。

出土遺物 (第79図331・332、写真327) 331は上甕で外傾するT字形の口縁部を有する。色調はにぶい橙色を呈し、胴部外面に黒色顔料の痕跡が残る。332は下甕である。口縁部は張り出しの短い逆L字形を呈する。調整は内外面ナデを行い、外面ともに黒色顔料が残る。

K0414 (第80図、写真167・170)

北群南側で検出する。斜面縁辺に位置し、K0412～0414・0416の4基で一群をなしている。K0413と頭位を逆にして並列する。埋土は暗灰黄色シルトである。

出土遺物 (第80図333・334、写真327) 333は上甕である。口縁部は張り出しの短いT字形を呈し、外面に刻みを施す。外面から口縁下内面まで黒色顔料を塗布する。334は下甕である。外傾する口縁部は内側に大きく張り出す。内外面ナデを行い、外面上半に黒色顔料が痕跡的に残る。

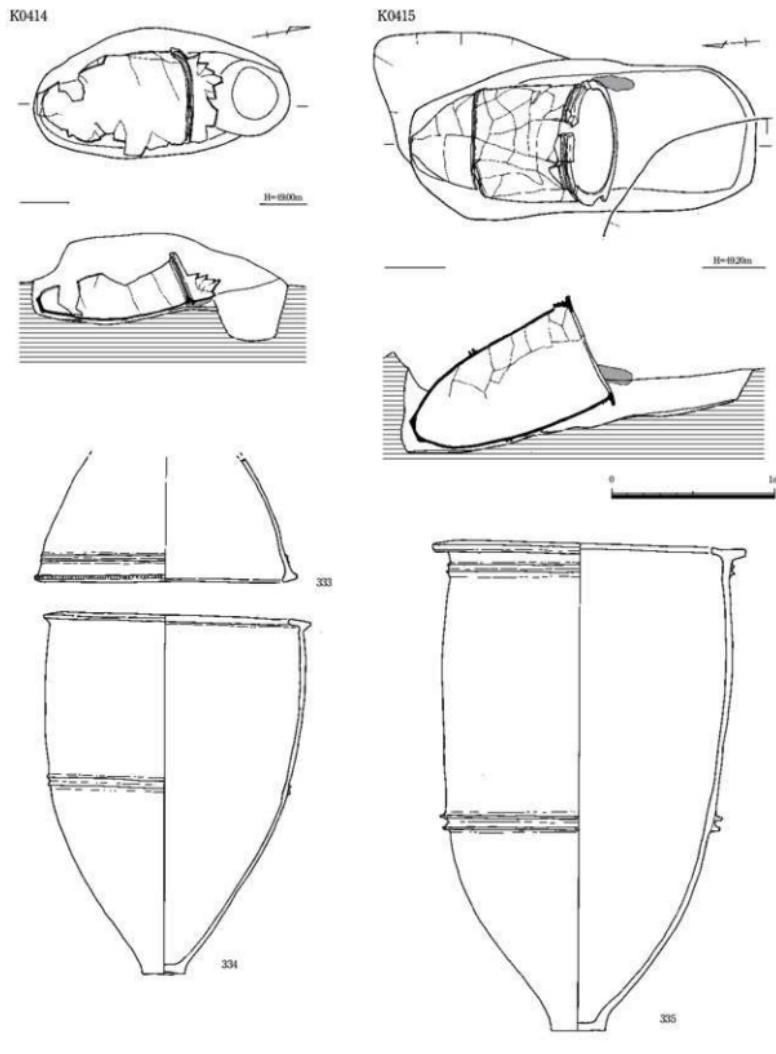
K0415 (第80図、写真171～173)

北群南端で検出する。斜面縁辺に位置し、K0415→K0428の先後関係となる。埋土は灰黄褐色土で、墓坑底は南から北側に緩やかに傾斜する。甕棺は単棺で東側に橙色粘土が認められる。

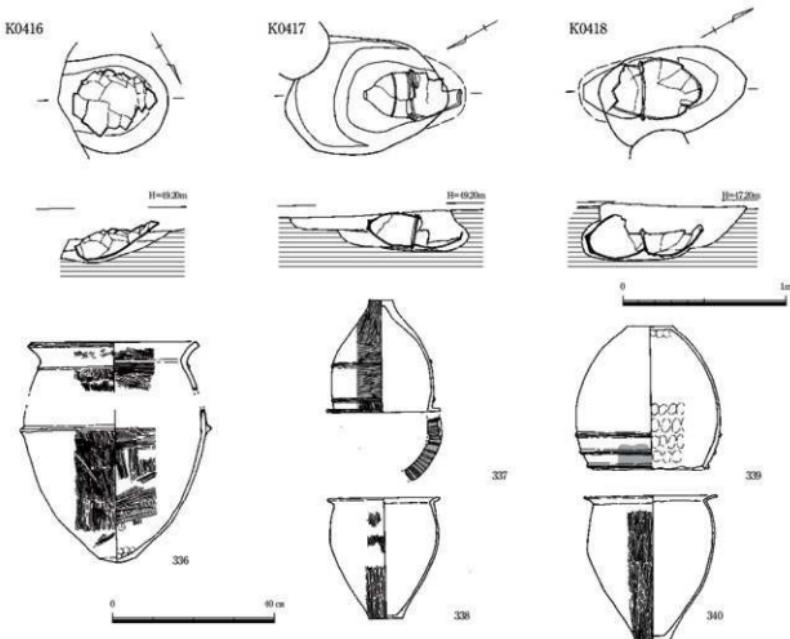
出土遺物 (第80図335、写真327) 橙色を呈する器高1.2mの大型棺である。逆T字形の口縁部は上面が水平で、内外に大きく張り出す。口縁下と胴部中位やや下に各2条の三角形突帯を貼付する。調整は内外面ナデを行い、黒色顔料は認められない。

K0416 (第81図、写真174)

北群で検出する。斜面縁辺に位置し、K0412～0414・0416の4基で一群をなしているが、K0416のみが弥生時代後半に位置付けられる新出の甕棺である。削平が著しく、墓坑底の一部と甕下半部が



第80図 K0414・0415及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)



第81図 K0416・0417・0418及び出土遺物実測図（1／30、1／12）

残存するのみである。埋土は暗灰黄色シルトである。

出土遺物（第81図336、写真328） 胴部下半と口縁部の一部が出土している。口縁部はく字形に屈曲する。胴部内外面は刷毛を行うが、外面にタタキの痕跡が残る。底部は凸レンズ状である。

K0417（第81図、写真175）

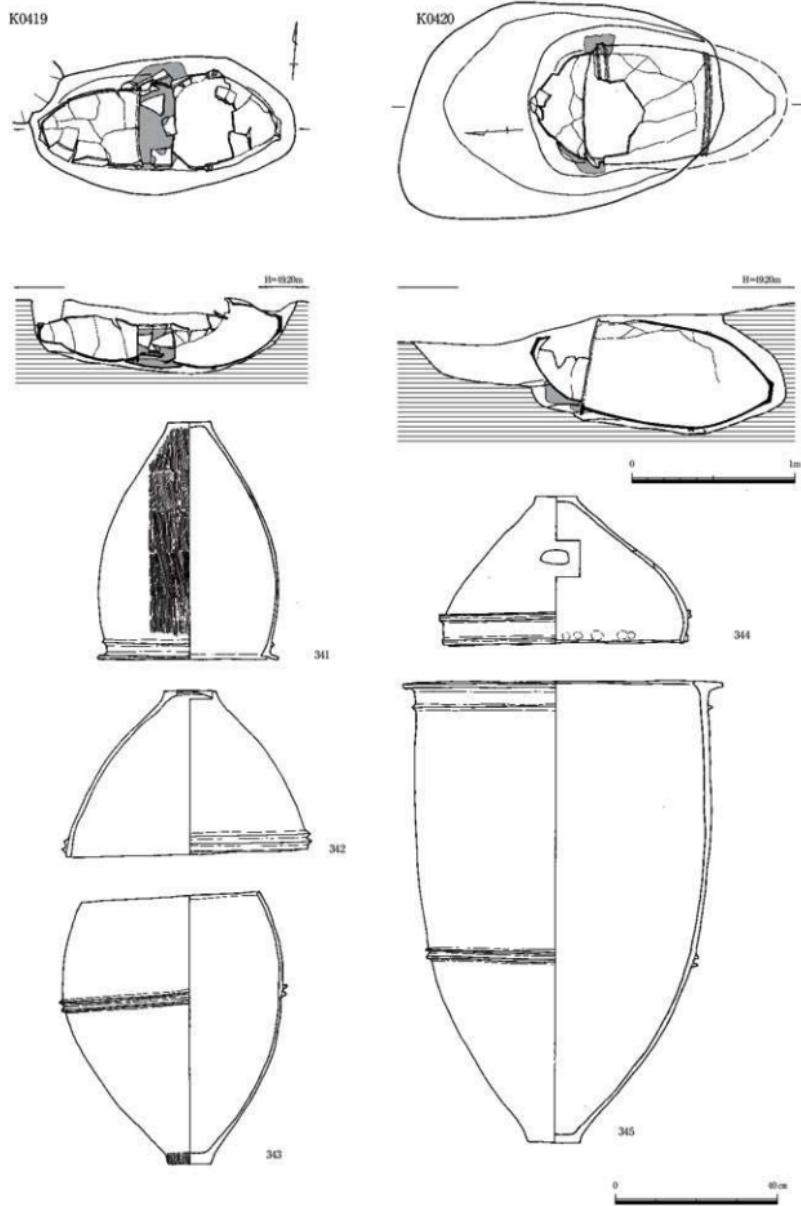
北群南端部で検出し、K0418と主軸を揃える。掘り方は南北長1.0m、東西長0.7mの平面隅丸長方形を呈し、掘り方断面は北側に一段の平坦面を有する階段状となる。

出土遺物（第81図337・338、写真328） 337は上壺である。丹塗り土器の壺で逆L字形の口縁部上面は水平である。口縁部外面には刻みを行い、頸部には暗文状のミガキを施す。338は下壺である。口縁部はく字形に屈曲し、外面は継刷毛の後ナデを行う。

K0418（第81図、写真176）

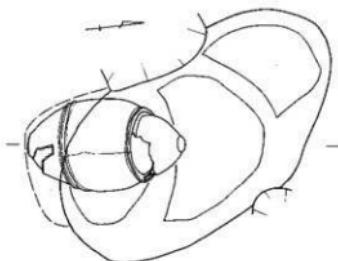
北群南端部で検出する。K0417の南側に主軸方向を揃えて位置する。掘り方は南北長0.9m、東西長0.55mの平面長円形を呈し、掘り方断面は北側に一段の平坦面を有し、斜めに掘り込んでいる。

出土遺物（第81図339・340、写真328） 339は上壺である。瓢形土器の口縁部を打ち欠いて使用している。口縁下に丹塗りが残る。また、胴部外面下半には黒色顔料を塗布している。340は下壺である。口縁部はく字形に屈曲する。胴部は上位に最大径を有し底部は平底となる。調整は外面継刷毛を行い、内面はナデによる。色調は橙色を呈する。

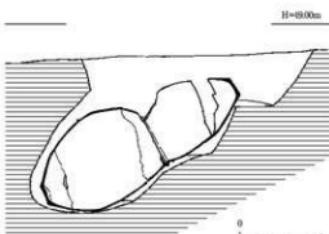
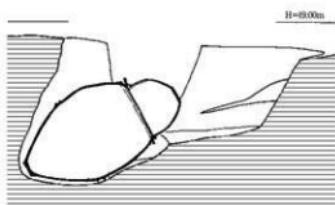
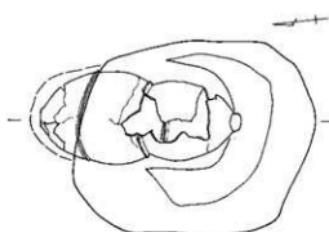


第82図 K0419・0420及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

K0422



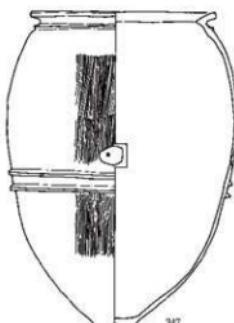
K0423



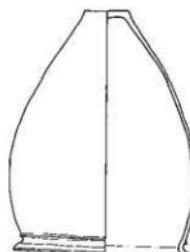
0 1m



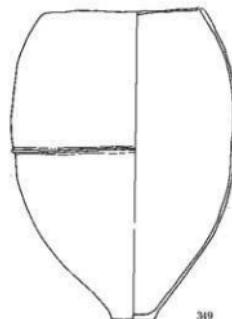
346



347



348



349

第83図 K0422・0423及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

K0419 (第82図、写真177)

北群南端部で検出し、K0417の東側に隣接する。下壺は口縁部付近から打ち欠きを行い、上壺との間には20cmほどの間隔をあけている。その間は別個体下半部の破片で覆い（中壺）、中壺の内面と側面外側には橙色粘土を貼付し破片を固定している。

出土遺物（第82図341～343、写真328） 341は上壺である。口縁部は内傾する逆L字形を呈する。胴部外面には継刷毛を行い、黒色顔料を塗布する。342は復元した中壺である。壺の上半部を打ち欠き、底部には穿孔を行っている。343は下壺で口縁部を打ち欠いている。胴部中位に最大径を有し、2条の三角形突帯を貼付している。調整は内外面ナデによる。

K0420 (第82図、写真178)

北群南側で検出する。SR0437の東側に並列し、SR0437→K0420の関係となる。掘り方は北側に平坦面を有する階段状となる。上壺は上半部を打ち欠き、下壺との接合部全周に橙色粘土を貼付する。

出土遺物（第82図344・345、写真329） 344は壺の上半部を打ち欠いて上壺としている。橙色を呈し、穿孔を有する胴部には2条の断面M字形突帯を貼付する。345は下壺である。口縁部は外側に張り出しが強い鉤形を呈する。色調はにぶい褐色で、調整は胴部内外面ナデによる。

K0422 (第83図、写真179)

北群中央部で検出し、K0447の東側に位置する。掘り方は北側に2段の平坦面を有する階段状となり、壺棺挿入部は底部が抉れ込んでいる。上壺は鉢を用い、接合部は接口式となる。

出土遺物（第83図346・347、写真329） 346は上壺である。口縁部はく字形に屈曲し、胴部には継刷毛を行う。色調は黄橙色である。347は断面逆L字形の口縁部は強く内傾する。胴部は丸みを帯び、外面に継刷毛を行う。また、胴部外面から口縁部内面まで黒色顔料が残っている。

K0423 (第83図、写真180)

北群で検出し、K0422の北側に位置する。掘り方は南北長1.45m、東西長1.2mで、南側に一段平坦面を有し、墓坑底は大きく北側に抉り込む。下壺は口縁部を打ち欠き、接合部は接口式となる。

出土遺物（第83図348・349、写真329） 348は上壺である。口縁部はく字形に屈曲し、口縁部外面が肥厚する。胴部外面は継刷毛の後ナデを行い、上半に煤が残っている。349は口縁部を打ち欠いた下壺である。胴部中位に1条のコ字形突帯を貼付する。浅黄橙色を呈し、内外面ナデによる。

K0424 (第84図、写真181)

北群中央で検出する。K0429・0430の南側に位置する。掘り方は一辺1.2～1.3mの平面隅丸方形に近い。北西隅部に斜坑を掘り込み、壺棺を埋置する。

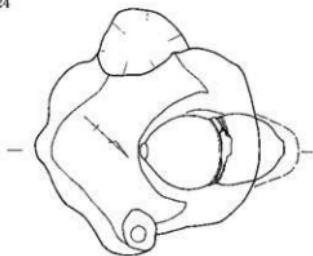
出土遺物（第84図350・351、写真329） 350は上壺である。口縁部はく字形に屈曲し、内側には稜を有する。胴部外面には継刷毛を行い、痕跡的に黒色顔料が残る。351は下壺である。350同様く字形の口縁部内面には稜を有する。胴部外面には継刷毛の後ナデを行い、黒色顔料がわずかに残る。

K0427 (第84図、写真182)

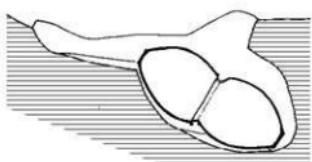
北群で検出する。焼土坑SK0421に掘り方の一部を切られるが、上壺の一部は搅乱を受けず焼土坑内に残されたため、被熱痕跡が認められる。また同様に土坑内に残された花崗岩自然礫も本来上壺安定のため据えられたものと考えられる。上壺と下壺の型式的な差異が大きい。

出土遺物（第84図352・353、写真330） 352は上壺で口縁部はく字形を呈し胴部上位が張り出す。底部は平底で胴部下半および底部に穿孔を有する。353は下壺である。口縁部は上端に粘土帶を貼付し鉤形とする。頭部には1条の三角形突帯を貼付し、胴部は偏球形を呈する。胴部外面調整は継刷毛を行う。胴部器表面は外面にぶい橙色、内面褐灰色を呈する。

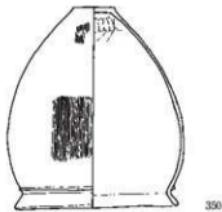
K0424



H=0.00m

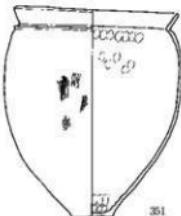


H=0.00m



350

352



351



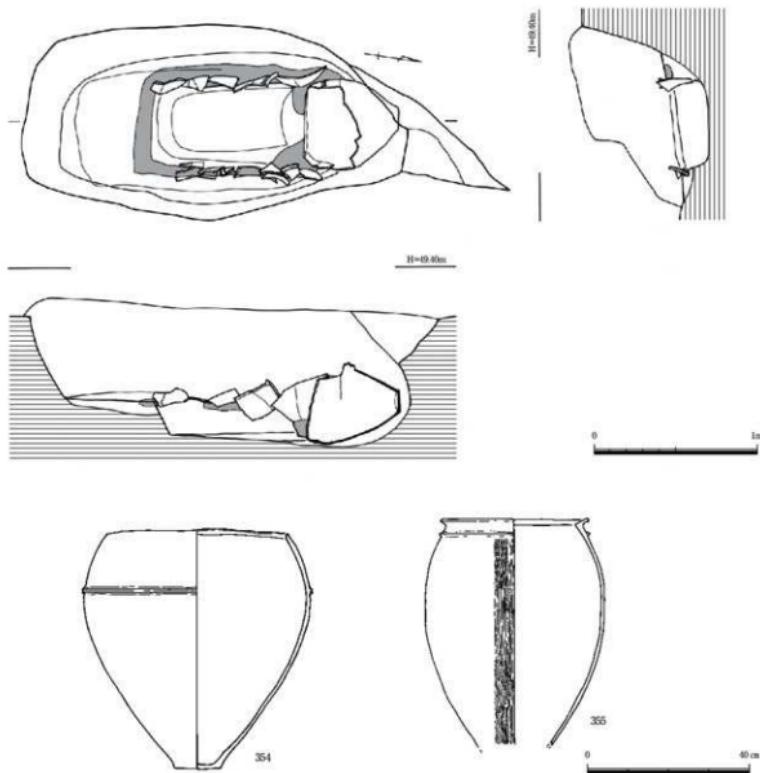
353

0 40cm

第84図 K0424・0427及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

K0428 (第85図、写真171・172・183・184)

北群南端で検出し、K0415・0441を切る。掘り方は平面隅丸長方形で、埋葬主体は上部1/4程を割り取った壺を埋置し、その南側に別個体の甕上半部破片を東西両側に並べた上で、3方向に固定のための橙色粘土を貼り付けている。北側小口部分および蓋には木質の使用が考えられるが、明らかではない。また、墓坑南半では埋葬主体構築時に灰オリーブ色土で貼り土している。

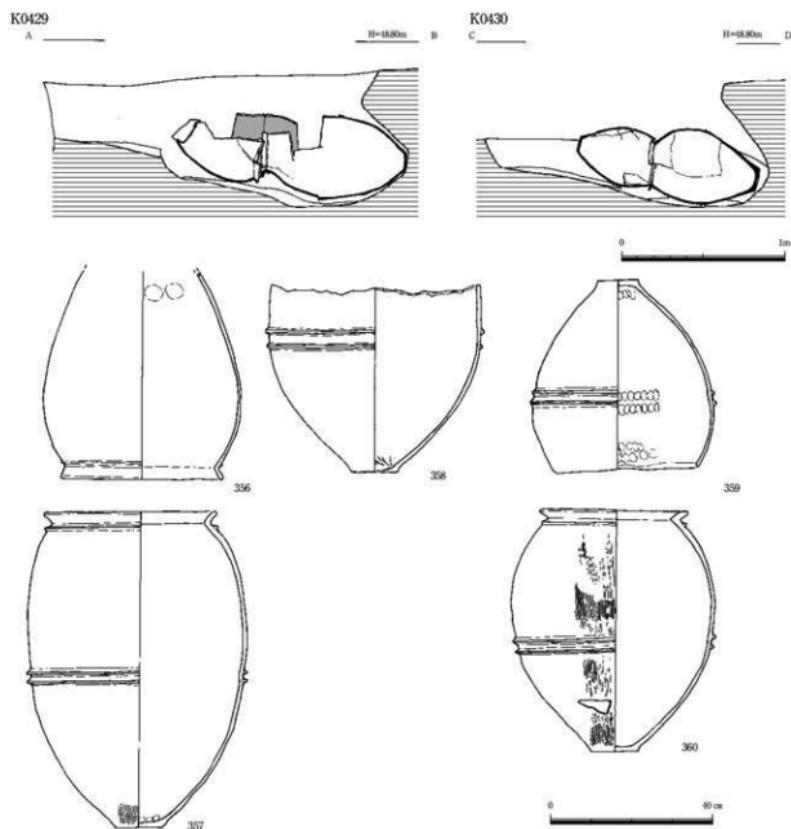
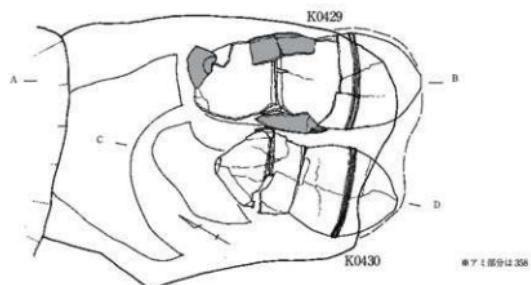


第85図 K0428及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

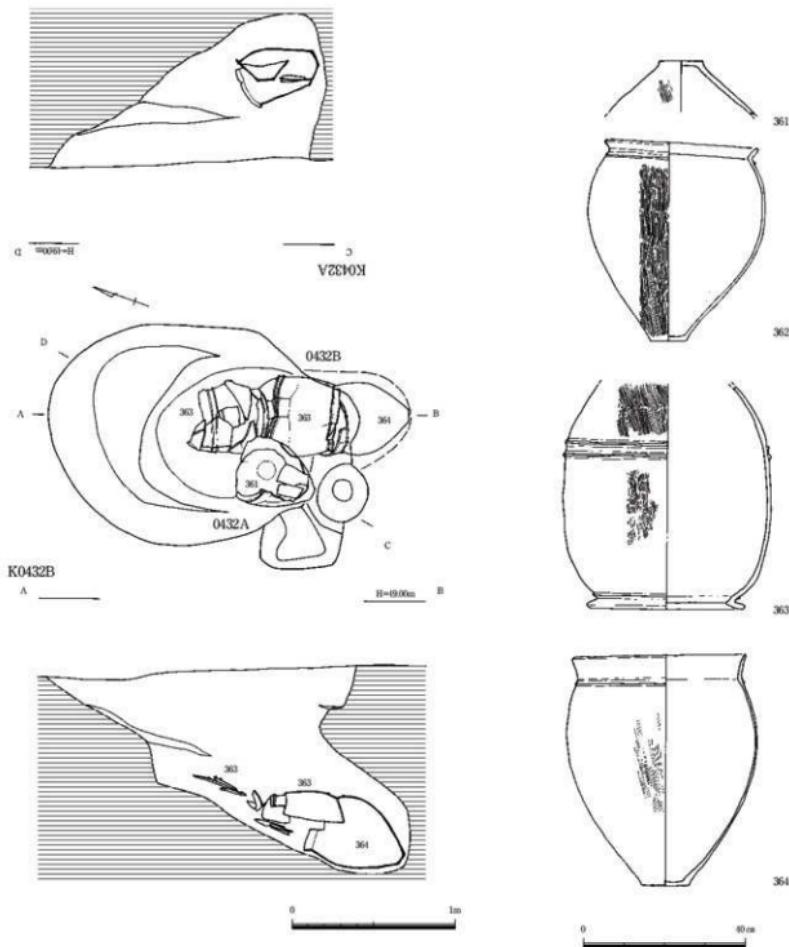
出土遺物（第85図、写真330） 354は口縁部を打ち欠いて下壺としたものである。胴部には断面M字形の突帯を1条貼付する。外面には黒色顔料が残る。355は両側片に並べられた破片を復元したものである。口縁部は内傾する逆L字形で、胴部外面には綴刷毛を行い、黒色顔料が認められる。

K0429 (第86図、写真185)

北群中央で検出する。K0429・0430が並列して出土するが、上面は暗灰黄色土で切り合い関係は認められず、墓坑北側の平坦面露出時に埋土の違いが表れ、K0429→K0430の先後関係を確認した。最終的に相互の壺棺は非常に近接した位置に埋葬されており、この2基を同一墓坑に埋葬する意図を感じる出土状態である。埋土・壺棺の配置などから①当初長方形土坑を掘り込み、②東側にK0429を埋置し、長方形土坑の掘り方途中まで埋め戻す。③西壁側にK0430を埋葬し、全体を埋め戻す。以上の埋葬状況を推測している。K0430との切り合いが確認できる北側平坦面以下の埋土はオリーブ褐色土



第86図 K0429・0430及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

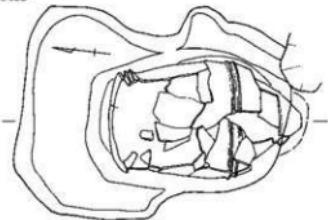


第87図 K0432及び出土遺物実測図 (1/30、1/12)

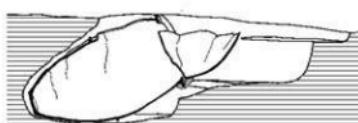
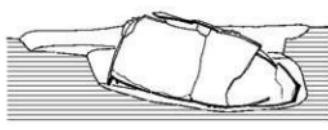
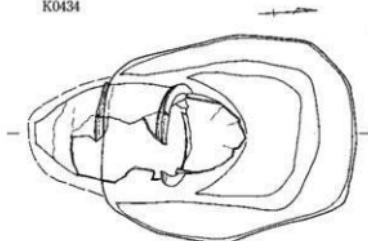
ににぶい黄橙色土ブロックを含んでいる。壺棺は上壺の底部付近を失っており、別個体底部で欠失部分を上から覆い、底部破片と同じ個体で上下壺の接合部を左右から覆っている。

出土遺物（第86図356～358、写真330） 356は上壺で、底部付近を欠失している。口縁部はく字形に屈曲し、外面が肥厚する。調整は内外面ナデによる。357は下壺である。口縁部はく字形に屈曲し、頭部外面には突帯を貼付する。調整は内外面ナデによるが、外面底部付近には綿刷毛が残る。ま

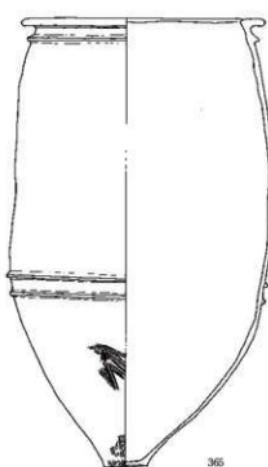
K0433



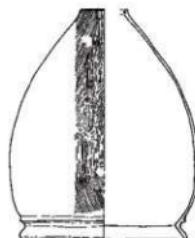
K0434



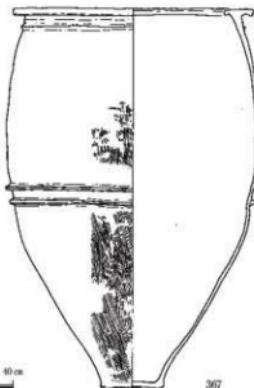
0 1m



365



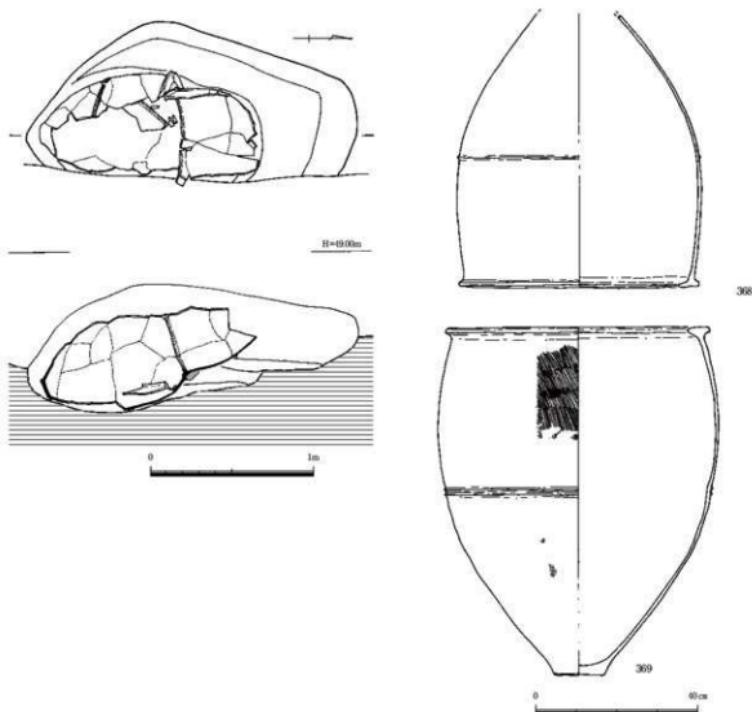
366



367

0 40 cm

第88図 K0433・0434及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)



第89図 K0441及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

た胴部外面には黒色顔料が認められる。色調はにぶい橙色である。358は接合部を覆う壺の破片を接合したもので、壺下半部の1/2程となる。色調は灰白色を呈し、内外面の調整はナデによる。

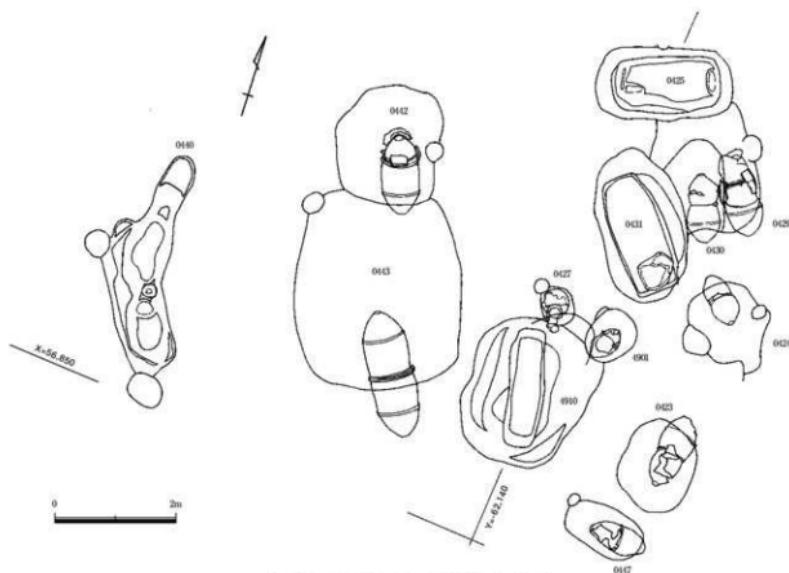
K0430 (第86図、写真185)

北群で検出する。K0429と並列し、埋葬順序はK0429→K0430となる。K0430は墓坑西壁に沿って埋葬されており、K0429壺棺に非常に近接するが、壺棺本体には接しておらず、毀損もしていない。K0429との切り合いが確認できる北側平坦面以下は黒褐色土ににぶい黄橙色土ブロックを含む。

出土遺物 (第86図359・360、写真331) 359は口縁部を打ち欠いて上壺とする。色調はにぶい橙色で、内外面ナデを行う。360は口縁部がく字形に屈曲し、胴部は丸みを帯びている。調整は胴部外面継刷毛、内面ナデにより、胴部下位には焼成後の穿孔が行われている。

K0432 (第87図、写真186・187)

北群北側で検出する。同一墓坑に2組の壺棺墓が埋葬され、西側をA、東側をBとした。AはBの直上に埋葬され、上壺に用いた壺の底部が下壺内に転落している。またBは見かけ上3個体に見えるが、中壺と上壺は同一個体で、壺の上半部をほぼ半裁してともに口縁部を下壺方向に向けて破片で上か



第90図 K0442・0443配置図 (1/80)

ら覆うように配置している。また、Aの上甕はこのB上・中甕と接合関係を有する同一個体底部である。墓坑埋土に切り合いも認められず、同一の甕を2組の甕棺に使用していることなどから、同時に埋葬が行われた可能性が高いものと考えられる。

出土遺物（第87図、写真331） 361・362はAの壺棺である。361は底部破片で外面に刷毛目が残る。363と接合し一個体となる。362は下壺である。口縁部はく字形に屈曲し、胴部外面には刷毛目を有する。また胴部外面には煤が付着する。363はB上壺と中壺が接合したものである。灰白色を呈し、胴部外面には黒色顔料の痕跡が残る。364はBの下壺で、口縁部の立ち上がりが強い。胴部は内外面ナデを行い、外面には縦刷毛が残る。また胴部外面には黒色顔料が痕跡的に残る。

K0433 (第88図、写真188・189)

北群南西側で検出し、K0434と軸を揃えて並ぶ。階段状の掘り方を有する単棺で、最下段の掘り方は甕の大きさに合わせて掘り下げられている。口縁部周辺に粘土の貼付けは認められない。

出土遺物（第88図365、写真330） 口縁部は逆L字形を呈し、上面は内傾する。胴部は内外面ナデを行なうが、外面下半には刷毛目が残る。また胴部外面に黒色顔料が残る。

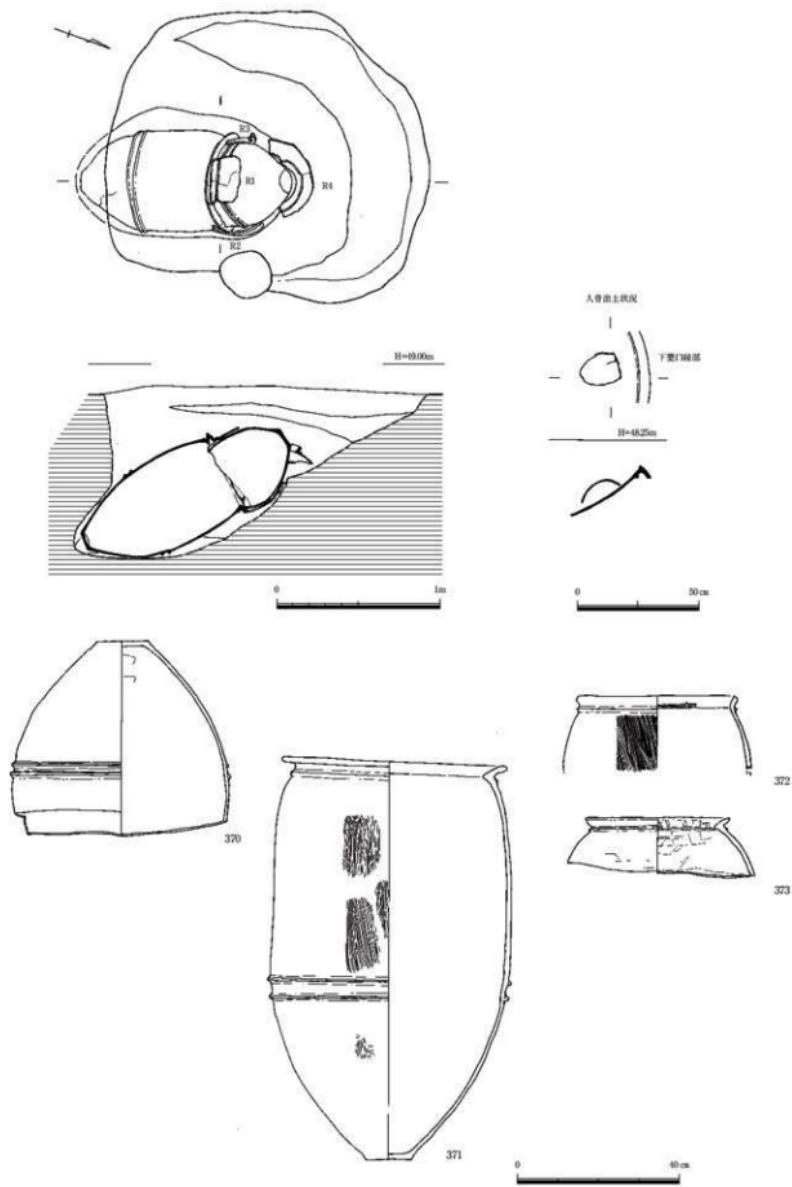
K0434 (第88図、写真188・190)

北群南西側で検出し、K0433と軸を揃えて並ぶ。上壺には口縁部が残る部分があり、打ち欠きではない。また、底面側の蓋接合部分に橙色粘土を貼付している。

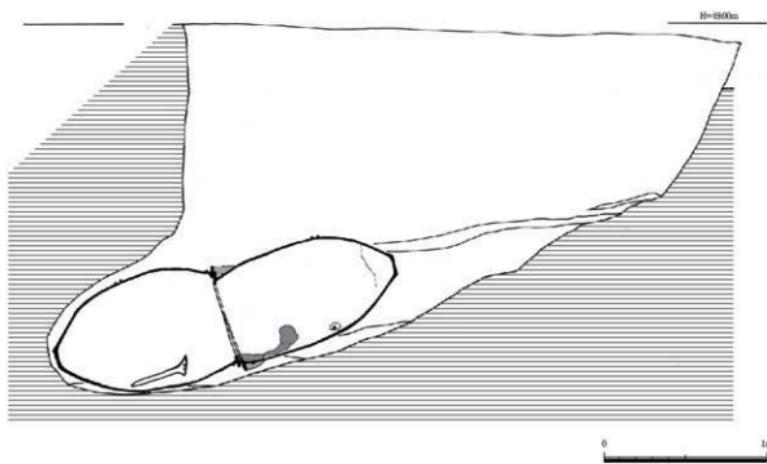
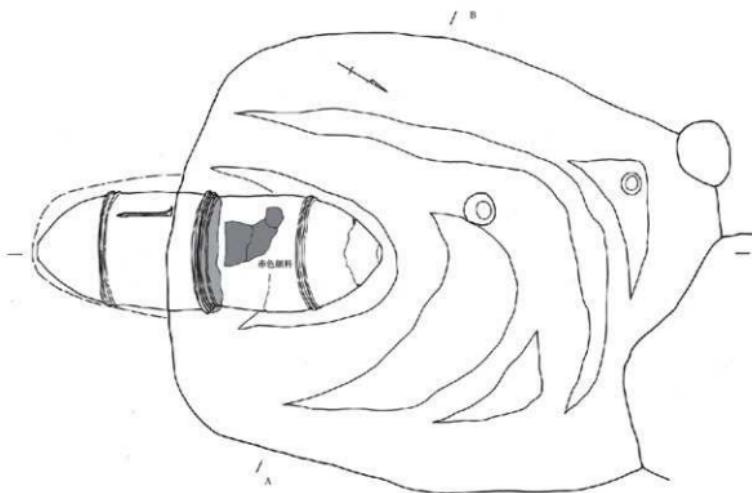
出土遺物（第88図366・367、写真331） 366は上壺である。口縁部はく字形に立ち上がる。胴部外面は綿刷毛を行い、黒色顔料が残っている。367は下壺である。口縁部は断面T字形を呈し、上面は水平である。胴部の中位に2条のコ字形突帯を貼付し、外面には黒色顔料が痕跡的に残る。

K0441 (第89図、写真191)

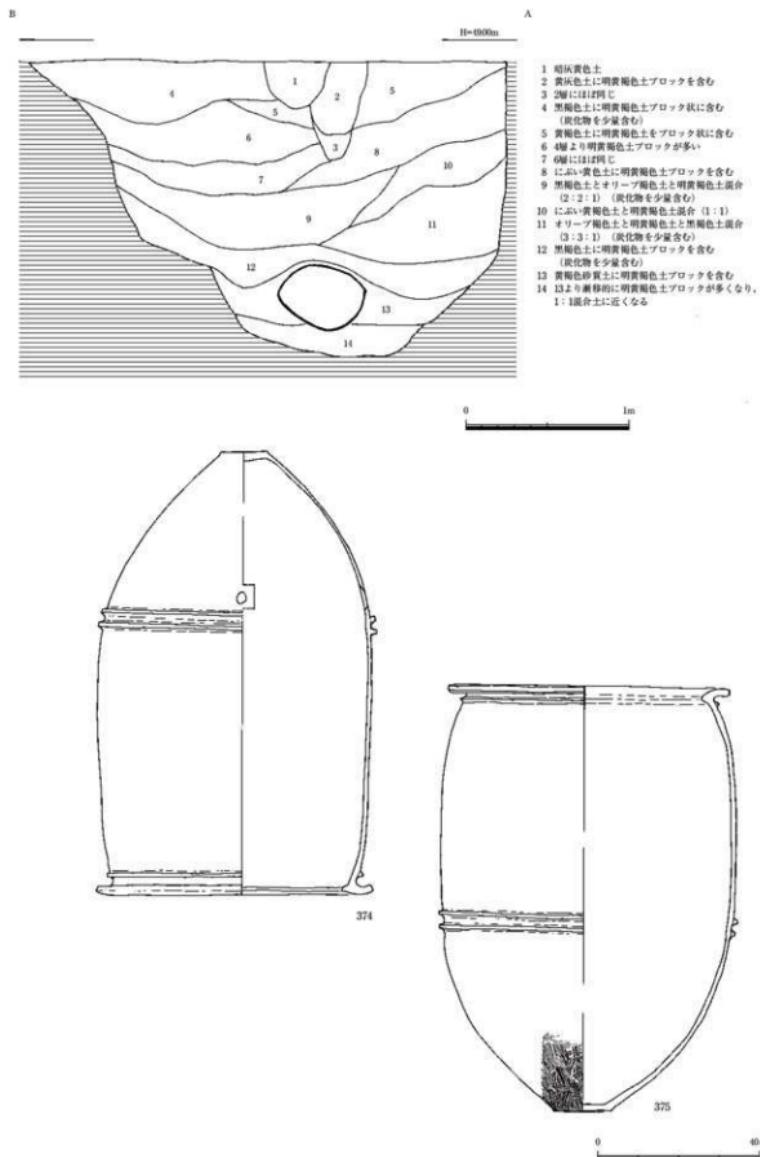
北群の東端部で検出する。下垂が墓坑底部と接する部分で径30cmほどの範囲で腹部が欠損している



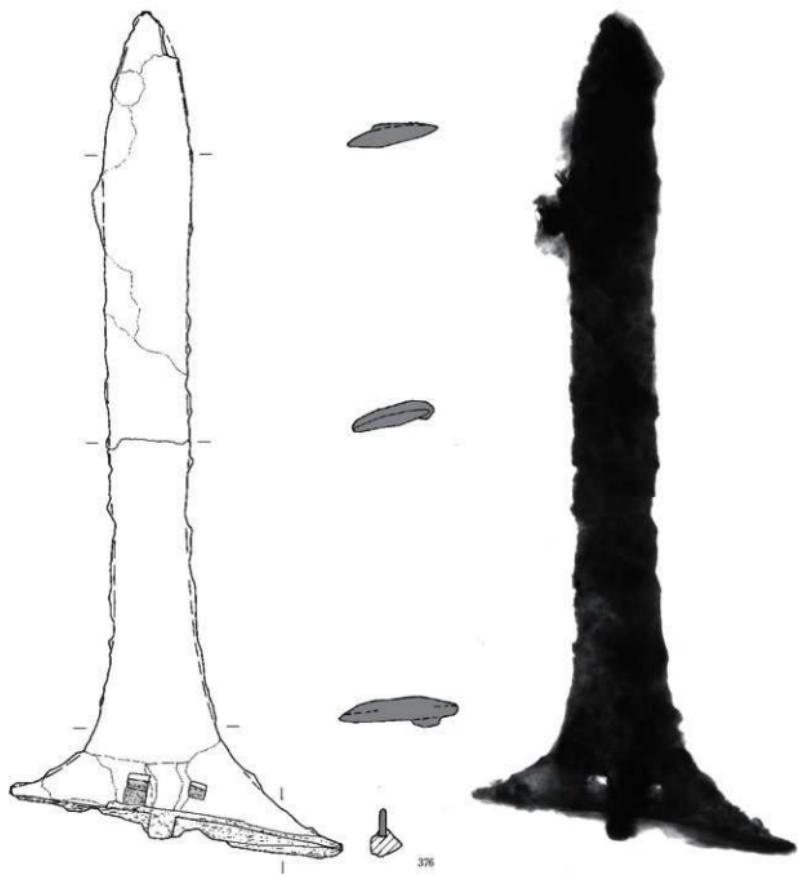
第91図 K0442及び出土遺物実測図 (1/20, 1/30, 1/12)



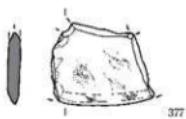
第92圖 K0443實測圖 (1/30)



第93図 K0443土層図及び出土遺物実測図1 (1/30, 1/12)



376



377



第94図 K0443出土遺物実測図2 (1/2)

が、原因は不明である。接口式で下側にのみ橙色粘土が認められる。

出土遺物（第89図368・369、写真332） 368は上壺である。口縁部は内側に強く張り出し、上面は外傾する。内外面に黒色顔料を塗布している。369は張り出しが小さく、上面が水平となる断面T字形を呈する。外面上部には綴刷毛が残り、内外面に黒色顔料が明瞭に残る。

K0442（第90・91図、写真192～197）

北群中央西側で検出し、K0443の北側掘り方を切りこれと直線的に並んでいる。上壺上部をR1～R3の破片で覆い、R4は底部を支えるように配置されている。R1とR2が同一個体、R3とR4が同一個体である。下壺の上部に前頭骨が残っており、北側が後頭部となる。

出土遺物（第91図370～373、写真332） 370は上壺で壺の上半部を打ち欠いている。胴部に2条のコ字形突帯を貼付する。内外面ナデにより、外面には黒色顔料の痕跡が残る。371は下壺である。口縁部は内傾する逆L字形を呈し、胴部中ほどよりやや下位に2条のコ字形突帯を貼付する。胴部外面には綴刷毛が残る。372はR1・R2の接合資料である。全周の1/2に復元できる。色調は淡橙色で、口縁部はく字形に屈曲し、外側が肥厚する。373はR3・R4の接合資料で、上半部が全周する。色調は灰白色を呈する。内外面ナデを行い、内面には小口痕跡が明瞭に残る。

K0443（第90・92・93図、写真196～206）

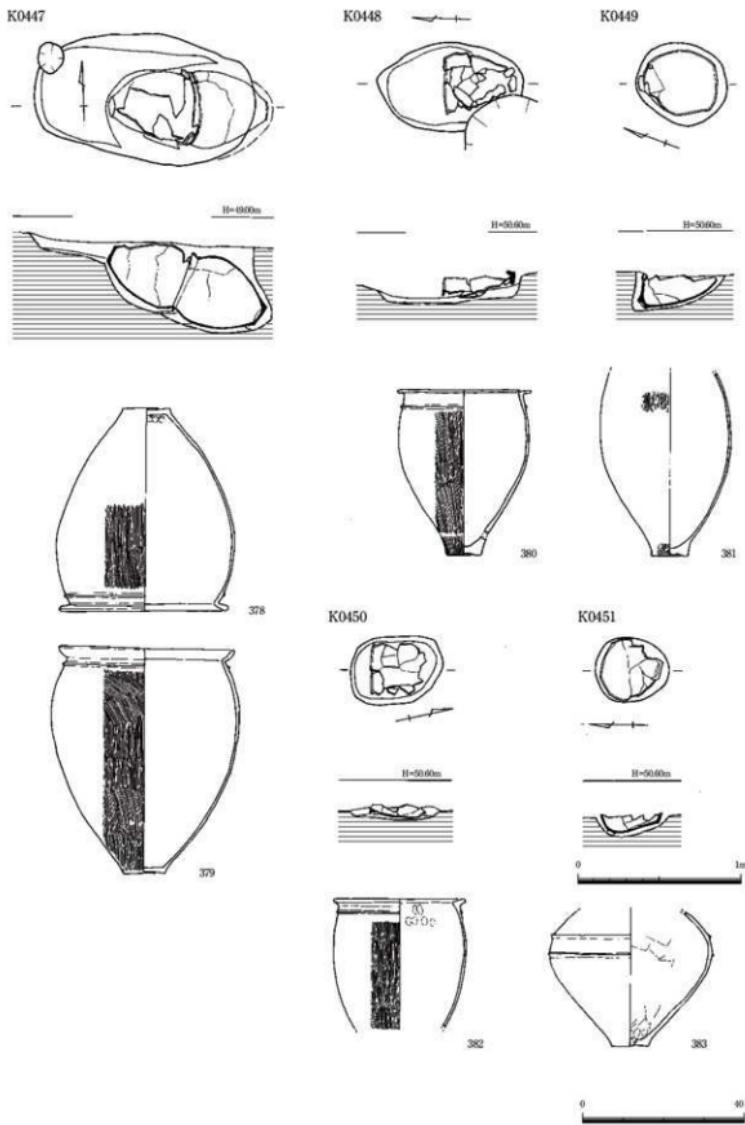
北群中央西側で検出し、掘り方北側をK0442に切られる。墓坑は3.4m×2.8mの平面隅丸長方形を呈し、北側から階段状に掘り下げを行い、平坦面には深さ20～30cmのピットが残る。検出面から墓坑底までの深さは2.15mで周辺の墓坑と比べても非常に深く、壺棺埋置後均質な黄褐色砂質土（13層）で壺棺が隠れるまで丁寧に埋め、これより上層は混合土による埋め戻しを行なう。祭祀行為等の痕跡は認められなかったが、壺棺を封印するかのように非常に丁寧に埋めている。壺棺は破損が少ないため土砂の流入は少量であった。接合部には橙色粘土がほぼ全周する。上壺には外面からの穿孔が行われ、墓坑底側に据えている。上壺下側の口縁部付近には水銀朱が広がっており、下壺東側には鉢を底に向けた状態で鉄戈が副葬されていた。また、K0443の西側には弧状のSK0440が位置している。K0443の墓域を区画するものとも考えられ、K0443とこれに連なるK0442には特別な位置付けがなされている。

出土遺物（第93・94図、写真332・345・356） 374は上壺である。浅黄橙色を呈し、口縁部は逆L字形となる。胴部上半は直線的に立ち上がり、頸部近くですばまる。調整は内外面ナデによる。胴部下位に2条のコ字形突帯を貼付し、下位には穿孔を行う。外面から口縁部上面にかけて黒色顔料が残っている。375は下壺である。口縁部は内傾する逆L字形である。色調は灰白色で、口縁部上面から外面全体に黒色顔料が認められる。胴部の調整は内外面ナデを行うが、外面下半には部分的に綴刷毛が残る。376は完存する鉄戈である。全長33.8cm、身最大幅3.5cm、最少幅2.9cm、関長13.9cmで、細身の中鋒式と長鋒式の中間的な形態をなす。折損断面から鍛造品と考えられ、断面形状はレンズ状を呈し鎧は認められない。また身部片面には銹化し断面蒲鉾型を呈する鞘状の痕跡が残る。緊縛孔は方形で、孔内には紐痕跡が残存している。関はわずかに曲がり、身の正中線との角度は98°である。関には茎を噛みこんだ状態で柄の本質が残存している。377は砂岩製の石包丁破片である。

K0447（第95図、写真207）

北群中央部で検出する。K0423の南側に位置し、これに直交する。墓坑は1.35m×0.8mの平面隅丸長方形を呈する。西側に一段平坦面を有し、東壁は壺棺挿入に合わせて10cmほど抉れています。

出土遺物（第95図378・379、写真333） 378は上壺である。口縁部は内傾する逆L字形を呈する。頸部には断面三角形の突帯を貼付し、胴部上位に最大径を有する。胴部調整は外面上半綴刷毛、下半ナデを行う。色調は橙色で、外面には黒色顔料の塗布が認められる。379は下壺である。く字形に屈



第95図 K0447・0448・0449・0450・0451及び出土遺物実測図 (1/30、1/12)

曲する口縁部はわずかに内湾気味となる。胴部は上位が張り出し、外面全体に縦刷毛を行い、内面はナデによる。色調は浅橙色で外面には黒色顔料の痕跡が残る。

K0448 (第95図、写真214)

南群北端で検出する。K0452の東側に位置し主軸を揃えて並列する。小型の単棺で削平により1/2以上を失っている。墓坑は長軸0.9m、短軸0.55mの長円形を呈し、底面は平坦である。

出土遺物（第95図380、写真333） にぶい橙色を呈する小型の壺である。口縁部は上面が内傾し、断面逆L字形を呈する。胴部は上位に最大径を有し、底部はやや薄手の上げ底である。胴部調整は外面縦刷毛、内面ナデにより、外面上半には煤が付着する。

K0449 (第95図、写真215)

南群北西側で検出する。K0477・0478の墓坑上面で確認し、これに後出する小型棺である。削平により壺の上半部分を失っている。

出土遺物（第95図381、写真333） 口縁部を欠失する細身の壺である。底部は薄手の上げ底である。胴部調整は外面縦刷毛、内面にはナデを行う。色調は橙色を呈し、胴部外面には黒色顔料を塗布した痕跡が残る。

K0450 (第95図、写真216)

南群北西側で検出する。K0449同様K0477・0478の墓坑上面で確認した小型棺である。これら4基はいずれも下壺底部を北側に挿入しており、北側のK0448・0452とは相反し、南側のK0451・0458・0459とは向かいあっている。削平により墓坑底面付近のみ残存している。

出土遺物（第95図382、写真333） にぶい褐色を呈する小型の壺である。断面逆L字形の口縁部は上面が内傾する。口縁下に1条の三角形突帯を貼付し、胴部は上位に最大径を有する。胴部調整は外面縦刷毛、内面ナデにより、外面には煤が付着する。

K0451 (第95図、写真217)

南群西側で検出する。K0458・0459の墓坑北側上面で確認した小型棺である。土色の判別が困難で墓坑は不明瞭である。横置する壺の1/3程が残るのみである。

出土遺物（第95図383、写真333） 頸部より上を欠失する壺である。胴部上位に最大径を有し、2条の三角形突帯を貼付する。調整は内外面ナデによる。

K0452 (第96図、写真218)

南群北端で検出する。SC0453を切り、K0448に並列する中型の単棺である。埋土は暗灰黄色土で、掘り方は0.9m×0.7mの隅丸長方形で底面は平坦である。

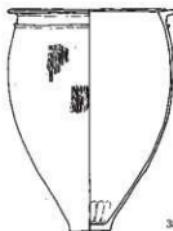
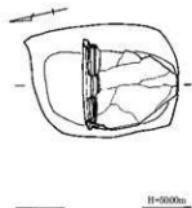
出土遺物（第96図384、写真333） 口縁部は断面逆L字形を呈し、上面はわずかに内傾する。最大径は胴部上位にあり、口径とほぼ同じである。調整は内外面ナデにより、外面には刷毛目が残る。焼成はにぶい橙色で、外面上半部には黒色顔料が痕跡的に残る。

K0455 (第96図、写真219)

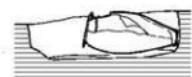
南群中央東側で検出し、K0473→K0455の先後関係となる。掘り方は長軸1.6m、短軸0.7mで、南側に一段平坦面を有し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色土である。壺棺は小型と中型の壺を用い、合せ口部は接口式となるが、接合部に粘土は認められない。

出土遺物（第96図385・386、写真334） 385は上壺である。断面く字形の口縁部は外反気味に屈曲する。胴部外面には刷毛目が残り、内面はナデである。外面に黒色顔料が痕跡的に残る。386も口縁部はく字形に屈曲する。胴部上位に最大径を有し、最大径は口径を上回る。外面縦刷毛の後ナデを行い、内面はナデによる。色調は橙色を呈し、外面に黒色顔料が残る。

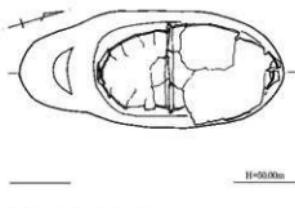
K0452



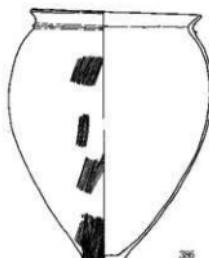
384



K0455

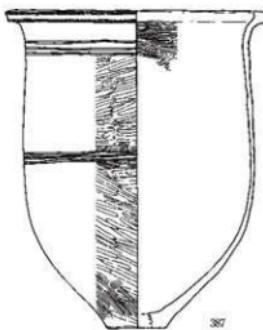
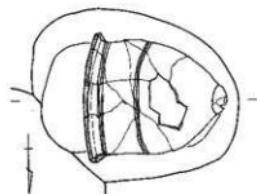


385

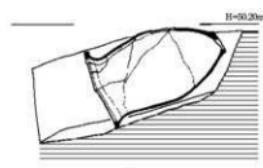


386

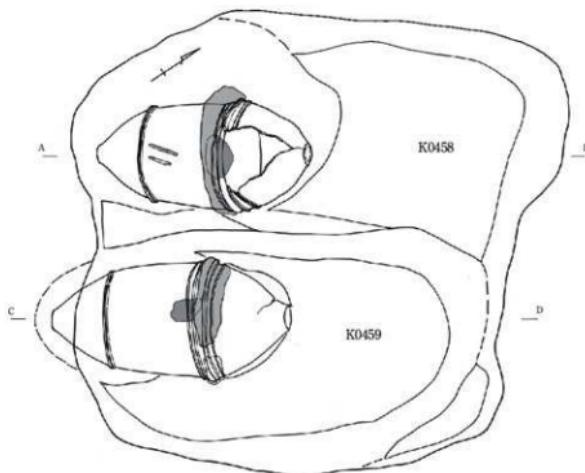
K0457



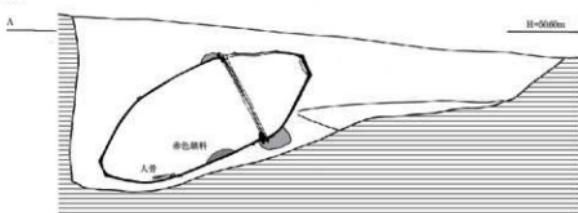
387



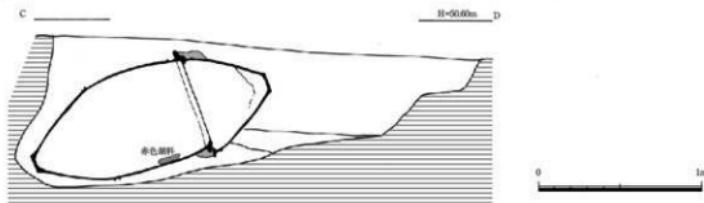
第96図 K0452・0455・0457及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)



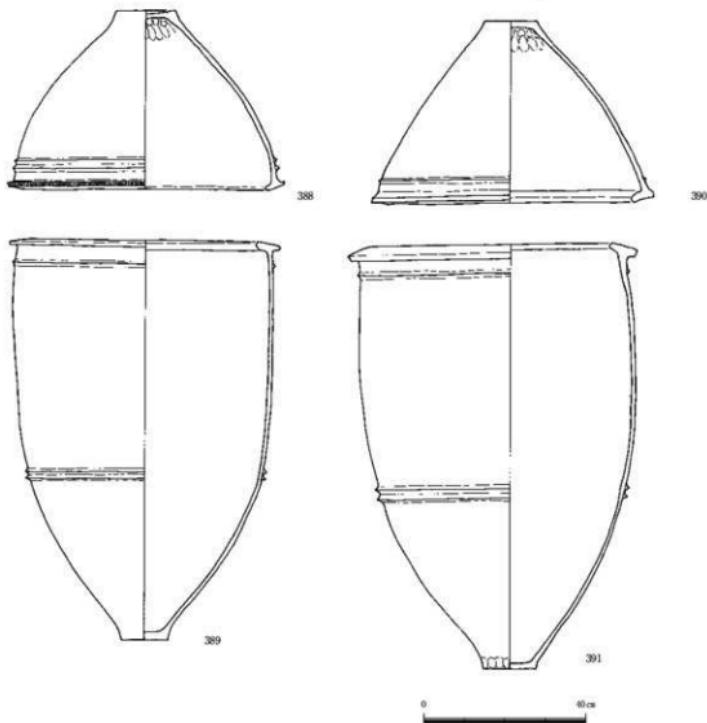
K0458



K0459



第97図 K0458・0459実測図 (1/30)



第98図 K0458・0459出土遺物実測図 (1/12)

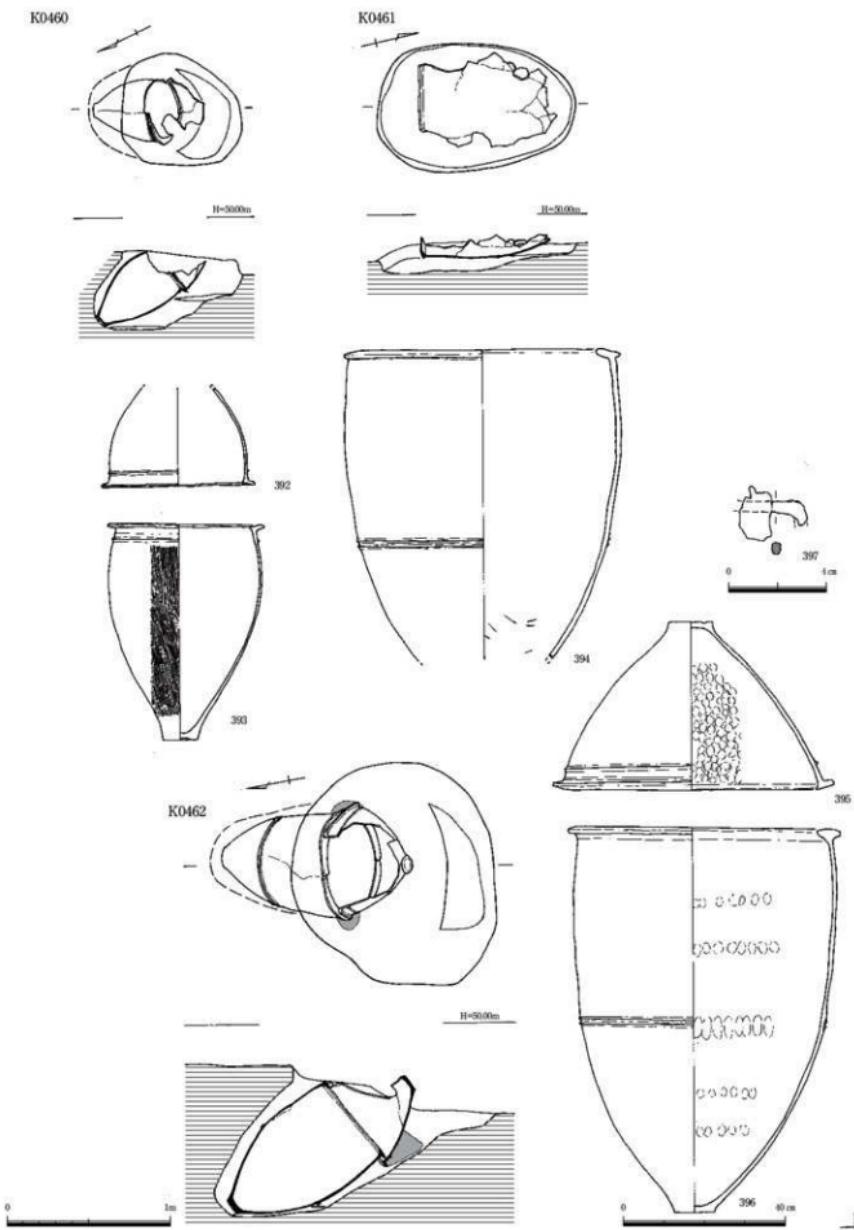
K0457 (第96図、写真220・221)

南群北側で検出し、SR0498を切る。口縁部を下方に向けた単棺で、口縁下に一部橙色粘土が残る。埋土は褐色土で、掘り方は1.3m×1.15mで、底面は東側に向けて傾斜する。

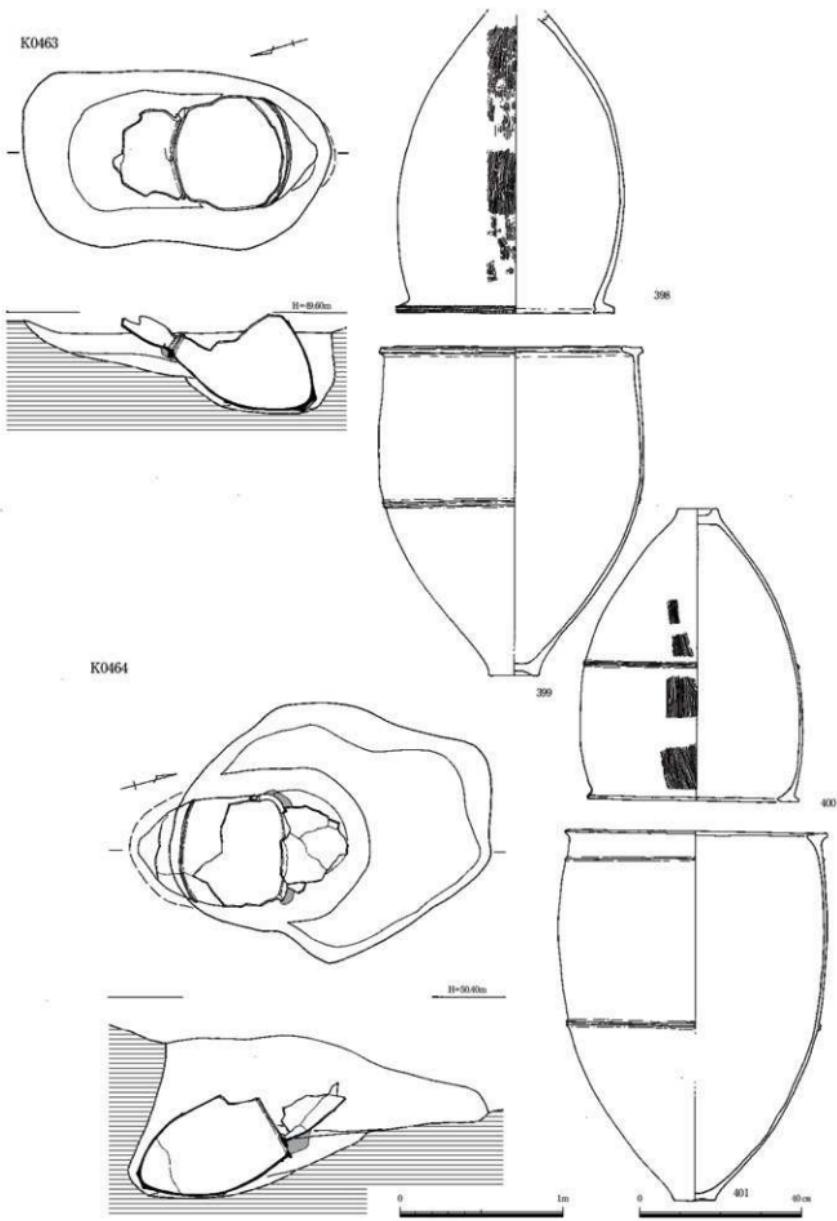
出土遺物 (第96図387、写真333) 口縁部上端は強く屈曲し上面に粘土帯を貼付する。口縁部の外側には刻みを行う。口縁下及び胴部中位に3条の沈線を施し、胴部外面にはミガキを行う。内面は上端部に横刷毛が残る。色調は浅黄橙色を呈する。

K0458 (第97図、写真222～224)

南群西側で検出する。検出時には一辺2.8m程度の方形土坑として掘り下げを行い、壺棺が露出した後の標高50.0m付近でK0459との平面的な切り合いを確認した。その結果K0458→K0459の順に埋葬されたことが分かった。ここからの埋土はオリーブ褐色土とぼい黄褐色土の混合土である。壺棺の配置や掘り方の平面形状、埋土の状態などから、当初大型の方形墓坑を掘り、西側を更に掘り下げてK0458を埋葬し、掘り方途中まで埋め戻しを行う。その後当初からの予定通りK0459を計画的に大型墓坑の東側に埋葬し、全体の埋め戻しを行う。といった北群K0429・0430と同様の埋葬方法を想定し



第99図 K0460・0461・0462及び出土遺物実測図 (1/30, 397は1/2、その他は1/12)



第100図 K0463・0464及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

た。相対する北側にも同様に計画的な埋葬が行われたK0477・0478が位置する。壺棺は接合部に橙色粘土を貼付し、下壺からは方向の描った骨片と水銀朱を確認した。

出土遺物（第98図388・389、写真334） 388は上壺の鉢である。口縁部は外傾するT字形を呈し、外面には刻みを有する。内外面ナデ調整を行い、外面から口縁下内面まで黒色顔料が明瞭に残る。389は下壺である。口縁部は外傾するT字形をなし、口縁下には1条の三角形突帯を貼付する。胴部調整は内外面ナデにより、胴部外面から口縁部上面まで、黒色顔料が認められる。

K0459（第97図、写真222・225）

南群西側で検出する。大型土坑の東側に埋葬され、上述のK0458と対になる壺棺墓である。K0458→K0459→K0451の先後関係となる。上面では切り合い関係は認められなかったが、標高50.0m付近で切り合いを確認した。K0459の埋土は黒褐色土とぶい黄褐色土の混合土である。壺棺は接合部に橙色粘土を貼付し、下壺の上半部内面には水銀朱が付着していた。

出土遺物（第98図390・391、写真334） 390は上壺の鉢である。口縁部は外傾するT字形を呈し、上面は湾曲している。内外面ナデ調整を行い、外面から口縁部上面まで黒色顔料が残る。391は下壺である。口縁部は外傾するT字形をなし、口縁下には1条、胴部には2条の三角形突帯を貼付する。胴部調整は内外面ナデにより、胴部外面から口縁下内面まで、黒色顔料が認められる。

K0460（第99図、写真226）

南群中央で検出する。K0462→K0460→K0461の先後関係となる。掘り方は径0.7mの円形に近く、南から階段状に掘り下げる。埋土は暗灰黄色土である。

出土遺物（第99図392・393、写真334） 392は上壺の鉢である。口縁部は内傾する鉤形を呈する。内外面ナデ調整を行い、色調は明赤褐色である。393は下壺である。口縁部は内傾する鉤形をなし、口縁下には1条の三角形突帯を貼付する。胴部外面は刷毛目を行い、黒色顔料を塗布する。

K0461（第99図、写真227）

南群中央で検出し、K0462→K0460→K0461の先後関係となる。埋土は褐色土で、壺棺は水平に埋置された大型の單棺である。残存状態から非常に大きな削平が行われたことがわかる。

出土遺物（第99図394、写真335） 口縁部は内側に強く張り出し、上面は外傾する。最大径は胴部上位にあり、中位には2条の三角形突帯を貼付する。胴部調整は内外面ナデにより、内面には工具の小口痕跡が明瞭に残る。色調は灰白色を呈する。

K0462（第99図、写真228）

南群中央で検出する。埋土はオリーブ褐色土で、掘り方は径1.3mの円形に近く、北壁を抉り込んで壺棺を埋置する。下壺に流入した土砂内から鉄器破片が出土しているが、混入の可能性が高い。

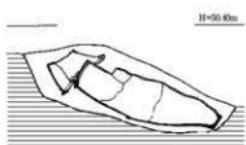
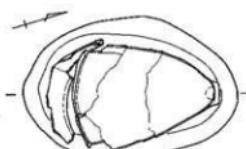
出土遺物（第99図395～397、写真335） 395は上壺の鉢である。口縁部は内傾する鉤形を呈する。内外面ナデ調整を行い、内面には指痕が多く観察できる。396は下壺である。口縁部は上面がほぼ水平なT字形をなす。胴部上半はほぼ直線的に立ち上がり、中位に2条の三角形突帯を貼付する。胴部調整は内外面ナデによる。397は下壺流入土から出土した鉄製品である。錆化・折損が進んでいるが、残存部分は断面5～7mm角の棒状で、先端が折れ曲がっている。

K0463（第100図、写真229）

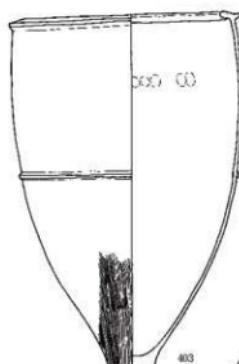
南群中央で検出し、K0464と対になる。掘り方は1.9m×1.05mの平面隅丸長方形を呈し、埋土はにぶい黄褐色土である。壺棺は上壺が大きな削平を受けるが、上壺との接合部には橙色粘土が残る。

出土遺物（第100図398・399、写真335） 398は上壺である。頭部上面に粘土帶を貼付し、断面鉤形の口縁部とし、外面に刻みを有する。頭部付近はいたんすぼまり、上部が外方に開く。胴部外面

K0465

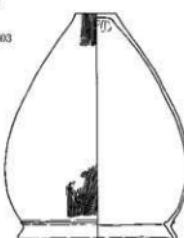
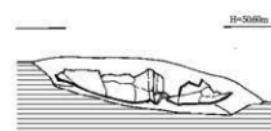
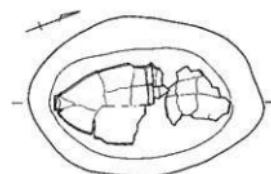


402



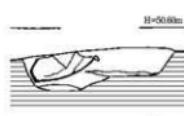
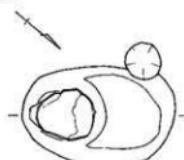
403

K0466



404

K0467



405

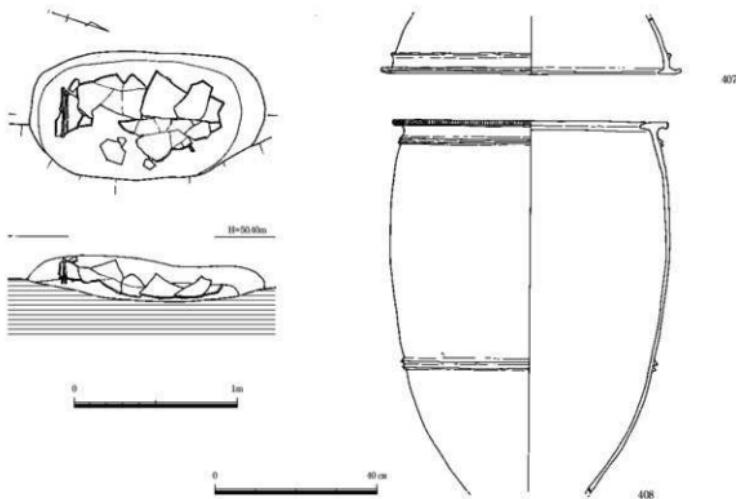


0 40 cm

0

1m

第101図 K0465・0466・0467及び出土遺物実測図 (1/30、1/12)



第102図 K0468及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

全体に縦刷毛が認められる。399は下壺で口縁部は内側に強く張り出し、上面は外傾する。胴部中位に突帯を貼付し、内外面ナデを施す。上下壺ともに内外面に黒色顔料を塗布する。

K0464 (第100図、写真230)

南群中央で検出する。K0463と対になり、周辺のK0461・K0465・K0466に切られる。埋土はオリーブ褐色土で、壺棺接合部には橙色粘土が貼付されている。

出土遺物 (第100図400・401、写真335) 400は上壺である。口縁部断面はT字形を呈し、上面は水平となる。胴部内外面ナデを行うが、外面には縦刷毛が残る。色調は明褐灰色を呈し、内外面に黒色顔料が認められる。401は下壺で、口縁部は張り出しの少ない断面T字形を呈する。口縁下と胴部中位には突帯を貼付し、内外面ナデによる。また胴部外面に黒色顔料が残る。

K0465 (第101図、写真231)

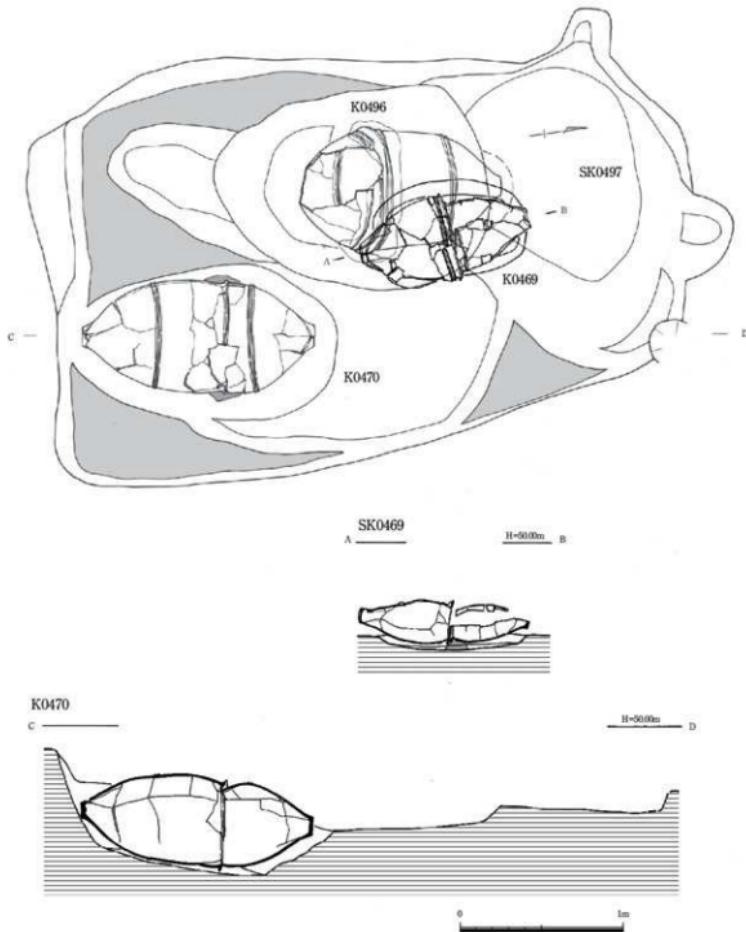
南群中央で検出する。K0464→K0465の先後関係となる。現状で掘り方は $1.3m \times 0.85m$ の長円形で、埋土はにぶい黄褐色土である。上壺がずれているが、本来接口式の壺棺墓であろう。

出土遺物 (第101図402・403、写真336) 402は上壺の鉢である。口縁部は上面が水平で断面T字形を呈する。内外面ナデ調整を行い、色調はにぶい赤褐色である。403は下壺である。口縁部上面は内傾気味で内側に強く張り出す。胴部中位に1条のコ字形突帯を貼付する。胴部調整は内外面ナデを行い、外面下半には刷毛目が残る。色調は浅黄褐色で、外面から口縁下内面まで黒色顔料が残る。

K0466 (第101図、写真232)

南群中央で検出する。K0464→K0466の先後関係となる。上面の削平が進んでおり、下壺が大きく欠失している。掘り方は $1.45m \times 1m$ の長円形を呈し、埋土は黄褐色土である。

出土遺物 (第101図404・405、写真336) 404はく字形に屈曲する口縁部が内湾気味となる。胴部

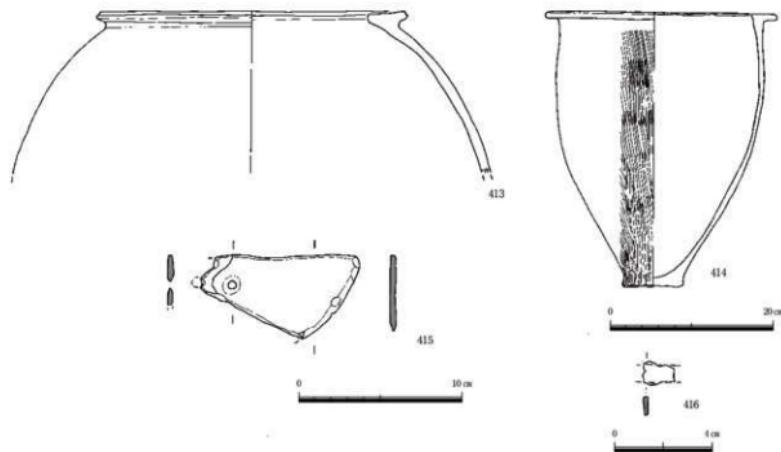
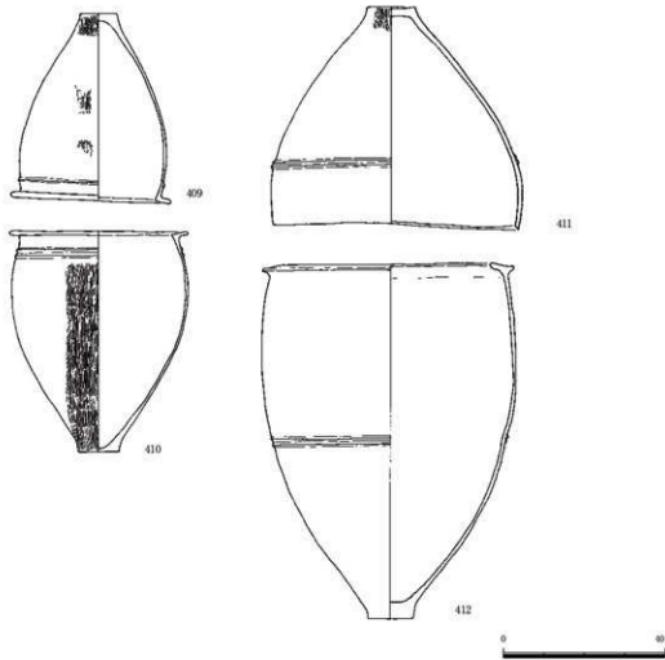


第103図 K0469・0470実測図 (1/30)

上位に最大径を有し、口径を上回る。胸部外面は刷毛目の後ナデを行い、外面上半には煤が付着する。405は下麿で口縁部はく字形に屈曲する。口縁下に1条の突帯を貼付し、上位に最大径を有する。色調は灰白色を呈し、胸部外面上半部には煤が付着する。

K0467 (第101図、写真233)

南群南側で検出した、小型の单棺である。現状で掘り方は $0.95\text{m} \times 0.7\text{m}$ の隅丸長方形で、埋土は褐色土である。



第104図 K0469・0470出土遺物実測図 (416は1/2、415は1/3、413・414は1/6、409~412は1/12)

出土遺物（第101図406） 406の口縁部は内傾する逆L字形で、胴部上位に最大径を有する。調整は外面綱刷毛、内面ナデにより、器壁は薄手である。にぶい黄褐色を呈し、外面には煤が付着する。

K0468 (第102図、写真234)

南群南側で検出する。台地東側斜面にかかり、削平のため墓坑底付近しか残存していない。特に上壺は口縁部付近の一部が残るのみである。埋土はにぶい黄褐色土である。

出土遺物（第102図、写真336） 407は上壺の鉢口縁部破片である。口縁部断面は鋸形に近く、上面は水平である。浅黄色を呈し調整は外面ナデによる。408は口縁部上面が内傾する断面T字形を呈し、外面には刻みを有する。頭部と胴部中位に突帯を貼付し、胴部上半は頭部に向かってすぼまる。

K0469 (第103図、写真235・236)

南群北端で検出する。切り合い関係からSK0497→K0496→K0469の先後関係となる。K0470・0496を埋葬する大型墓坑（当初SK0456として掘り下げを行う）掘り下げ中に検出した甕棺である。平面的に掘り方を確認しようと、墓坑上層のにぶい黄褐色土の掘り下げを行ったため、最終的には掘り方が不明のまま大型墓坑内でK0470とともに露出してしまった。墓坑底のごく一部を確認したのみである。甕棺は接口式で底の部分のみ粘土を貼付している。

出土遺物（第104図409・410、写真336） 409は上壺である。口縁部は内傾する逆L字形である。胴部は外面刷毛目の後ナデ、内面ナデを行う。胴部外面に煤が付着する。410は下壺である。口縁部は内傾する逆L字形である。頭部には2条の三角形突帯を貼付し、胴部外面全体に綱刷毛を行い、内面はナデによる。にぶい赤褐色を呈し、外面には煤が残っている。

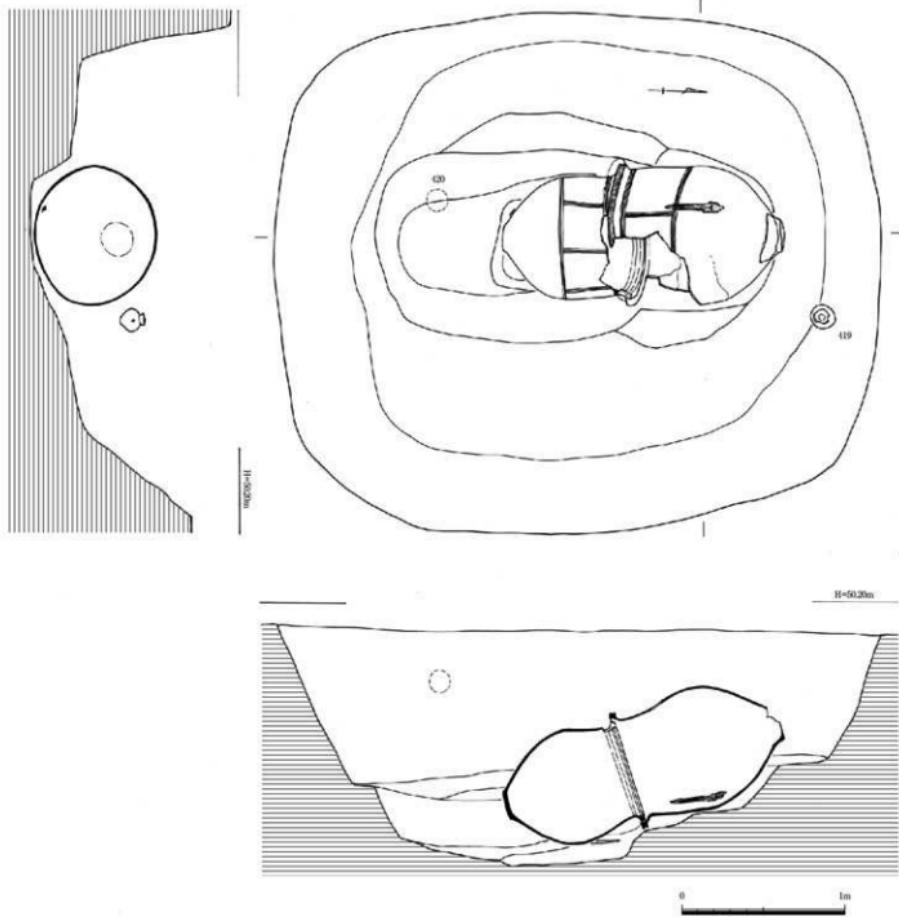
K0470 (第103図、写真235・237)

南群北端で検出する。当初4.05m×2.55mの大型の隅丸長方形プランを確認しSK0456として掘り下げを行った。埋土は検出面から20cm程はにぶい黄褐色土で、これを掘り下げたところでK0469とK0470が露出した。これ以下は暗灰黄色土ににぶい黄色土ブロックを含んでいる。大型墓坑の北側にはSK0497が掘削されているが、出土遺物からは大型墓坑に先行する土坑と考えておきたい。大型墓坑一段目の平坦面（アミ部）はほぼレベルが揃っており、K0458・0459などの例を参考にすると、大型墓坑を掘り込んでK0470を埋葬した後、比較的短期間のうちにK0496を差し向かいで埋葬したものと考えられる。K0469は墓坑全体を埋め戻した後の埋葬であろう。それぞれの先後関係はSK0497→K0470→K0496→K0469となる。K0470は一段掘り下げた大型墓坑の南東部分を掘り下げて埋葬しており、甕棺は接口式で橙色粘土は両側に貼付している。

出土遺物（第104図411～416、写真336・356） 411は上半部を打ち欠いた上壺である。内外面ナデを行い、外面下端に綱刷毛が残る。浅黄橙色を呈し、内外面に黒色顔料が認められる。412は内側に張り出した口縁部上面は内傾する。胴部最大径は上位に有し、中位には突帯を貼付する。灰白色を呈し、内外面に黒色顔料を塗布する。413～416はSK0456で取り上げた墓坑全体の上層遺物である。414は完形近くに復元できる。415は石包丁で孔間心々22cmである。416は茎状の鉄製品である。

K0471 (第105図、写真238～244)

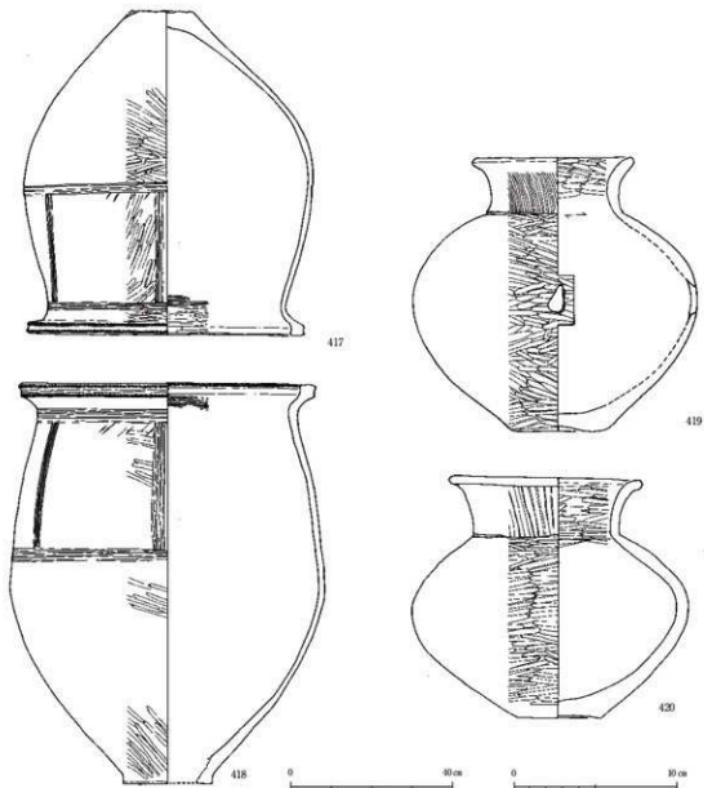
南群北側で検出する。SR0457→K0471→K0499の関係となる。掘り方は3.7m×3.2mの均整のとれた隅丸長方形を呈する。墓坑底中央に平面2.5m×1.3mで階段状に甕棺埋置用の掘り込みを有する。甕棺は墓坑壁に近い北側を下壺、南側を上壺とした。埋土は黄褐色土で、甕棺下の墓坑埋土は黄灰色土ににぶい黄色土ブロックを含んでいる。甕棺は呑口式で灰白色粘土を貼付している。下壺中央やや西側から鉾を上壺方向に向けて銅剣が1本出土した。銅剣は2ヶ所で折損しており、刃方付近では壺との間に木質が残存しており、鞘の一部と考えられる（写真242）。鞘には赤漆が痕跡的に認められた。



第105図 K0471実測図 (1/30)

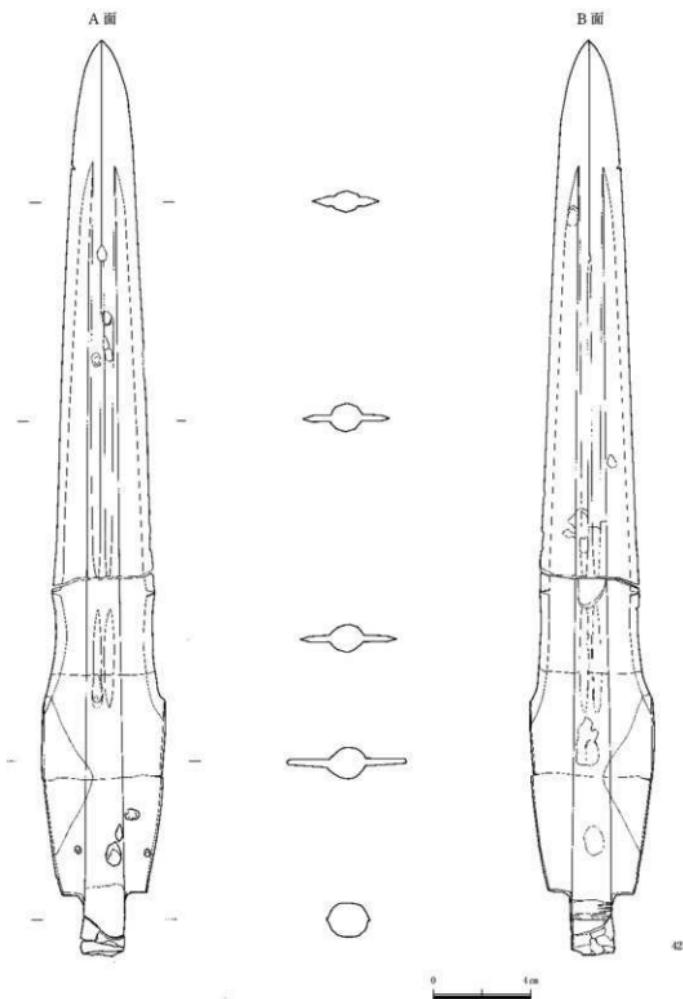
また、墓坑内には2個体の小型壺が副葬されていた。ともにほぼ完存した状態で埋葬途中に正置されたものと考えられるが、420は調査の過程で埋置状況を確認できないまま取り上げている。

出土物（第106・107図、写真324・337・346） 417は上壺である。口径部は焼成前につぶれて外径68cm×78cmと扁平になる。口縁部は上端で大きく外方に開き、上面に粘土帯を貼付する。胴部外面は丁寧なミガキを行い、上半には沈線を刻む。内外面に黒色顔料が認められる。418は下壺である。

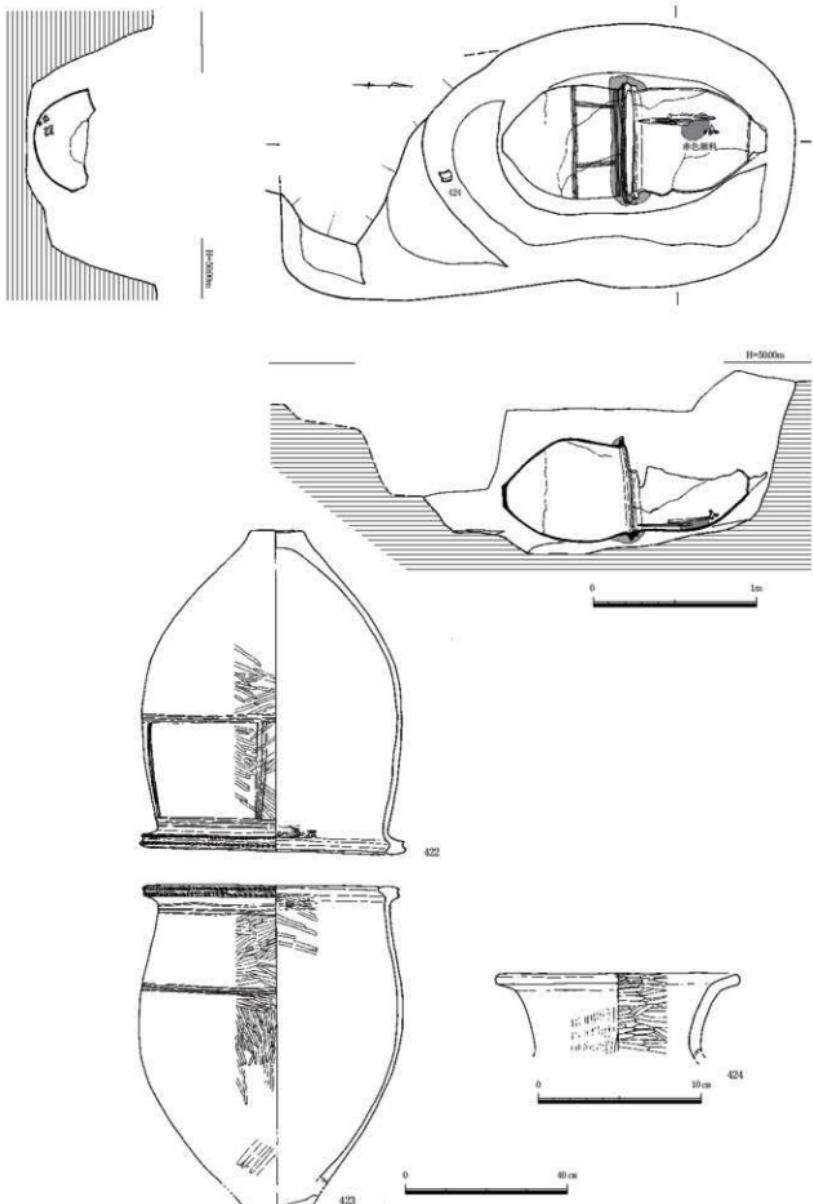


第106図 K0471出土遺物実測図1 (419・420は1/3、417・418は1/12)

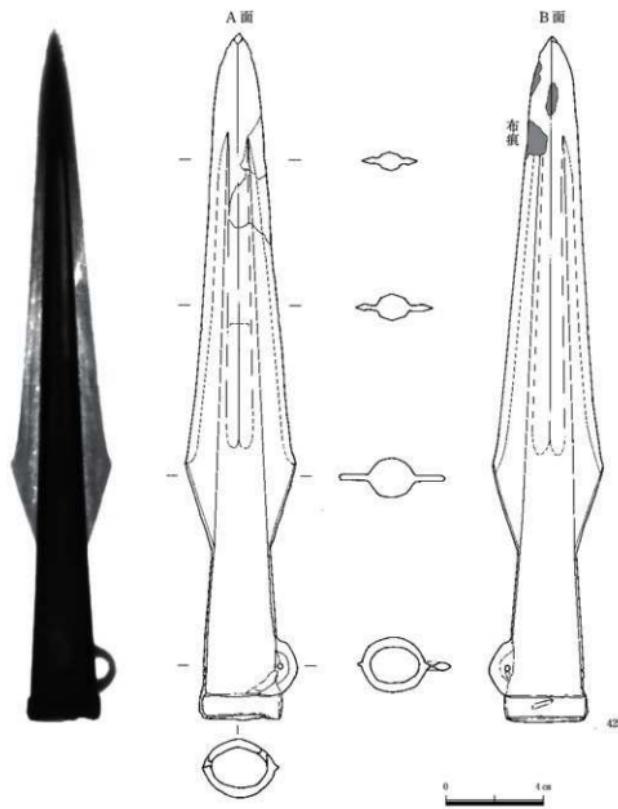
口縁部上端に粘土帯を貼付し、胴部外面は丁寧なミガキを行う。外面上半のみに黒色顔料の痕跡が残る。胎土に石英砂粒を多く含み焼成があいまいため、器壁が軟弱で復元はし得なかった。また調査時に既に器壁が泥化し底部を中心として消失した部分も多い。419は墓坑北側に副葬された小壺である。頸部は直立気味に立ち上がり、偏球形の胴部中位に穿孔が行われる。調整は胴部外面及び頸部内面が横ミガキ、頸部外面は縦刷毛による。外面から頸部内面まで黒色顔料が認められる。420は南側の副葬小壺である。頸部は直立し、胴部は偏球形となる。外面から頸部内面までミガキを行い、黒色顔料を塗布している。421は2ヶ所で折損する中細形銅剣である。全長37.7cm、剣身長35.1cm、茎部長2.6cm、幅は茎部1.8cm、関部3.5cm、剣方下端5.0cm、剣方上端4.3cm、剣方最少幅4.0cmである。鎬は鋒から9.1cmまで、以下の研ぎは中軸に及んでいない。剣方以下の翼部は背側厚み3.5mm、外側で2.5mmであ



第107图 K0471出土遗物实测图2 (1/2)



第108図 K0473及び出土遺物実測図1 (1/30、424は1/3、その他は1/12)

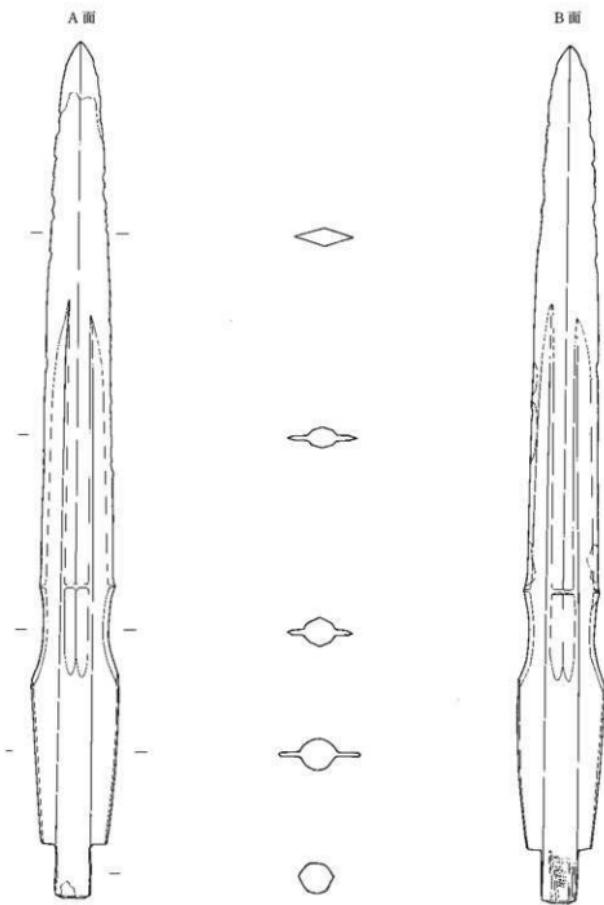


第109図 K0473出土遺物実測図2 (1/2)

る。茎部は厚さ1.4cmで断面偏平な円形を呈し側縁にはバリが残る。また茎部には緊縛に用いた紐痕跡が残る。

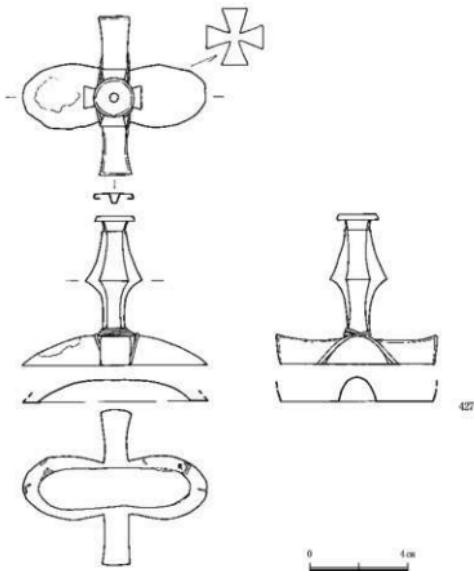
K0473 (第108図、写真245~251)

南群北側で検出する。K0474・0455に掘り方の一部を切られている。また、調査時点ではK4916が埋葬されている大型墓坑（SK0472として掘り下げを行う）を切っていると認識していたが、壺棺型式から切り合いは逆転するものと考えられる。墓坑掘り方は $3.1m \times 15m$ の隅丸長方形を呈し、墓坑南側はK0474によって削平を受けている。埋土は黄褐色土で、墓坑は南側から階段状に掘り下げを行い、三段の平坦面を有し底面に至る。底面は北側に向かってやや高くなり、北壁は斜めに立ち上げる。検出面から墓坑底までの深さは1.1mである。壺棺はほぼ水平に埋置される。接口式で接合部全周に橙色粘土が貼付される。下壺中央から副葬品の青銅製矛・劍・把頭飾が出土した。また副葬品下の壺内壁には径20cmの範囲で水銀朱を検出している。ここからは菌も出土しており、頭部に当たるもの



426
0 4cm

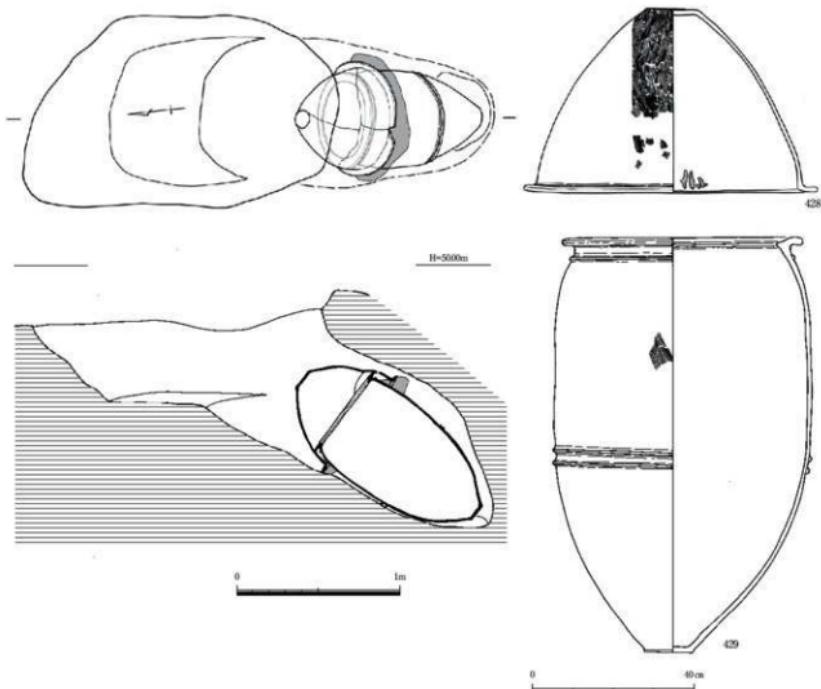
第110図 K0473出土遺物実測図3 (1/2)



第111図 K0473出土遺物実測図4 (1/2)

のと考えられる。水銀朱は埋葬時に塗布されたものであろう。銅矛は鋒を下壺底部に向いている。銅劍の上位にあり銅劍上面の流入土に乗っている。また銅劍は壺内壁に密着し銅矛と鋒を逆に向いている。把頭飾とは約10cm離れ、この間には完全に腐食して失われた木質の痕跡が残っていた。また木質に伴う漆の被膜痕跡も同時に確認したが形状は不明である。壺棺自体は搅乱を受けておらず、埋置角度もほぼ水平に近いことなどから、副葬品は比較的原位置を保持した状態で出土したものと考えられる。

出土遺物（第108~111図、写真337・347~349） 422は上壺である。口径部は焼成前につぶれて外径 $64\text{cm} \times 73\text{cm}$ と扁平になる。口縁部は上端で大きく外方に開き、上面に粘土帯を貼付する。胴部外面は丁寧なミガキを行い、上半には沈線を刻む。色調はにぶい黄橙色を呈し、内外面に黒色顔料が認められる。423は下壺である。口縁部は上端で大きく外方に開き、上面に粘土帯を貼付する。胴部外面は丁寧なミガキを行い、上半には横方向のみの沈線を刻む。色調は明赤褐色を呈し、内外面に黒色顔料が認められる。424は小壺口縁部小破片である。頭部外面には継刷毛の後ナデを行う。425は細形銅矛である。全長28.2cm、関幅4.6cm、袋部外径2.4cm×3.1cmである。袋部下端に幅1cmの節帶を有し、その上に耳を有するが、耳部穿孔付近にも調整痕が見られない。表面及び袋部内面に銷着した付着物があるが、剥落した部分からは赤胴色の地肌が見える。鋒付近には布目痕が残り、袋部のパリはそのまま残されている。布に包んで副葬された可能性が考えられる。426は身幅が狭く、長さが際立つ細形銅劍である。全長35.2cm、劍身長33.0cm、茎部長2.2cm、幅は茎部1.4cm、関部2.6cm、劍方下端3.5cm、劍方上端3.1cm、劍方最少幅2.7cmである。鋒から10.5cmのところで柄の先端部となる。鎬は劍方下端まで



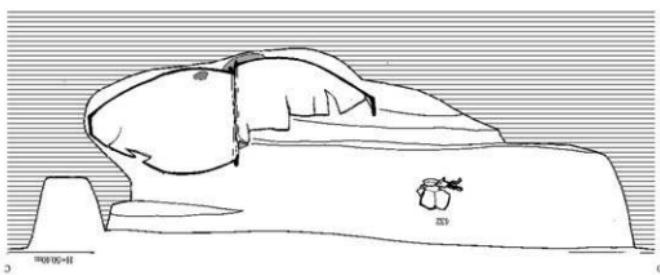
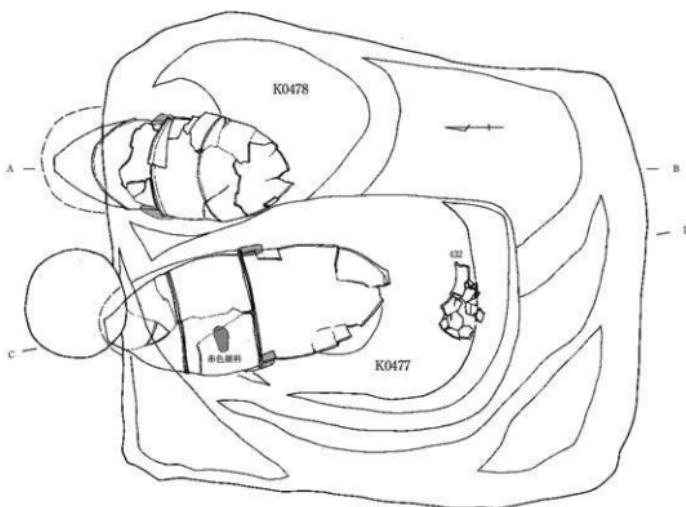
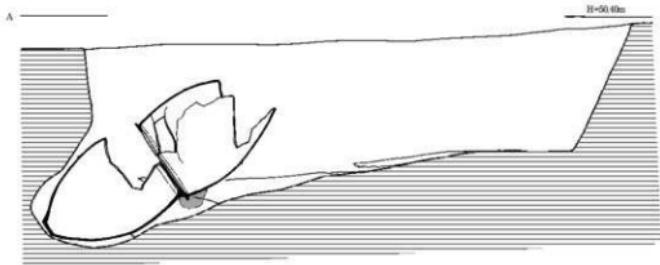
第112図 K0474及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

行われている。剖方以下の翼部は背側厚み1.5mmで端まで均等な厚みを保つ。茎部は厚さ1.2cmで断面は円形を呈している。427は青銅製十字形把頭飾である。総高6.25cm、最大幅7.48cm、短幅6.45cm、重量121gである。柱先端は径1.7cm、厚さ2.5mmの円盤となり、中央に径4mm、深さ4mmの孔を有する。盤部との接合面には赤漆が付着しており、盤部表面の漆が転写されたものと考えられる。また根元には径1mmほどの鋸化した紐痕跡が残っている。

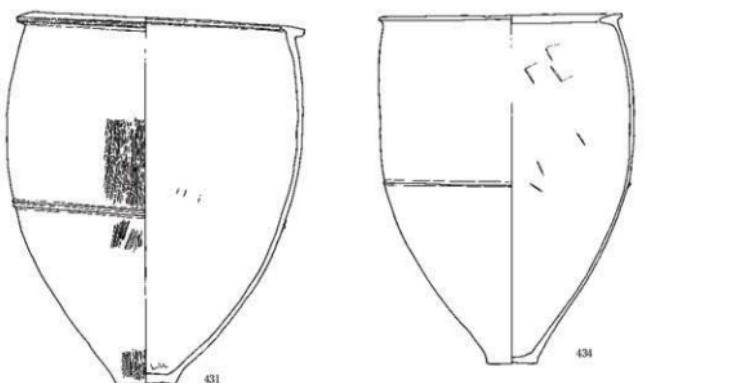
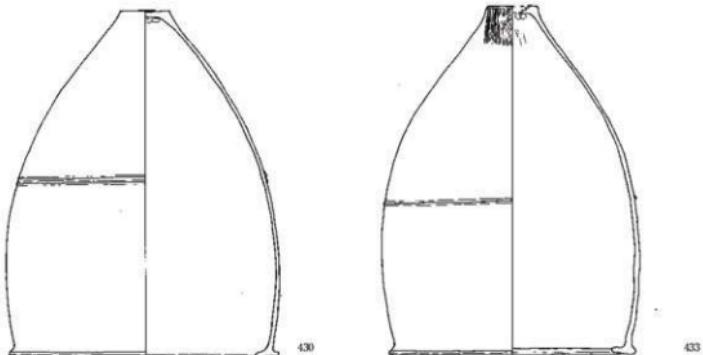
K0474 (第112図、写真252・253)

南群中央部で検出し、K0473・4916→K0474の先後関係となる。掘り方は1.9m×1.1mの隅丸長方形を呈し、南壁に大きく斜坑を掘り込んで壺棺を埋置する。壺棺は覆口式で接合部分全周に橙色粘土を貼付する。埋土はにぶい黒褐色土である。

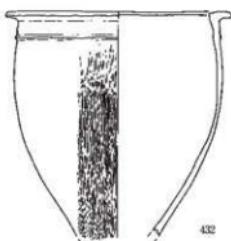
出土遺物 (第112図、写真337) 428は上壺の鉢である。口縁部は逆L字形を呈し、胴部外面下半には細かな刷毛目が残る。頭部内面には作業中に付着した赤色顔料が認められる。429は下壺である。口縁部は内傾するく字形を呈し、頭部及び胴部中位にはコ字形突帯が貼付される。胴部調整は内外面ナデを行う。色調は浅黄色で外面下半に黒色顔料の痕跡が残る。



第113図 K0477・0478実測図 (1/30)

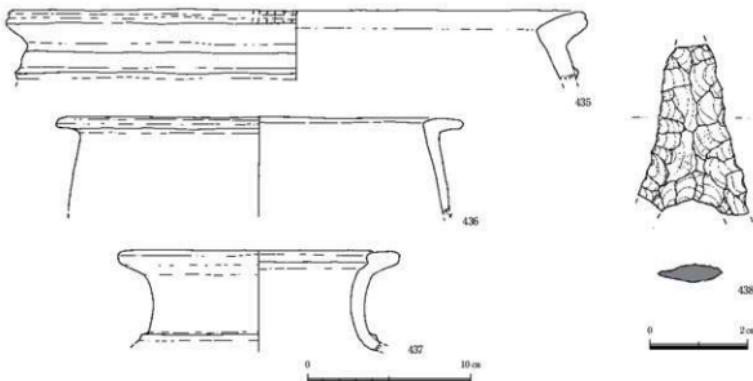


0 40 cm



0 20 cm

第114図 K0477・0478出土遺物実測図 (432は1/6、その他は1/12)



第115図 K0477・0478墓坑 (SK0476) 出土遺物実測図 (438は1/1、その他は1/3)

K0477 (第113図、写真254~257)

南群西側で検出する。当初3.3m×2.8mの大型の隅丸長方形プランを確認しSK0476として掘り下げを行った。検出面から50cm程までオリーブ褐色土を掘り下げたところでK0477とK0478を確認した。上層では切り合いは認められなかったが、ここでK0478→K0477の切り合い関係を確認した。南側に向かい合うK0458・0459と同様の埋葬形態と考えられ、墓坑プランが乱れていないことや計画的な埋葬が想定できることから、大型墓坑の東側にK0478を埋葬し墓坑中途まで埋め戻し、比較的短時間のうちにK0477を墓坑西側に埋葬した後、墓坑全体を埋め戻した可能性を考えておきたい。K0477は埋土黒褐色土で、墓坑南側から破碎された壺が出土する。下壺器壁には赤色顔料が痕跡的に付着する。

出土遺物 (第114図430~432、写真337) 430は上壺である。T字形の口縁部上面は水平となる。外側から内面上半には黒色顔料が残る。431は下壺である。口縁部は逆L字形で、外面に刻みを有する。内外面全体に黒色顔料が残る。432は底部付近を欠失する。外面に黒色顔料が認められる。

K0478 (第113図、写真254~257)

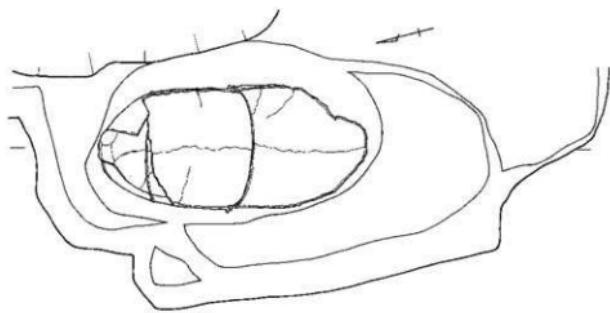
南群西側で検出する。同一墓坑に埋葬され、K0478→0477の関係となる。K0478の埋土は灰黄褐色土にぶい黄色土ブロックを含む。壺棺は接口式で下側半分の接合面に橙色粘土を貼付する。

出土遺物 (第114・115図433~438、写真338・356) 433はT字形の口縁部上面は水平となる。胴部に1条三角形突帯を貼付し、外面下端には継刷毛が残る。外面には黒色顔料が残る。434はT字形の口縁部は内傾する。内面には黒色顔料が残るが、現状で外面は認められない。435~438はSK0476で掘り上げた墓坑上層遺物である。435・436は壺、437は壺口縁部、438は黒曜石製の石鎌である。

K0480 (第116図、写真262)

南群南端部で検出する。K0482の墓坑西側に埋葬する。K0482→K0480・0494→K0481の順となる (第118図参照)。掘り方は北側から階段状に掘り下げ、ほか3基とは埋葬頭位を変える。埋土は灰黄褐色土に明黄褐色土ブロックを含む。壺棺接合部には橙色粘土を貼付する。

出土遺物 (第116図、写真338・343) 439の口縁部はT字形を呈し上面は平坦である。胴部には3角形突帯を貼付し、調整は内外面ナデによるが外底付近には刷毛目が残る。また胴部下位には穿孔を有する。440は下壺である。口縁部はT字形を呈し外面に刻みを行う。胴部には1条三角形突帯を貼付

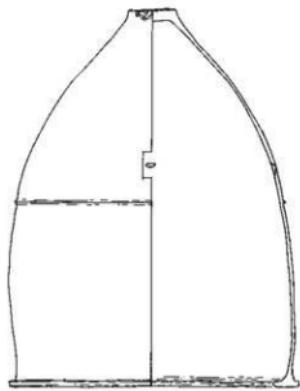


H=54.00m

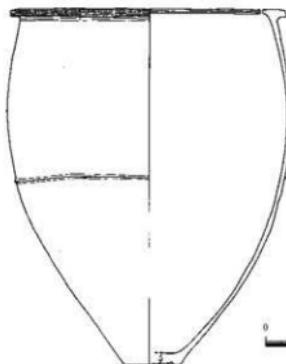


0

1m

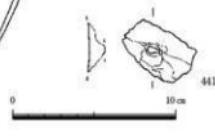


439



440

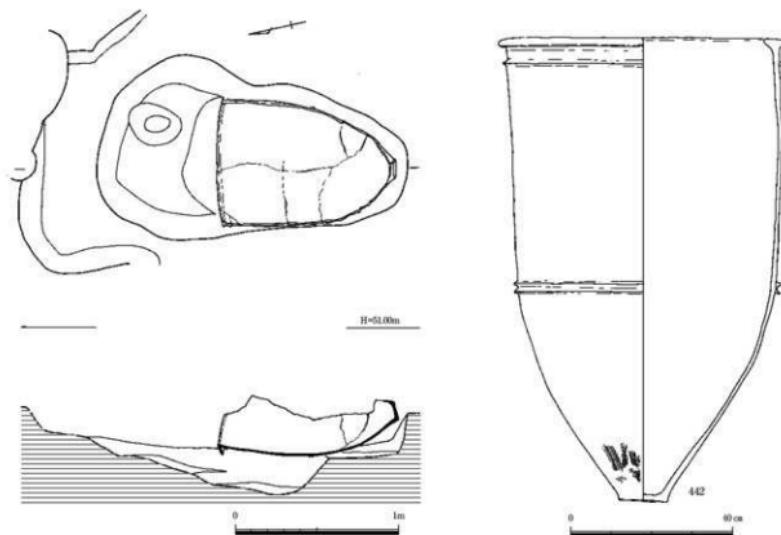
0 10 cm



441

0 10 cm

第116図 K0480及び出土遺物実測図 (1/30、441は1/3、その他は1/12)



第117図 K0481及び出土遺物実測図（1／30、1／12）

し、調整は内外面ナデによる。上下壺ともに内外面全体に黒色顔料を塗布する。441は上壺内部で出土した。上壺の穿孔で割り取られた破片である。墓坑内に埋置後に穿孔を行ったものであろう。

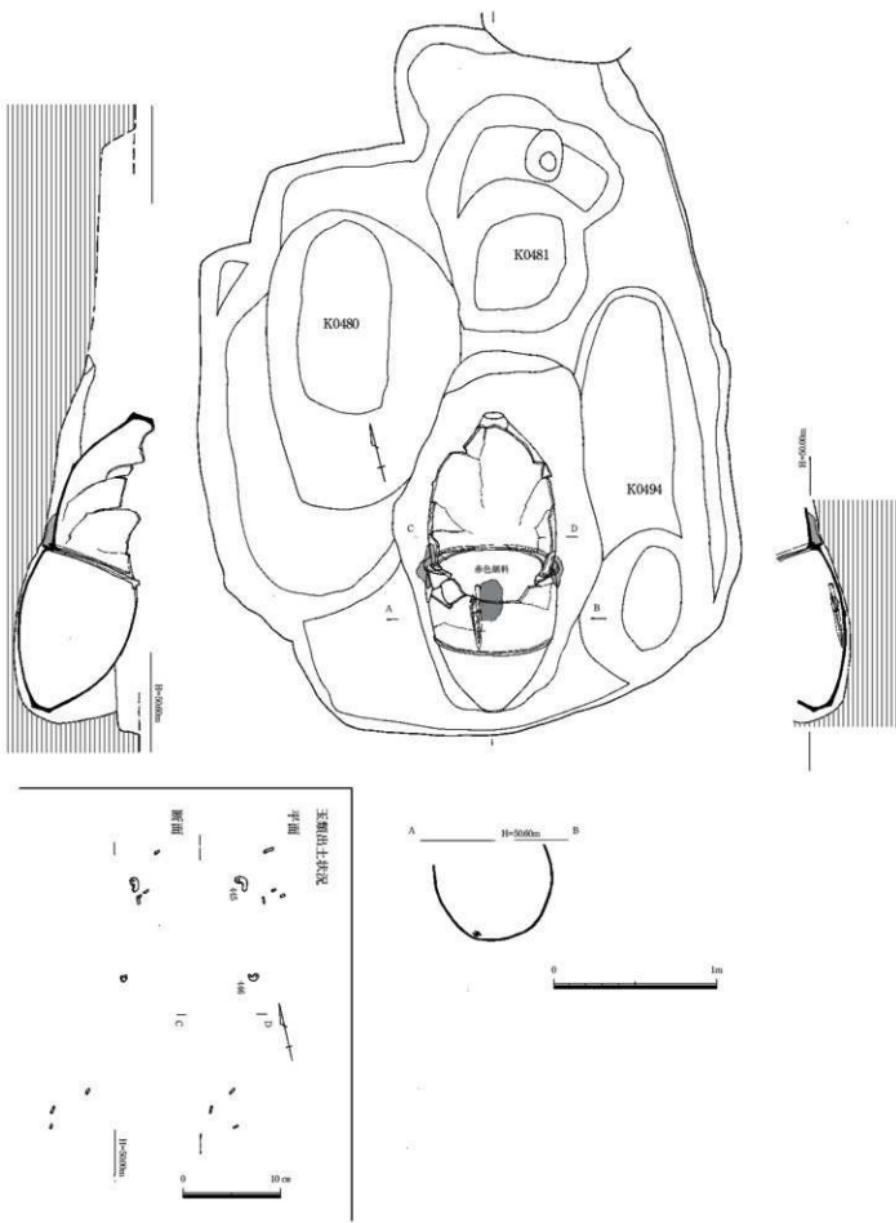
K0481（第117図、写真263）

南群南端部で検出する。K0482の墓坑北側に埋葬し、K0482と直線的に並ぶ。K0482→K0480・0494→K0481の順となる（第118図参照）。壺棺の下を掘り込んでいるが、埋め戻した上で埋置したものと考えられる。埋土は灰黄褐色土である。単棺で木蓋等の痕跡は明らかでない。

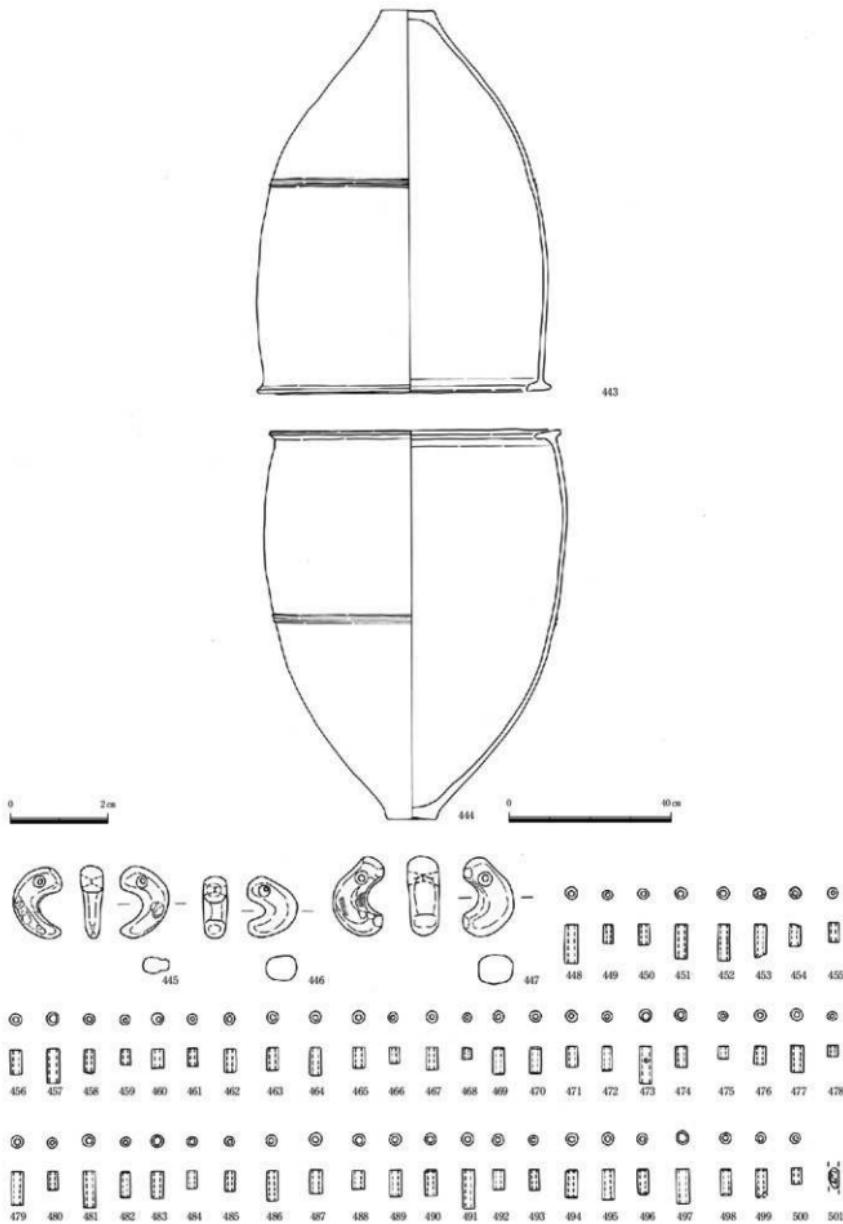
出土遺物（第117図、写真338） 442はT字形の口縁下には三角形の突帯を貼付する。胴部上位は直線的に立ち上がり、調整は内外面ナデを行うが、外底付近には継刷毛が残る。

K0482（第118図、写真258～261、264～271）

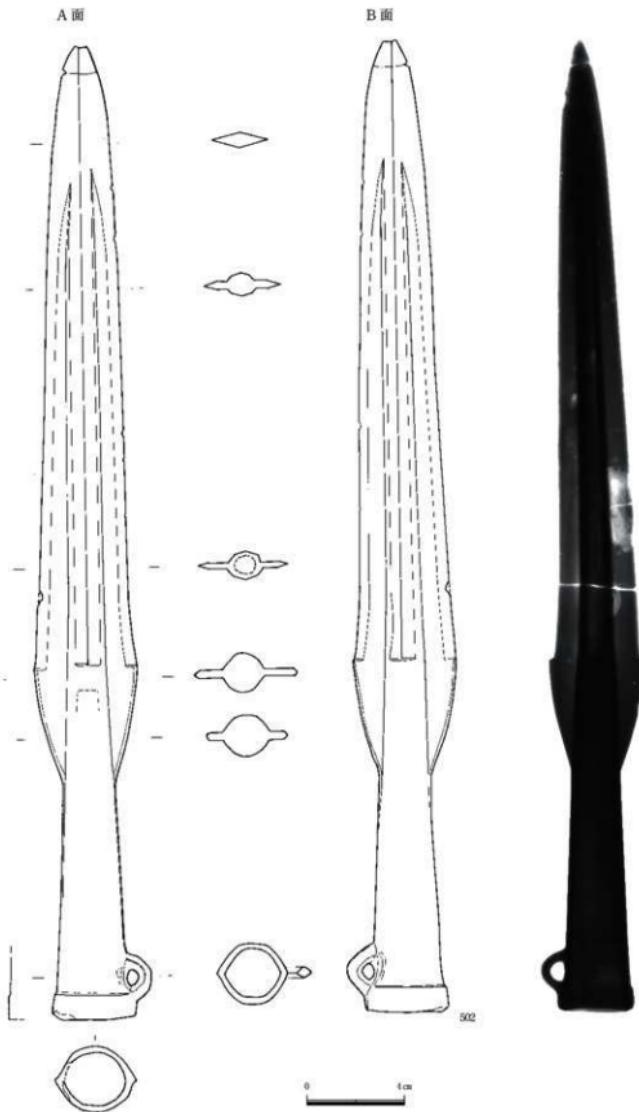
調査区南端部で検出する。検出当初はK0480・0481・0482・0494の墓坑群をSK0479として掘り下げを行った。SK0479とした墓坑群上層の埋土は黒褐色土である。20cmほど掘り下げたところで各墓坑群が明らかとなった。先後関係はK0482→K0480・0494→K0481の順となる。K0482の墓坑規模は3.7m×2.8mで、壺棺は墓坑南端中央に更に2.2m×1.2mの掘り込みを行った上で埋置している。埋土はにぶい黄褐色土に明黄褐色土ブロックを少量含んでいる。ほか3基の壺棺の埋葬に当たってはK0482の壺棺及び墓坑を意識した埋葬を行っており、4基で一群を成している。K0482は上壺が崩落していたが接口式で全周に目張りの粘土を施している。上壺内口縁部付近の棺内器壁に接して玉類が出土した。また、流入土砂を洗浄した結果合わせて57個の玉類が出土した。今回の調査において玉類が出土したのはこの1基のみである。下壺内からは下壺中央棺底より銅劍と銅矛が鋒を揃えて北側に向けた状態で出土した。劍と矛の間には土砂が挟まっておらず、木質の痕跡も認められなかったため、抜き身でま



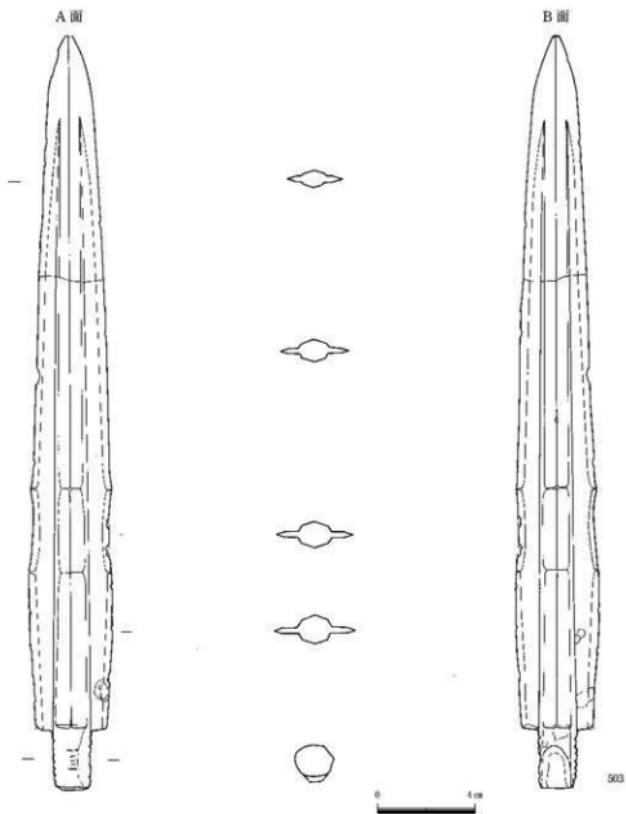
第118図 K0482及び玉類出土状況実測図 (1/30, 1/5)



第119図 K0482出土遺物実測図1 (445~501は1/1、443・444は1/12)



第120図 K0482出土遺物実測図2 (1/2)

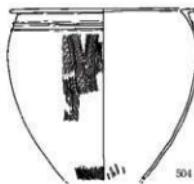
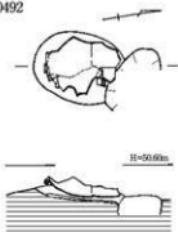


第121図 K0482出土遺物実測図3 (1/2)

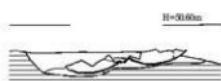
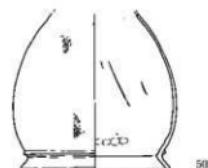
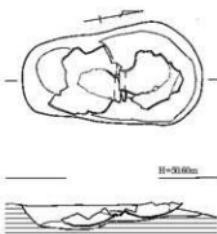
とめられていたものと想定した。また青銅器出土位置の壺棺器壁には水銀朱が付着していた。下壺東側を中心に水銀朱の散布が認められたが、辰砂小粒も含まれている。

出土遺物（第119～121図、写真338・350・351・354） 443は上壺である。口縁部断面はT字形で上面は水平である。胴部内外面はナデにより、内外面ともに黒色顔料を塗布している。444は下壺である。口縁部断面はT字形で上面は内傾する。胴部内外面はナデにより、内外面ともに黒色顔料の痕跡が残る。445～501は棺内出土の玉類である。445～447は翡翠製の勾玉である。穿孔は両側から行う。448～501は緑色凝灰岩製の管玉である。長さは2～8mm、径2～3mm、孔径は1～1.5mm前後である。502は身部および鋒の2ヶ所折損している中細銅矛である。全長40.0cm、関幅4.3cm、袋部外径2.6cm×3.5cmである。袋部下端に幅1cmの節帶を有する。また断面菱形の耳の下端部は節帶の上端部とつながっている。関部以下の身部厚みは3mmで、端部まで均等な厚みを有する。426は身部の中ほど及び鋒がわずかに折損する細銅劍である。全長31.0cm、劍身長28.5cm、茎部長2.5cm、幅は茎部1.5cm、関部3.0cm、刃

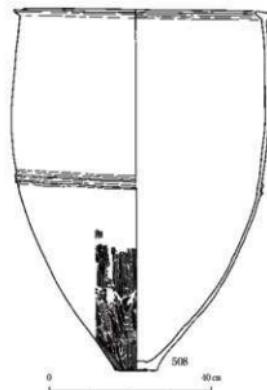
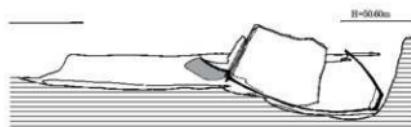
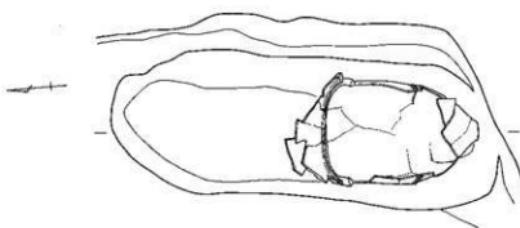
K0492



K0493



K0494



第122図 K0492・0493・0494及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

方下端3.5cm、剖方上端3.4cm、剖方最少幅3.2cmである。箇は関部まで行われており、本調査出土中、剖方以下関部までを研ぎ出すのは本例のみである。茎部は厚さ1.3cmで略円形を呈し、茎部側面みは着柄のための刻みが顕著に残っている。

K0492 (第122図、写真272)

南群南端で検出し、K0482の東側に位置する。削平で墓坑底に接する一部が残るのみである。上壺は口縁部のごく一部が残るのみであるが、接口式の小型棺である。

出土遺物 (第122図504、写真338) 上壺は口縁端部のごく一部が残るのみで、図示し得ない。338は下壺である。口縁部は逆L字形を呈し、上面は水平である。口縁下には2条の三角形突帯を貼付し、胴部外面は継刷毛を行う。色調は灰褐色を呈し、外面に黒色顔料が認められる。

K0493 (第122図、写真273)

南群南端で検出し、K0482の東側に位置する。削平で墓坑底に接する部分が残るのみである。接口式の小型棺である。

出土遺物 (第122図505・506、写真339) 505は上壺、506は下壺である。ともに口縁部はく字形に屈曲し、胴部は丸みを帯びる。上壺外面には痕跡的に黒色顔料が残る。

K0494 (第122図、写真259)

南群南端で検出す。K0482の墓坑東側に埋葬し、K0482→K0480・0494→K0481の先後関係となる(第118図参照)。K0482墓坑内南および東壁に沿って、2.3m×0.8mの墓坑を掘削して、K0482に並ぶように壺棺を埋置している。埋葬に当たってはK0482の壺棺及び墓坑を意識している。埋土はにぶい黄褐色土に明黄褐色土の混合土である。壺棺接合部の下側には橙色粘土を貼付する。

出土遺物 (第122図507・508、写真339) 507は上壺の鉢である。断面T字形の口縁部上面は外傾する。内外面全体に黒色顔料が認められる。508は下壺である。口縁部は内側により強く張り出し、上面は外傾する。胴部は上半が直立し中ほどに2条の突帯を貼付する。内外面全体に黒色顔料が残る。

K0496 (第123図、写真274~277)

南群北端で検出す。4.05m×2.55mの大型のプランを確認しSK0456として掘り下げを行った。墓坑内で確認した遺構の先後関係はSK0497→K0470→K0496→K0469となる。K0496は大型墓坑の西半部を階段状に掘り下げて埋葬しており、埋土は黒褐色土ににぶい黄色土の混合土である。壺棺は接口式で接合部全体に橙色粘土を貼付している。大型墓坑を掘り込んで東側にK0470を埋葬した後、比較的の短期間のうちにK0496を差し向かいで埋葬したもので、当初からの計画的な埋葬と考えられる。

出土遺物 (第123図509・510、写真339) 509は上壺の鉢である。断面T字形の口縁部上面は外傾気味となる。色調は橙色を呈し、胴部調整はナデによる。内外面全体に黒色顔料が認められる。510は下壺である。口縁部は断面T字形で、口縁下には1条の三角形突帯を貼付する。胴部は上半が直立し中ほどに2条の突帯を貼付する。下半には3か所に穿孔が行われる。また内外面に黒色顔料が残る。

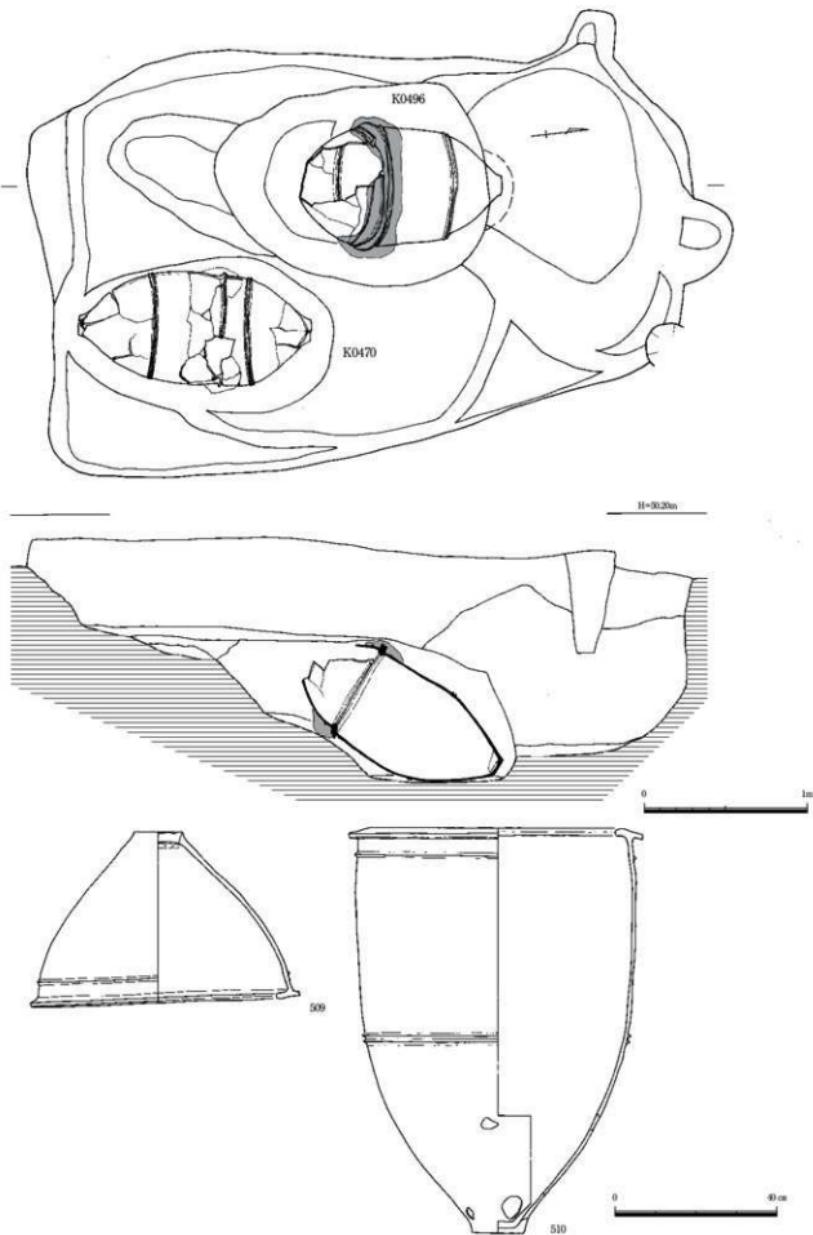
K0499 (第124図、写真278・279)

南群北側で検出し、K0471とSR4917を切る。墓坑は2.1m×1.2mで、埋土は暗灰黄色土である。掘り方は南側から階段状に掘り下げ、北壁を抉って壺棺を挿入・埋置する。

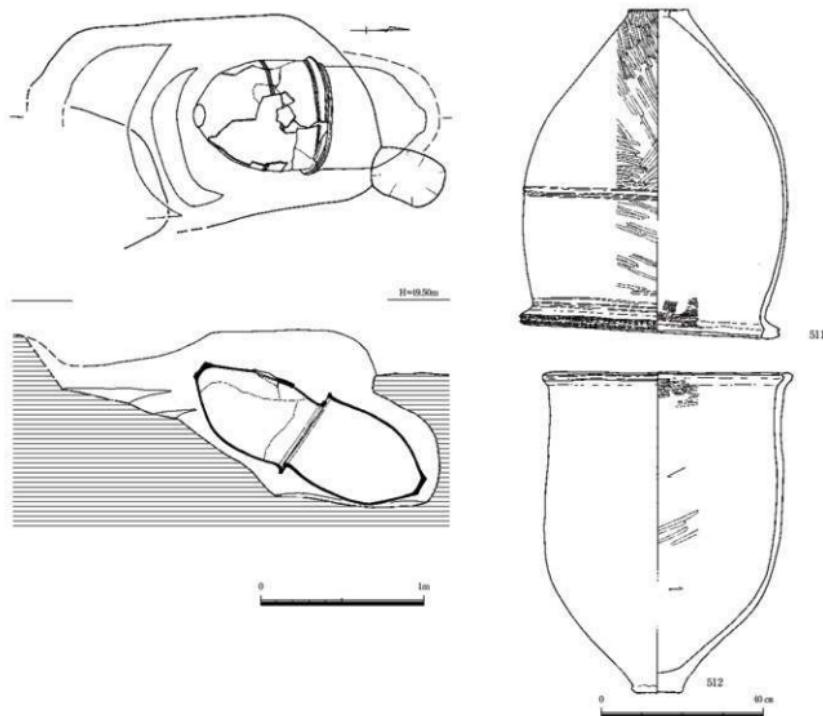
出土遺物 (第124図、写真339) 511は上壺である。口径は56cm×66cmと偏平である。外面調整は丁寧なミガキによる。512は下壺である。胴部上半の屈曲は緩やかでより直立に近い。ミガキ痕跡が残るのは内面上位のみで、その他は丁寧なナデを行う。上下両壺ともに内外面に黒色顔料が残る。

K4901 (第125図、写真208)

北群中央で検出し、SR4910を切る。墓坑は0.9m×0.7mで、埋土は暗灰黄色土である。掘り方は北



第123図 K0496及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)



第124図 K0499及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

側に一段平坦面を有し、南壁沿いに葬棺を埋置する。

出土遺物 (第125図513・514、写真340) 513は上半部を打ち欠いて上堀としている。外面縦刷毛を行う。514は口縁部はく字形を呈し、口縁下外面に黒色顔料が僅かに認められる。

K4902 (第125図、写真296)

北群北端部で検出し、K4903に隣接する。墓坑は $0.7m \times 0.55m$ の平面長円形で、埋土は暗灰黄色土である。墓坑底面は平坦で、北側に葬棺を埋置する。

出土遺物 (第125図515・516、写真340) 515は上半部を打ち欠いて上堀とした丹塗り土器である。516は小型の下堀で口縁部はく字形に屈曲し、端部はコ字形に整える。外面には刷毛目を施す。

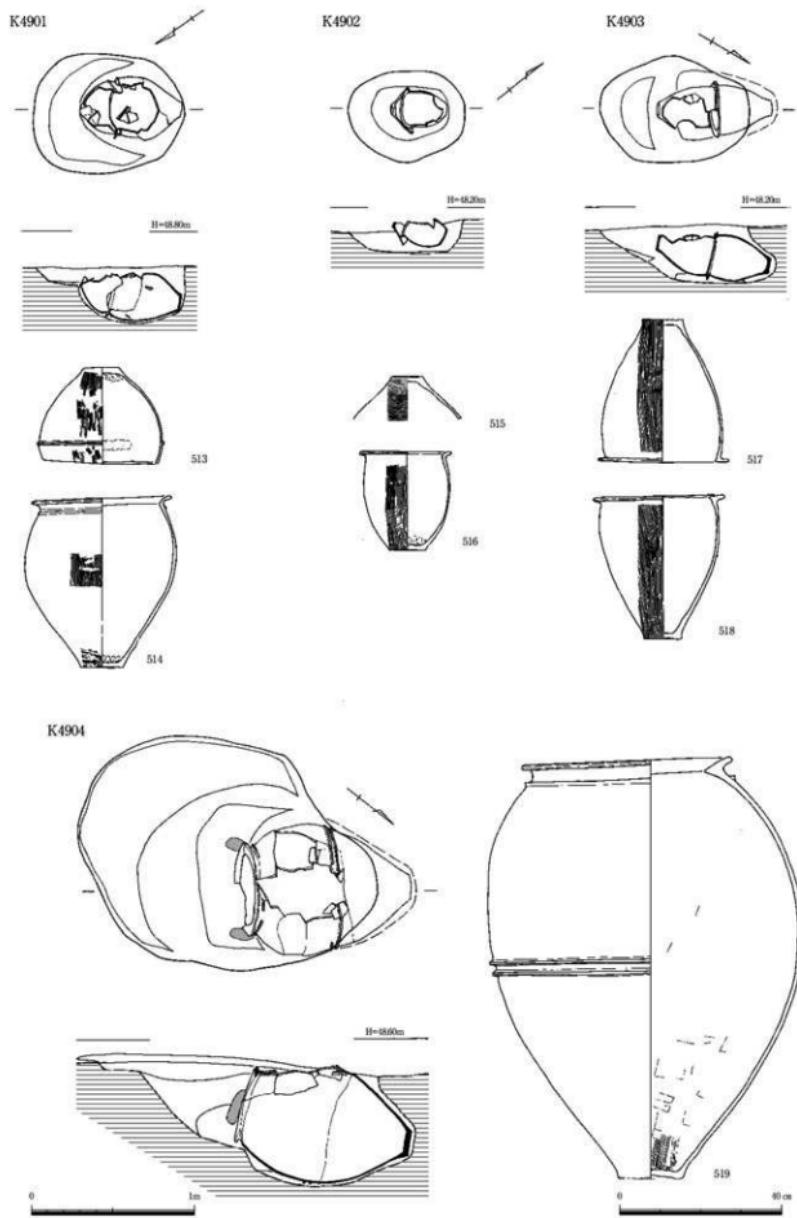
K4903 (第125図、写真297)

北群北端部で検出し、K4902に隣接する。墓坑は $0.9m \times 0.65m$ の平面長円形で、埋土はオリーブ褐色土である。掘り方は南壁を斜めに掘り込み、北壁を抉り込んで葬棺を埋置する。

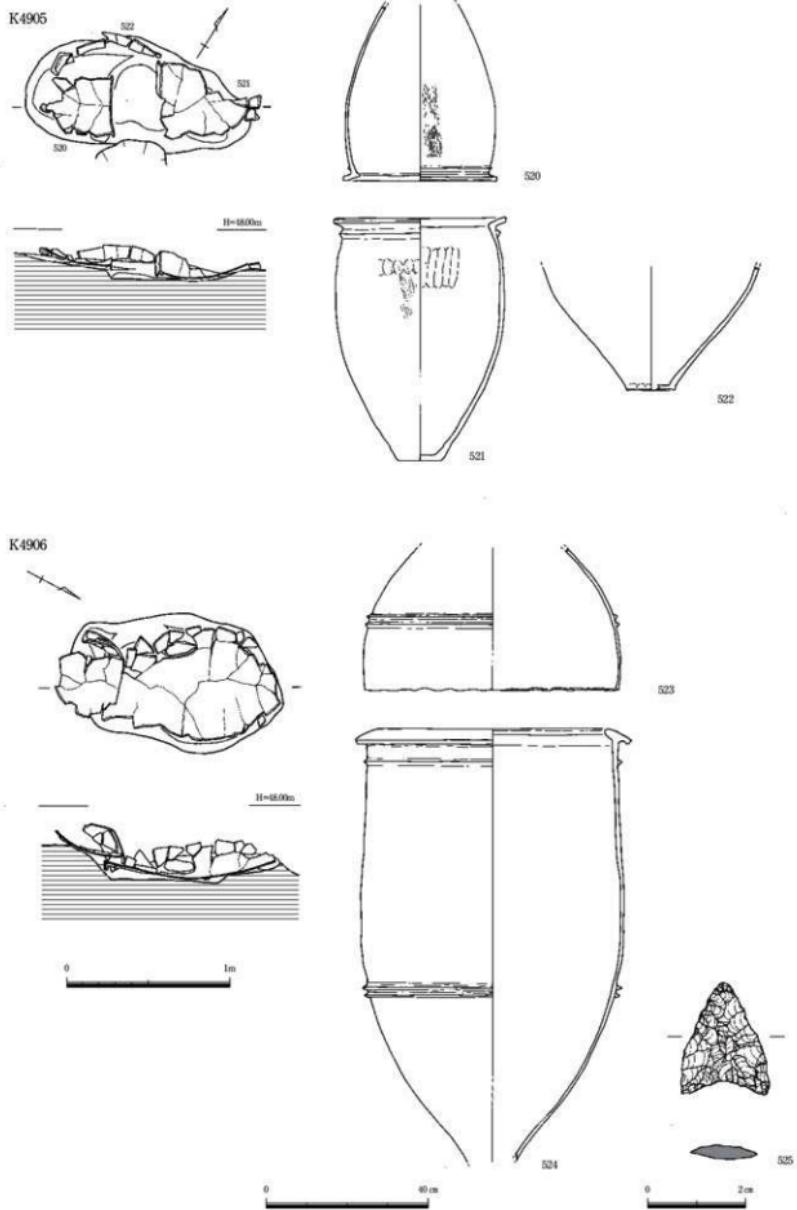
出土遺物 (第125図517・518、写真340) 上堀・下堀ともに口縁部は断面L字形を呈し、砲弾形の胴部は外面に縦刷毛、内面はナデによる。色調はともに灰白色を呈する。

K4904 (第125図、写真298)

北群北端部で検出する。一部崩落しているが、墓坑は一辺 $1.3m$ 程の平面隅丸方形で、埋土はにぶい

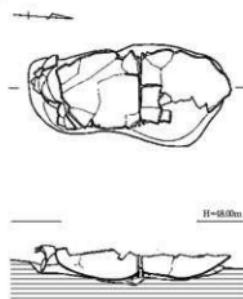


第125図 K4901・4902・4903・4904及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

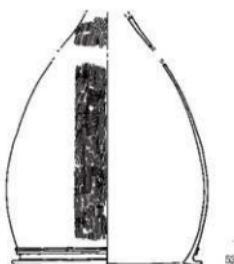


第126図 K4905・4906及び出土遺物実測図 (1/30、525は1/1、その他は1/12)

K4907

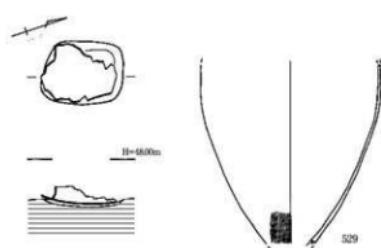


526



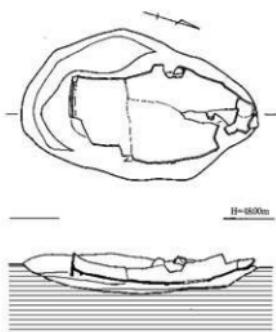
527

K4908



528

K4909



529

第127図 K4907・4908・4909及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)

黄褐色土にぶい黄色土ブロックを含んでいる。墓坑は南壁より階段状に掘り下げ、2段の平坦面を有する。大型の单棺で口縁部沿いに橙色粘土を貼付しており、木蓋の痕跡と考えられる。

出土遺物（第125図519、写真340） 口縁部は逆L字形を呈し、強く内傾する。胴部は丸みを帯び、中位に2条のコ字形突帯を貼付する。内外面ナデによるが、内底付近に刷毛目が残る。

K4905（第126図、写真299）

北群北端部で検出する。削平により底面付近の一部が残存するのみである。埋土暗灰黄色土である。上甕と下甕の間が30cmほど空いており、この部分は横から別個体の破片で覆っている。

出土遺物（第126図520～522、写真341） 520は内傾する逆L字形の口縁部を有する。胴部外面に縦刷毛を行い、外面には黒色顔料の痕跡が残る。521の胴部は砲弾形を呈し、外面は縦刷毛の後ナデを行う。522は上甕と下甕の間を覆う破片の接合資料である。下半の一部が残るのみである。

K4906（第126図、写真300）

北群北端部で検出する。K4907と対になる配置をとり、K4906～4909の4基が北端部に並列している。削平が進み、墓坑底面が残るのみである。呑口の大型棺で、埋土はオリーブ褐色土である。

出土遺物（第126図523～525、写真341・356） 523は胴部破片である。外面には黒色顔料を塗布する。524は下甕である。口縁部は外傾し、口縁下に1条の突帯を貼付する。胴部は上半が直立する。

K4907（第127図、写真301）

北群北端部で検出する。K4906と対になる配置をとり、K4906～4909の4基が北端部に並列している。下甕と中甕は口縁部を接しているが、中甕の底部が欠失しており、これを補うため丹塗り土器の上半部を使用しているものと考えられる。埋土は暗オリーブ褐色土である。

出土遺物（第127図526～528、写真341） 526は上甕の底部を覆う丹塗り土器の口縁部である。外面横ミガキ、内面暗文状の縱ミガキを行う。527は上甕、528は下甕である。ともに動形の口縁部は内傾気味となる。外面は縦刷毛を行い、胴部外面には煤が付着する。

K4908（第127図、写真302）

北群北端部で検出する。K4909と対になる配置をとり、K4906～4909の4基が北端部に並列している。削平が進み、墓坑底面に接する甕の胴部が一部残存するのみである。埋土は黄褐色土である。

出土遺物（第127図529、写真340） 胸部破片である。内外面ナデを行い、外面下端には刷毛目が残る。灰白色を呈し、胴部外面上半部には煤が付着している。

K4909（第127図、写真303）

北群北端部で検出する。K4908と対になる配置をとり、K4906～4909の4基が北端部に並列している。墓坑底面が残るのみである。大型の单棺で、埋土は暗灰黄色土である。

出土遺物（第127図530、写真341） T字形の口縁部は上面が外傾する。砲弾形の胴部には口縁下及び中位に断面三角形の突帯を貼付し、内外面の調整はナデによる。外面に黒色顔料の痕跡が残る。

K4914（第128図、写真280）

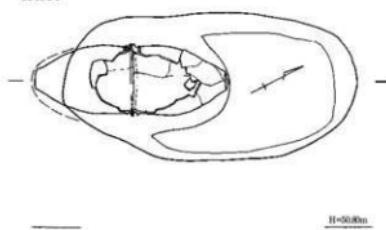
南群南端部で検出する。K4915→K4914の先後関係となる。墓坑は1.8m×0.9mの平面隅丸長方形に近く、埋土は黒褐色土に明黄褐色土ブロックを含む。

出土遺物（第128図531・532、写真342） 531は上甕、532は下甕である。ともにく字形の口縁下に突帯を貼付する。胴部上位が丸みを帯び、外面は縦刷毛、内面はナデを行う。

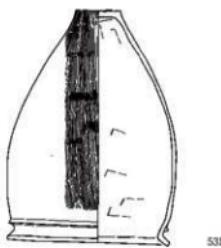
K4915（第128図、写真281～283）

南群南端部で検出する。K4915→K4914の先後関係となる。墓坑は調査区外にのび、2.3m×1.4+ a mの平面隅丸（長）方形を呈する。甕棺は接口式で、接合部全周に橙色粘土を貼付する。また、下

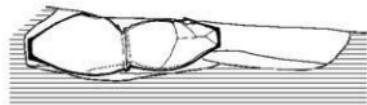
K4914



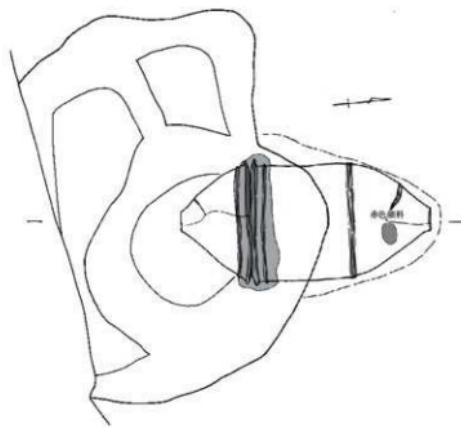
H=0.80m



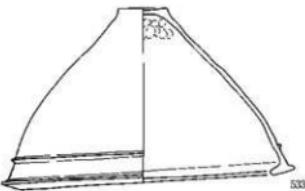
531



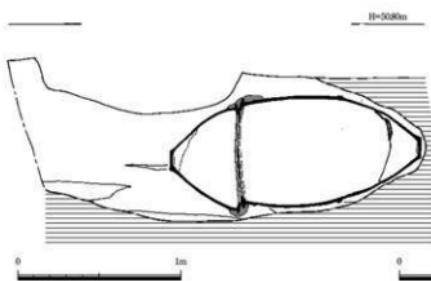
K4915



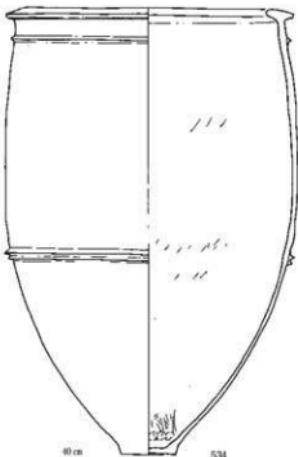
532



533

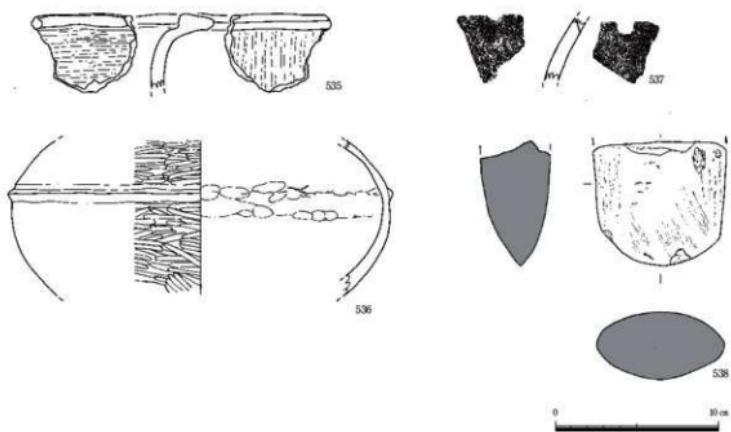
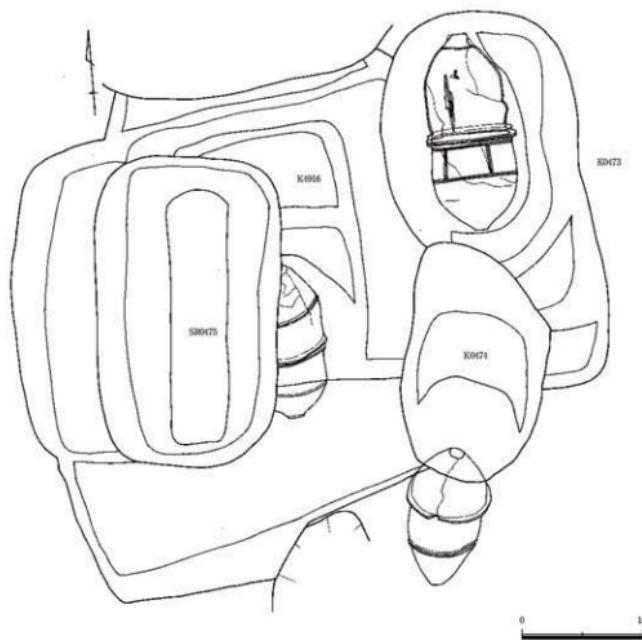


H=0.80m

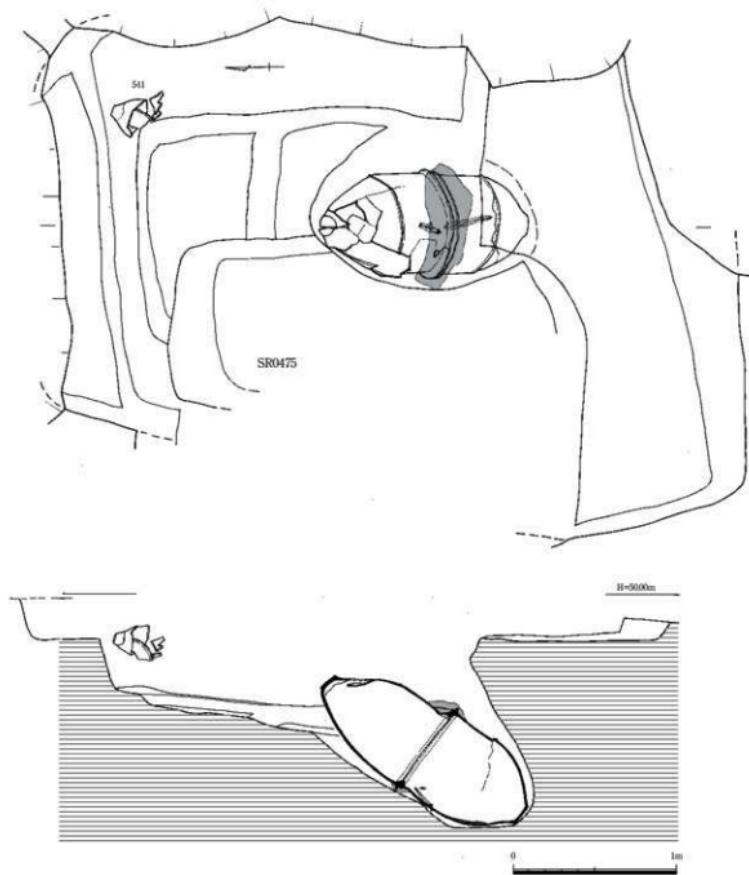


534

第128図 K4914・4915及び出土遺物実測図 (1/30, 1/12)



第129図 K0473・K0474・K4916・SR0475墓坑及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



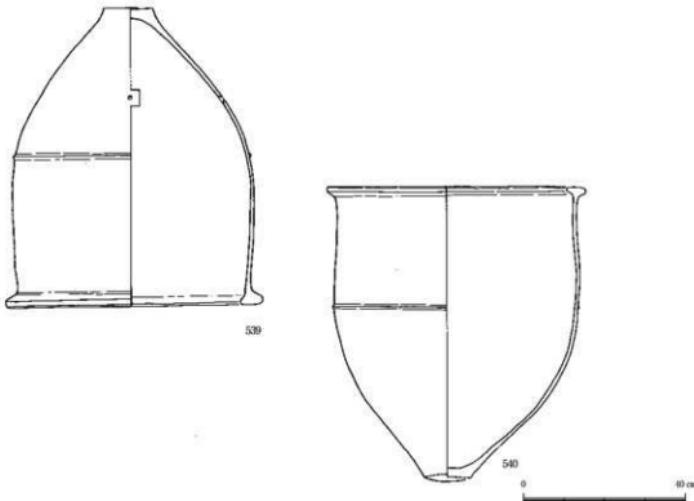
第130図 K4916実測図 (1/30)

壺底部付近器壁内面に径10cm強の範囲で、水銀朱が付着していた。

出土遺物（第128図533・534、写真342） 533は上壺の鉢である。T字形の口縁部上面は外傾気味となる。色調は浅黄橙色を呈し、内外面全体に黒色顔料が認められる。502は下壺である。口縁部は断面T字形で、口縁下には1条の三角形突帯を貼付する。外面全体及び口縁部内面に黒色顔料が残る。

K4916 (第129・130図、写真284~291)

調査区南群中央部で検出する。東側墓坑掘り方をK0474、西側をSR0475に切られている。また当

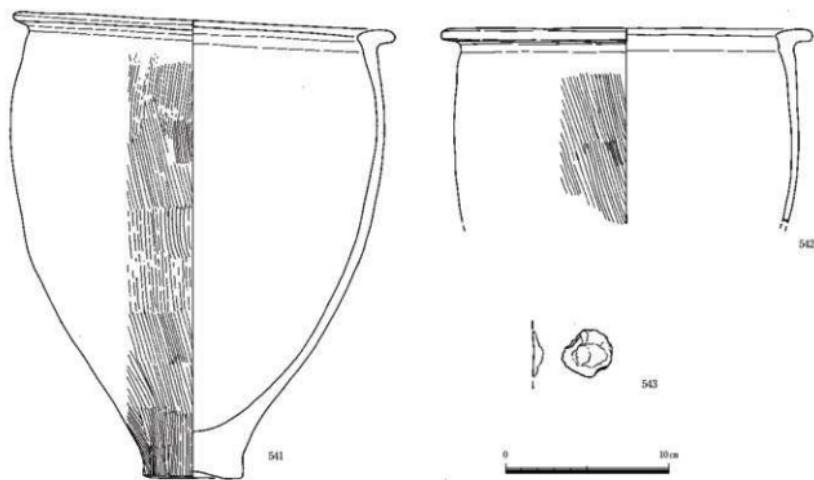


第131図 K4916出土遺物実測図1 (1/12)

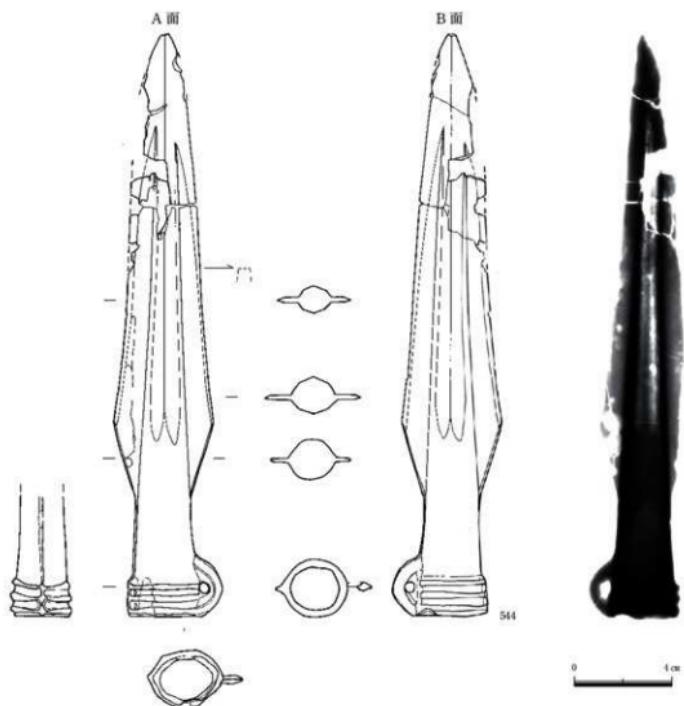
初北側掘り方をK0471、東側掘り方をK0473に切られているものとして掘り下げを行ったが、調査後の壺棺型式等の検討の結果、K4916が後出すると考えられる。掘り方は $4.2 + a \times 3\text{m}$ 程に復元される。掘り方は南北両側に検出面から30cmほどの高さで平坦面が残っており、掘削最初の底面と考えられる。壺棺は更に墓坑南北両側を残して40cmほど掘り下げた後に、中央部を $2.1\text{m} \times 1.4\text{m}$ の平面長方形、断面は北から2段の平坦面を有し階段状に掘り下げた上で壺棺を埋置している。墓坑埋土は黒褐色土にぶい黄褐色土ブロックを含んでいる。なお、掘削時にはSR0475掘り方は分別ができなかつたため、検出面から60cmほどまでをSK0472として掘り下げを行っている。壺棺は接口式で接合部全周に橙色粘土を貼付している。また、墓坑北東側に横倒しとなった壺が出土しており、埋葬に伴う遺物と考えられる。壺棺は上壺西側をSR4916掘り方で壊されている。また下壺内から副葬の銅矛と銅劍が出でているが原位置は保っていない。銅矛は下半部が下壺内から上半を欠失し袋部を下に向かた状態で出土した。上半部は壺棺流入土内からの出土である。袋部の裏側には痕跡的に木質が残り、袋内には柄の木質が残存している。銅劍は下壺底部から出土している。完形で銅劍周辺には形状を保っていないが腐敗した木質が残っており、鞘の痕跡と考えられる。

出土遺物（第129・131～133図、写真324・342・352・353・355・543） 535～538は墓坑全体の上層SK0472で取り上げた遺物である。535・536は壺破片である。535外面及び536外面には黒色顔料が塗布されている。537は焼成後穿孔を行う土器片である。538は玄武岩製の石斧刃先である。

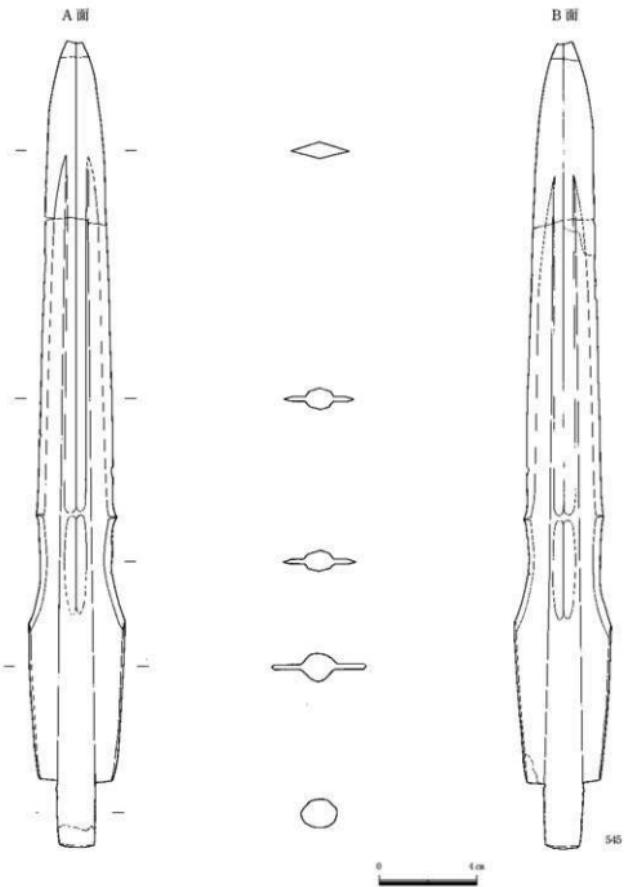
539は上壺である。口縁部は粘土帶を貼付して、張り出しの少ないT字形を呈する。胴部上半は直立し、中位に突帯を貼付する。胴部下位には焼成後の穿孔が行われる。黄褐色を呈し、内外面に黒色顔料を塗布する。540は下壺である。口縁部は粘土帶を貼付して、張り出しの少ないT字形を呈する。胴部上半はわずかにS字状に屈曲し、中位に突帯を貼付する。橙色を呈し、内外面に黒色顔料を塗布する。541は墓坑内出土の壺で、上半の1/5程を失っている。口縁部は外傾する逆L字形を呈し、底部は



0 10 cm

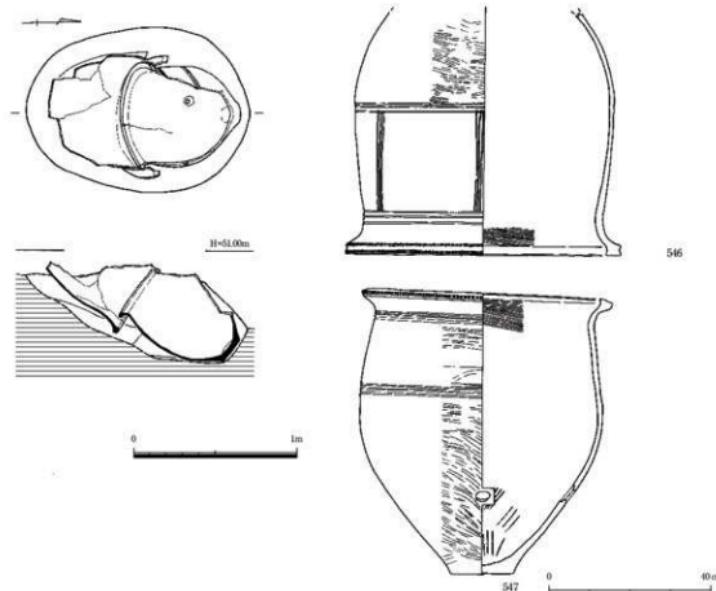


第132図 K4916出土遺物実測図2 (544は1/2、その他は1/3)



第133図 K4916出土遺物実測図3（1／2）

上げ底である。外面には黒色顔料を塗布している。542は墓坑出土の破片である。外面に黒色顔料を塗布している。543は上壺の穿孔で割り取られた破片である。壺棺を墓坑内に埋置後に穿孔を行う。544はSR0475により上部が破損した細形銅矛である。全長24.2cm、闊幅4.2cm、袋部外径2.4cm×2.7cmである。袋部下端に3条の節帯を有する。また断面菱形の耳の下端部は袋部下端に一致する。袋部見通しに2ヶ所、湯口の痕跡が認められる。また、袋部内面に木質が残存する。壺部にかけての繊維を巻きつけたような痕跡は、着柄に伴うものであろうか。545はは身部の中ほど及び鉄部が折損する細形銅剣である。復元全長33.6cm、復元剣身長31.0cm、茎部長2.6cm、幅は茎部1.6cm、闊部3.0cm、刃方下端4.0cm、刃方上端3.3cm、刃方最少幅2.9cmである。鑓は刃方下端まで行われている。刃方以下の翼部の



第134図 K4918及び出土遺物実測図（1／30, 1／12）

厚みは25mmである。茎部厚みは1.2cmで断面は偏平な円形を呈する。

K4918 (第134図、写真292~294)

調査区南群南端部で検出する。調査終了後工事中に法面に露出した甕棺墓である。法面造成により下甕が確認されたため、追加調査を行った。南群より西側に位置しており、南側未調査区域への埋葬遺構群の広がりが想定できる。埋土は黒褐色土で他の同時期の甕棺墓より黒い埋土である。甕棺は覆口式で墓坑南側から斜坑を掘り込んで甕棺を埋置する。

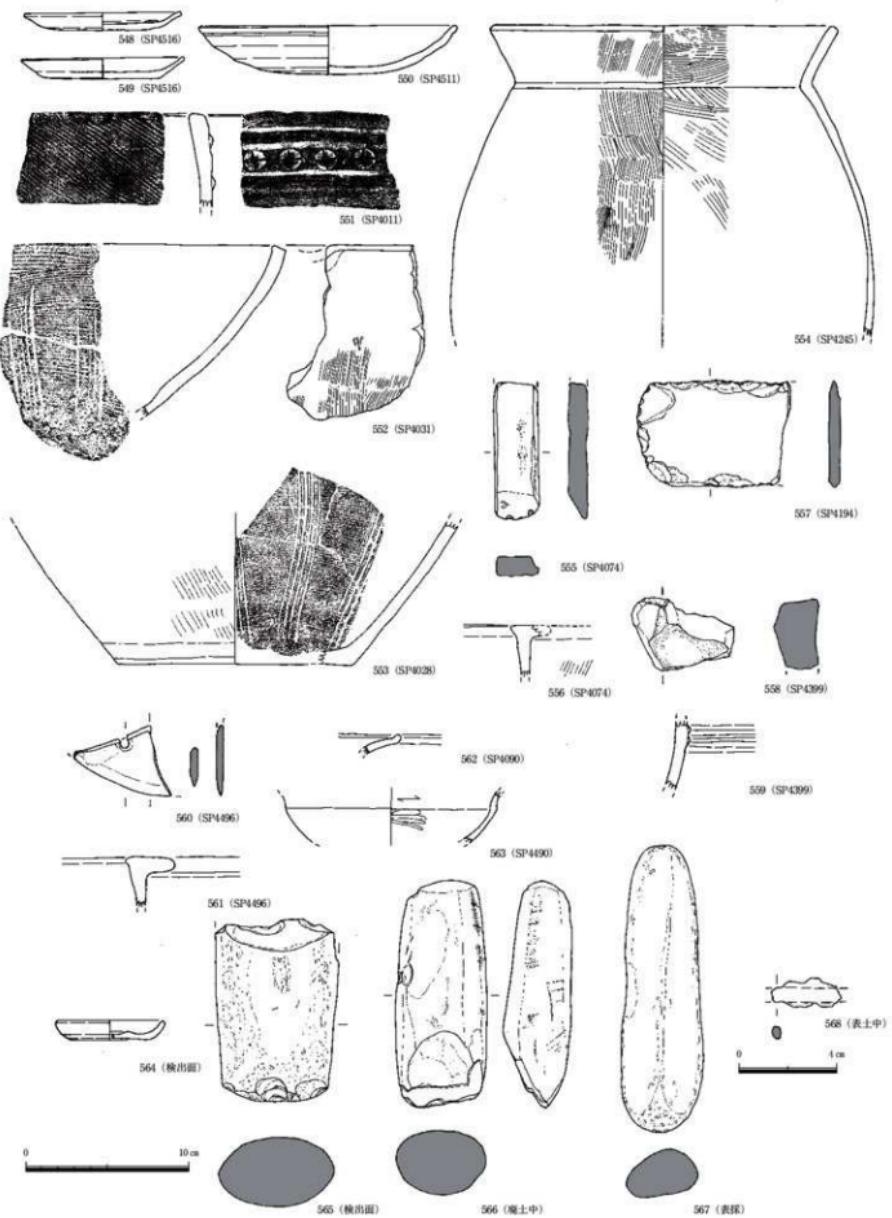
出土遺物（第134図、写真342） 546は上甕、547は下甕である。ともに口縁部上面には粘土帯を貼付する。外面には丁寧なマギキを行い、内面は上部に横刷毛、それ以外は丁寧なナデによる。547の胴部下半には焼成後の穿孔が行われる。

(7) ピット出土遺物（第135図548~563）

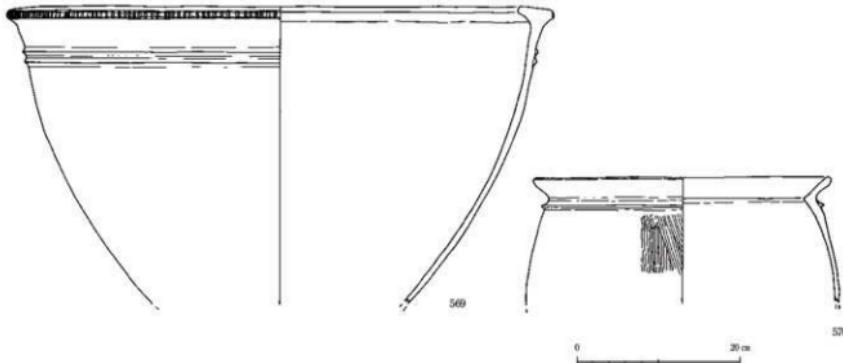
548~550は外底ヘラ切りの土師器である。458・459はピット内から重なって正置されていた。551は土師質土器、552・553は土師質のすり鉢である。554は古墳時代初頭前後の甕上半部である。555は片刃石斧、557は板状の剥片を利用し縁辺部を加工した打製石斧である。558は砂岩製の砥石である。560は石包丁破片である。562・563は縄文土器破片である。

(8) その他の出土遺物（第135・136図564~570）

564は外底糸切りの小皿である。565・566は玄武岩製石斧の破損品である。567は棒状石の先端に敲打痕が残る。568は茎状の鉄器破損品である。569は大型の鉢破片で、内外面に黒色顔料を塗布する。570は中型の甕上半部である。く字形の口縁部外面を肥厚させる。



第135図 その他の出土遺物実測図1 (568は1/2、その他は1/3)



第136図 その他の出土遺物実測図2 (1/6)

遺構番号	主軸方位	墓坑形態	墓坑規模 (長軸×短軸×深さ:m)	棺規模 (長軸×短軸×深さ:m)	備考
0425	N-75°-E	両側二段	2.25×12×1.1	1.72×0.55×0.65	両小口に覆込みあり
0431	N-36°-W	両側二段	2.46×14×0.85	2.0×0.5×0.4	
0437	N-10°-E		3.2×21+a×0.75	2.24×0.6×0.62+a	銅剣副葬
0475	N-6°-W	両側二段	26×22+a×1.26	13×0.47×0.57+a	
0498	N-6°-W	両側二段	18×1.02×0.77	1.2×0.35×0.25	
4910	N-13°-W	片側三段、片側二段	2.5×23×1.0	1.96×0.45×0.9+a	
4911	N-15°-E	片側三段	2.35×2.23×0.65	(1.55×0.58×0.27)	木棺痕跡不明
4917	0°	片側二段	1.95×1.32×0.9	1.5×0.55×0.75+a	

表3 土坑墓・木棺墓一覧表

遺構番号	上蓋	下蓋	合せ口	主軸方位	埋置角度	型式	大きさ	備考
0401	-	瓢	単	N-32°-W	14°	II c	小	石蓋
0402	-	甌		N-23°-W		III b	中	上蓋不明
0403	鉢	甌	接口	N-5°-E	-2°	II b	大	
0404	-	甌	単	N-17°-W	3°	II c	大	
0407	甌			N-2°-E		II b	大	上蓋不明
0408	鉢	甌	接口	N-3°-E	-1°	II a	大	
0409	鉢	甌	接口	N-63°-E	-1°	II a	大	
0410	-	-		N-13°-W		II a	大	甌棺は甌・甌破片を使用か
0411	-	甌	単	N-35°-E	2°	II b	小	
0412	甌			N-8°-E		II c	大	上蓋不明
0413	鉢	甌	接口	N-4°-E	33°	II b	大	
0414	甌	甌	接口	N-10°-E	18°	II b	大	
0415	-	甌	単	N-5°-E	24°	II a	大	
0416	甌			N-63°-W	25°		中	上蓋不明、この1基のみ後期後半
0417	甌	甌	接口	N-27°-E	6°	II c	小	
0418	甌	甌	接口	N-29°-E	9°	II c	小	
0419	甌	甌		N-86°-E	2°	II a	中・大	上蓋と下蓋の間を甌棺破片で覆う

0420	鉢	甕	接口	N - 1° - E	11°	II a	大
0422	鉢	甕	接口	N - 9° - E	26°	II c	大
0423	甕	甕	接口	N - 7° - E	30°	II b	中・大
0424	甕	甕	覆口	N - 41° - W	32°	IV a	小・中
0427	甕	甕	接口	N - 18° - E	40°	II c	小・中
0428	-	甕		N - 19° - E	2°	II b	大
0429	甕	甕	接口	N - 30° - W	2°	IV a	中・大
0430	甕	甕	接口	N - 18° - W	6°	IV a	中
0432 A	甕	甕		0°	12°	IV a	小
0432 B	甕	甕		N - 20° - W	19°	IV a	中・中・中
0433	-	甕	單	N - 7° - W	12°	II b	大
0434	甕	甕	接口	N - 2° - E	17°	II c	大
0441	甕	甕	接口	N - 1° - W	17°	II b	大
0442	甕	甕	接口	N - 19° - W	22°	II b	中・大
0443	甕	甕	接口	N - 29° - W	16°	II b	大
0447	甕	甕	接口	N - 3° - E	21°	II c	中
0448	-	甕	單	N - 3° - W	3°	II c	小
0449	甕			N - 21° - W	38°	II b	小
0450	-	甕	單	N - 12° - E	15°	II b	小
0451	甕			N - 1° - W	17°	II a	小
0452	-	甕	單	N - 9° - E	9°	II a	中
0455	甕	甕	接口	N - 14° - E	9°	IV a	小・中
0457	-	甕	單	90°	- 25°	I c	大
0458	鉢	甕	接口	N - 15° - E	27°	II a	大
0459	鉢	甕	接口	N - 14° - E	20°	II a	大
0460	甕	甕	接口	N - 26° - E	37°	II c	中
0461	-	甕	單	N - 12° - E	0°	II c	大
0462	鉢	甕	覆口	N - 11° - E	37°	II c	大
0463	甕	甕	接口	N - 12° - E	43°	II b	大
0464	甕	甕	接口	N - 15° - E	28°	II b	大
0465	鉢	甕	接口	N - 16° - E	23°	II c	大
0466	甕	甕	接口	N - 20° - E	2°	IV a	中
0467	-	甕	單	N - 40° - W	30°	II a	小
0468	甕	甕	接口	N - 18° - W	1°	II a	大
0469	甕	甕	接口	N - 6° - W	- 3°	II a	小・中
0470	甕	甕	接口	N - 7° - E	- 1°	II c	大
0471	甕	甕	存口	N - 2° - W	- 16°	I c	大
0473	甕	甕	接口	N - 2° - W	- 2°	I c	大
0474	鉢	甕	覆口	N - 6° - E	37°	II b	大
0477	甕	甕	接口	N - 13° - W	- 2°	II b	大
0478	甕	甕	接口	N - 1° - W	33°	II b	大
0480	甕	甕	接口	N - 17° - E	25°	II b	大
0481	-	甕	單	N - 11° - E	6°	II a	大
0482	甕	甕	接口	N - 14° - E	21°	II b	大
0492	甕	甕	接口	N - 9° - E	12°	II b	小
0493	甕	甕	接口	N - 12° - E	8°	IV a	小
0494	甕	甕	接口	N - 5° - E	26°	II c	大
0496	鉢	甕	接口	N - 7° - E	31°	II a	大
0499	甕	甕	接口	0°	32°	II a	大
4901	甕	甕	存口	N - 35° - E	11°	II c	小
4902	甕	甕	覆口	N - 39° - E	14°	II c	小
4903	甕	甕	接口	N - 30° - W	11°	II c	小
4904	-	甕	單	N - 39° - W	14°	II c	大
4905	甕	甕		N - 57° - E	3°	II b	中
4906	甕	甕	存口	N - 30° - W	4°	II a	大
4907	甕・甕・甕			N - 5° - W	0°	II a	中
4908	甕			N - 20° - E		II a	中
4909	-	甕	單	N - 15° - W	4°	II a	大
4914	甕	甕	接口	N - 28° - E	2°	II b	中
4915	鉢	甕	接口	N - 7° - E	- 1°	II a	赤色顔料あり
4916	甕	甕	接口	N - 2° - W	40°	II a	銅鏡・銅矛副葬
4918	甕	甕	覆口	N - 1° - E	36°	I c	大

*器高50cm以下を小形、50~70cmを中形、70cm以上を大形とする

*甕棺型式については横口達也「甕棺の編年的研究」『九州縄貫白陶造陶系埋蔵文化財調査報告』XXXI 福岡県教育委員会による

表4 甕棺墓一覧表

6 5区の調査

1) 概要

5区は1区の南側に位置する。丘陵裾の法尻部分に位置し、調査前現況は水田で、田面標高は48.11～48.27mである。

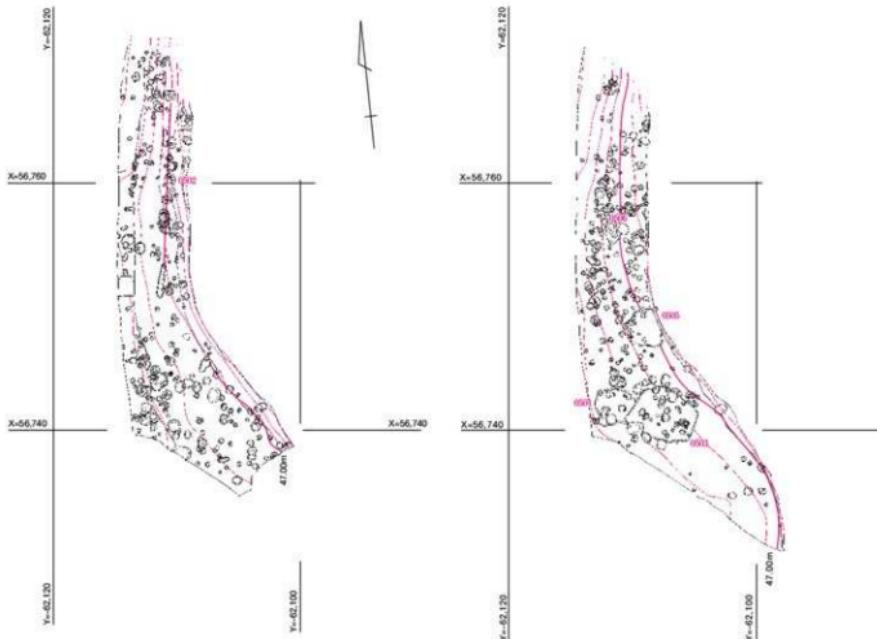
基本層序は1・2区と同様であり、調査もまず水田土壤直下の遺物包含層である黒褐色土を除去した黄褐色土上面で黒褐色土埋土を主体とした遺構を検出し掘り下げを行った（上面）。この際遺構面に類似した埋土が灰オリーブ色土、暗灰黃灰色土等の遺構については判別が困難で、黄褐色土除去後の明黄褐色土上面で確認した（下面）。その結果1・2区同様に本来は1面である遺構面を2面で調査することとなった。おおむね上面では古墳時代以降の遺構、下面では弥生時代の遺構を確認している。遺構分布は全体に濃密で、1区で確認した各時期の集落が広がっていることが確認できるが、南端部では遺構面に拳～人頭大の礫を多く含み、分布が散漫となっている。

主な検出遺構は弥生時代中期の堅穴住居跡1棟、弥生時代終末期～古墳時代前期の掘立柱建物1棟があり、このほか弥生時代～古墳時代の土坑・ピットである。

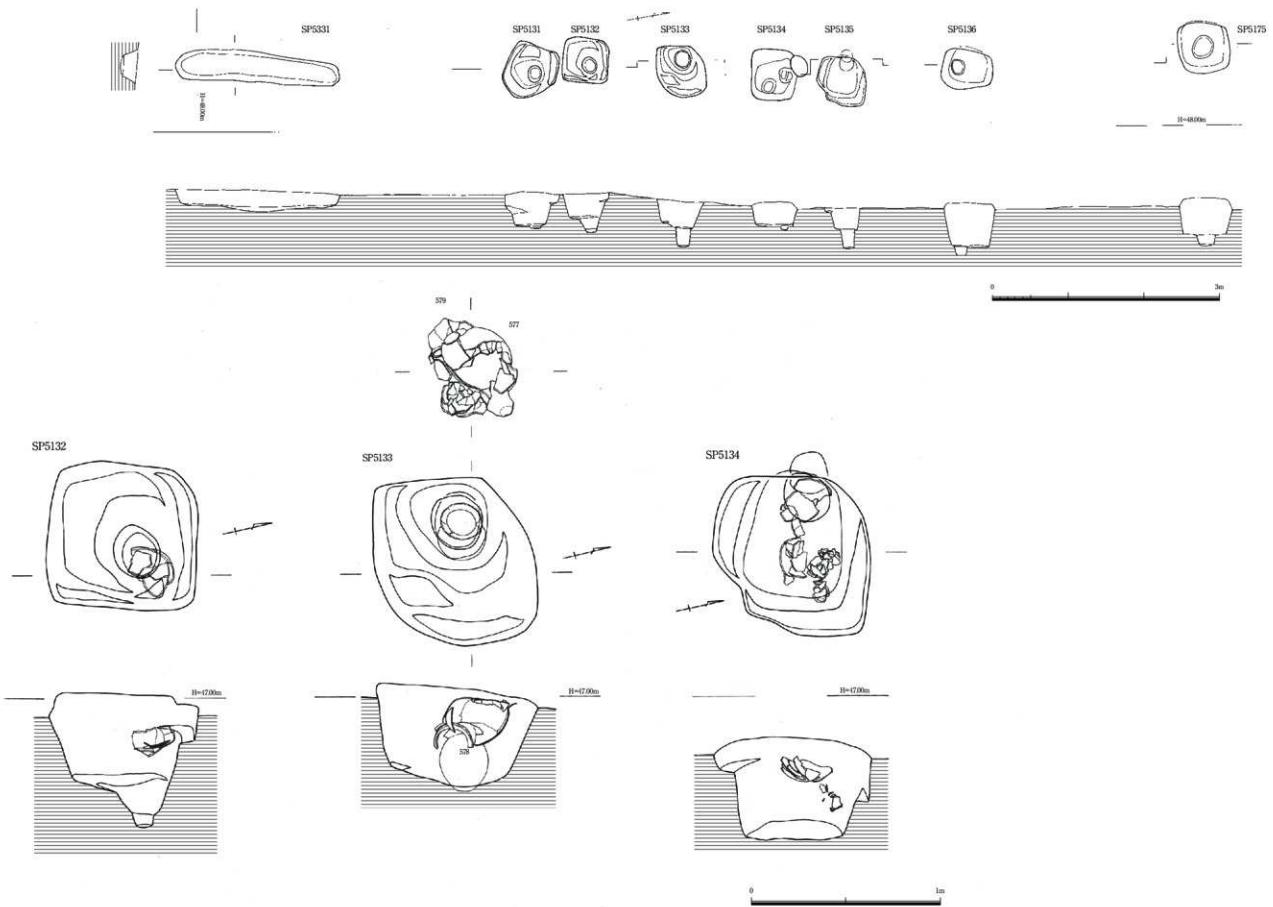
出土遺物の大半は弥生時代～古墳時代初頭である。特にピット出土土器では弥生時代中期中頃～末が大半を占め、5区北側で中期前半の遺物が少量出土している。また古墳時代後期以降の遺物は混入と考えられるものが極少量認められるのみである。聞き取りによると5区西側の丘陵上にはビニール

上面

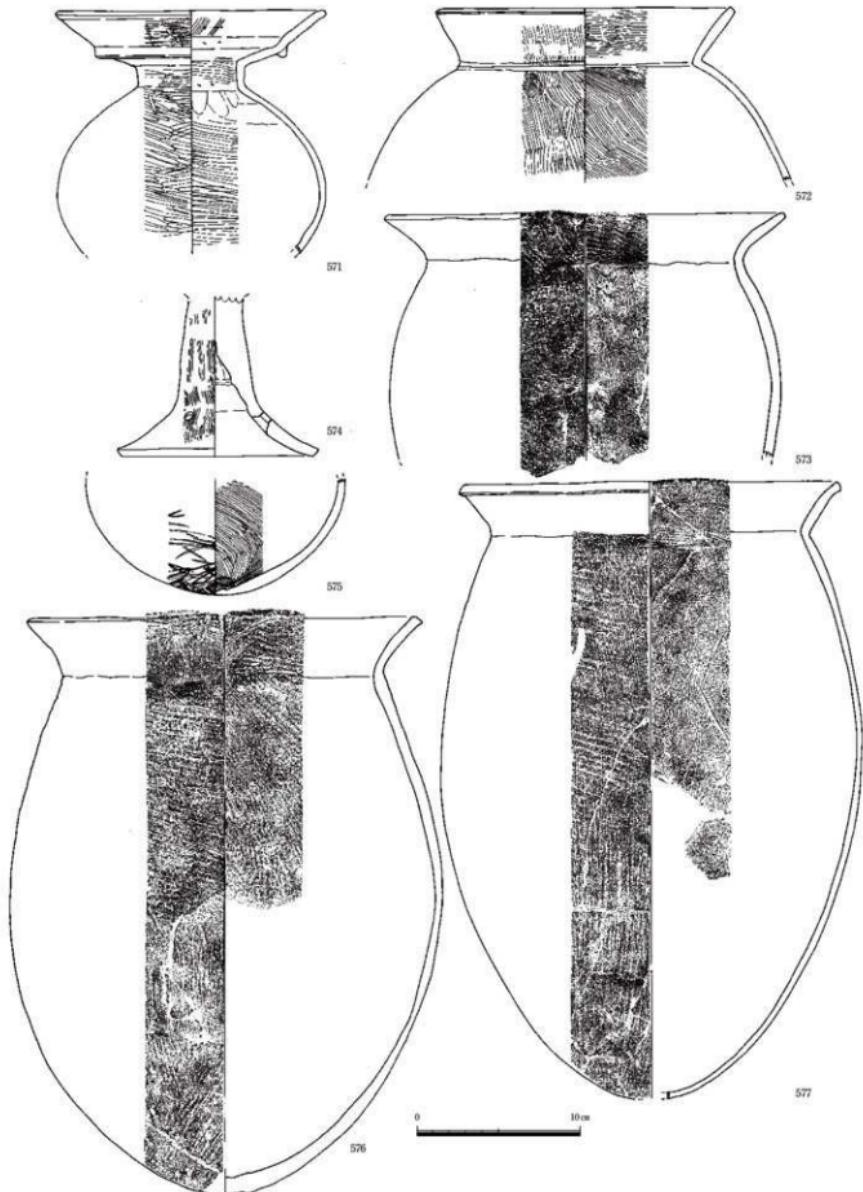
下面



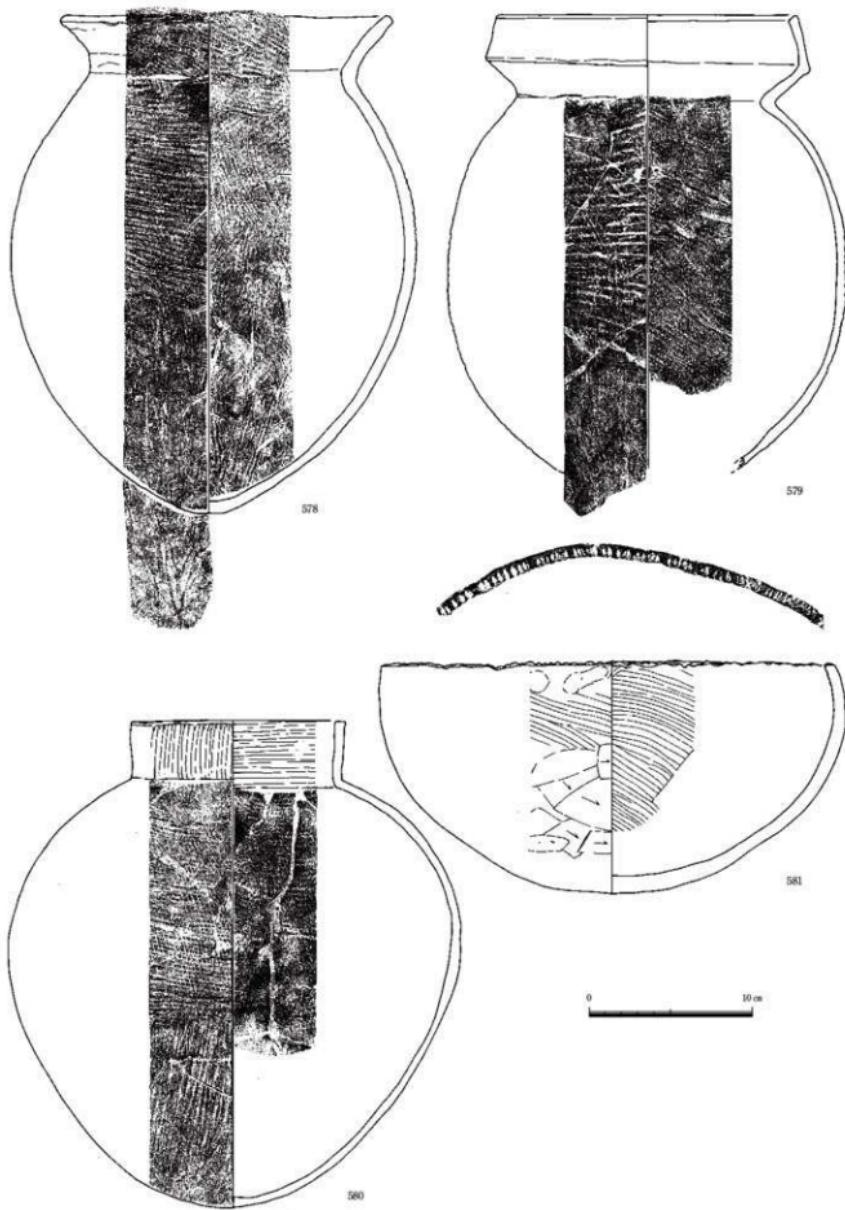
第137図 5区全体図 (1/400)



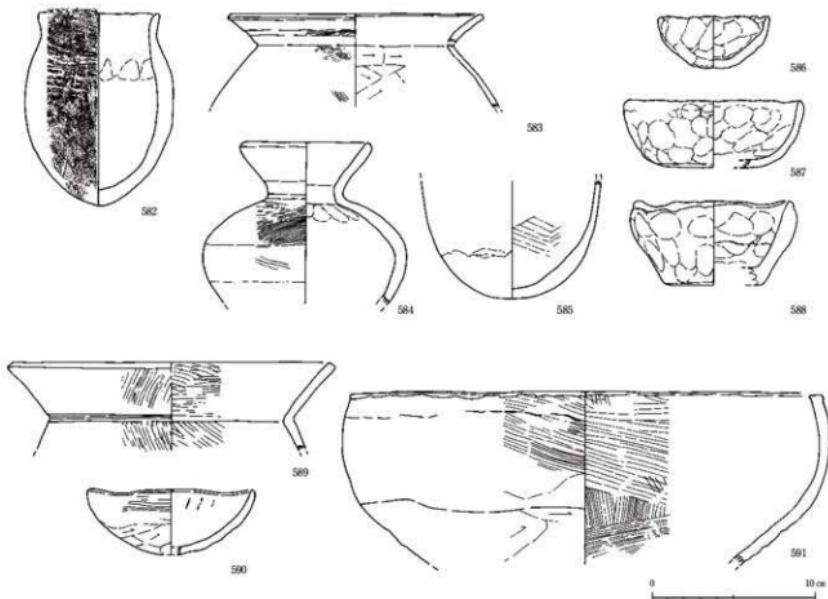
第138図 SB0502実測図 (1/20、1/50)



第139図 SB0502出土遺物実測図1 (1/3)



第140図 SB0502出土遺物実測図2 (1/3)



第141図 SB0502出土遺物実測図3 (1/3)

ハウスが建設されており、それ以前には古墳時代後期の円墳が存在していたようであるが、現在は削平により墳丘は失われている。今回の調査でも古墳に伴うと考えられる遺物（耳環：618）が丘陵部より転落、採集されている。

2) 遺構と遺物

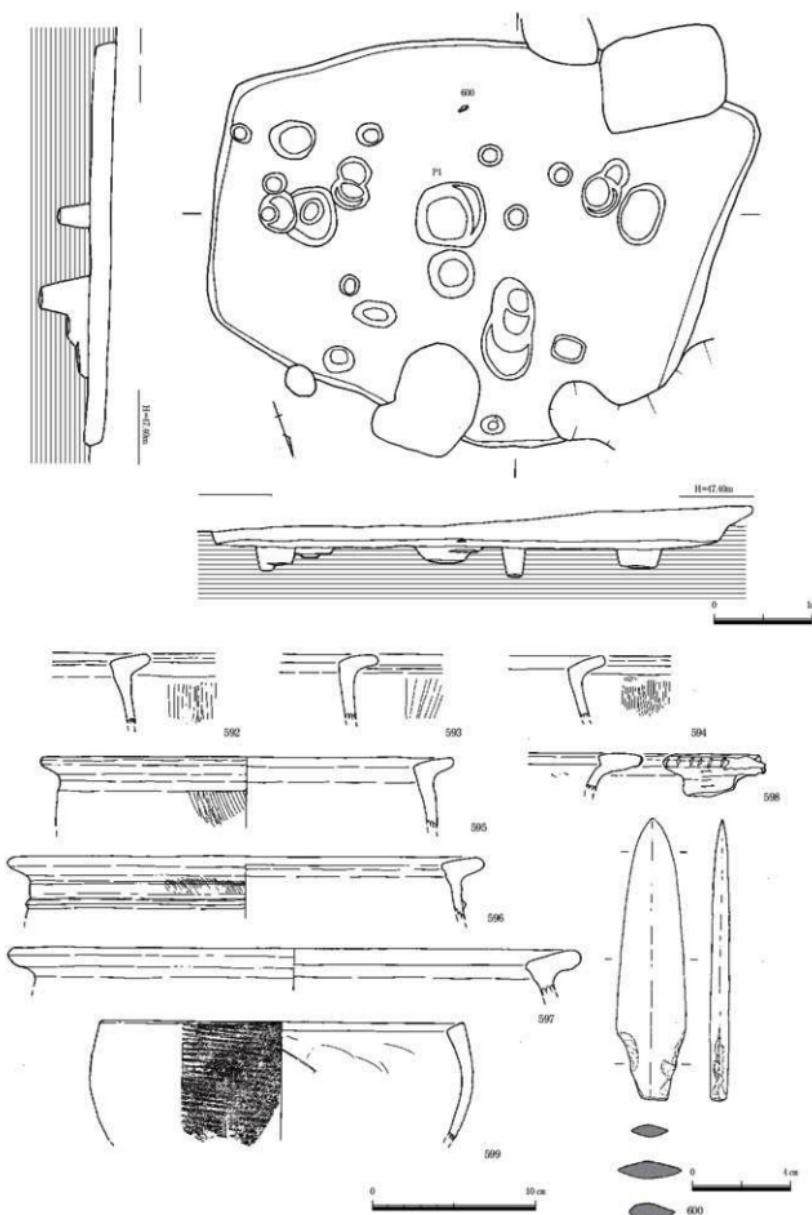
(1) 掘立柱建物 (SB)

SB0502 (第138図、写真306~311)

調査区北側で検出する。SP5131~5136、SP5175がほぼ直線的に並び、南側には同様の埋土で軸を揃える溝状のSP5331が配されている。直線的な配置を確認したのみで、対応する柱穴列は確認していない。建物としては明らかにし得ないが、有機的な関連をもつ遺構群としてとらえられる。

ピットの掘り方は一辺50~90cmの平面方形を基本とする。埋土は黒褐色土で柱痕跡は明らかでないが、底面には直径20~25cm程の柱埋設坑が残っている。また、SP5132・5133・5135には柱抜き取り後の土器埋納が認められる。特にSP5133では抜き取り後に完形の甕(578)を据えた上層にさらに土器を埋納している。また、溝状のSP5331は長さ2.6m、幅50cmで、現状で深さ25cmである。柱穴列の延長線上に軸を揃えて確認されており、機能は不明ながらも関連遺構の可能性が考えられる。各遺構からの出土遺物より古墳時代初頭に位置付けられる。

出土遺物 (第139~141図、写真324・325) 571~573はSP5131出土である。571は外來系の二重口縁壺である。偏球形の胴部は外面刷毛目の後ミガキ、内面は横刷毛を行う。口縁部には内外面に暗文状の縦ミガキが行われる。572は内外面刷毛目による。573は外面タタキの後ナデを行う。



第142図 SC0503及び出土遺物実測図 (1/50、600は1/2、その他は1/3)

574～581はSP5133出土である。576は最上面の壺である。削平により失われている部分もあるが本来は完形であろう。胴部は最大径を中位に有し、下膨れ気味となる。また、直径2cmほどの底部を有する。胴部外面はタタキの後上半はナデ、下半は削りによる。口縁部外面から胴部内面にかけては刷毛目を行う。577は長胴で胴部外面はタタキの後上半は刷毛、下半は削りによる。口縁部外面から胴部内面にかけては刷毛目を行う。578はほぼ完形の壺である。外面には煤が付着する。底部は外面のヘラ削りと内面からの指押さえにより尖底気味に整形する。579は橙色を呈する二重口縁の壺である。580はほぼ完形の直口壺である。底部は丸底となり、胴部外面はタタキの後下半は削り、内面は全面刷毛目による。581はほぼ完形の大型の椀である。外面は上半刷毛、下半ヘラ削り、内面は刷毛目による。端部には刻みを施す。

582～588はSP5135出土である。582は柱痕跡から出土している。外面タタキの後下半はナデ、内面は全面ナデを行う。底部は尖底気味に仕上げる。583は灰白色を呈し薄く仕上げる。口縁部はわずかに外反し、胴部は外面タタキの後刷毛目、内面は頸部以下横方向のヘラ削りを行う。584は壺で偏球形の胴部は外面上半刷毛目、下半削りを行う。内面はナデである。585は底部破片。586～588は手づくねの椀である。

589はSP5136出土である。長胴壺の口縁部で内外面刷毛目による。

590・591はSP5175出土である。590は小型の椀で外面下半ヘラ削りを行い、内面にはヘラ状工具の小口痕跡が残る。591は大型の椀である。外面は上半刷毛の後ナデ、下半はヘラ削りを行う。内面は刷毛目による。

(2) 穫穴住居跡 (SC)

SC0503 (第142図、写真312・313)

調査区南側で検出する。上面で遺構の存在は確認していたが、不明瞭であったため下面で調査を行った。5区ではこれより南～東側では遺構が散漫となる。SK0504→SC0503の先後関係となり、黒褐色土埋土のピットに切られ、遺構埋土は暗灰黄色土～黄灰色土である。東西長5.2m、南北長4.1mで、平面はやや歪な長方形である。床面は平坦で中央のP1が炉跡の可能性があるが、炭化物は認められない。床面からやや浮いて磨製石剣が出土する。出土遺物は小破片のみで、弥生時代中期中頃に位置付けられる。

出土遺物（第142図、写真356） 592～597は壺の口縁部破片である。断面は逆L字形を呈し、口縁部上面は内傾する。598は上面に粘土帯を貼付し断面錐形にした口縁部破片である。端面には刻みを施す。599は椀である。灰白色を呈し、胎土には径3mmほどの石英砂粒が多く含む。外面はタタキを行う。600は石剣である。全長11.5cm、関部幅2.9cmである。頭は頭部にまで入り、茎部端は折損している。

(3) 土坑 (SK)

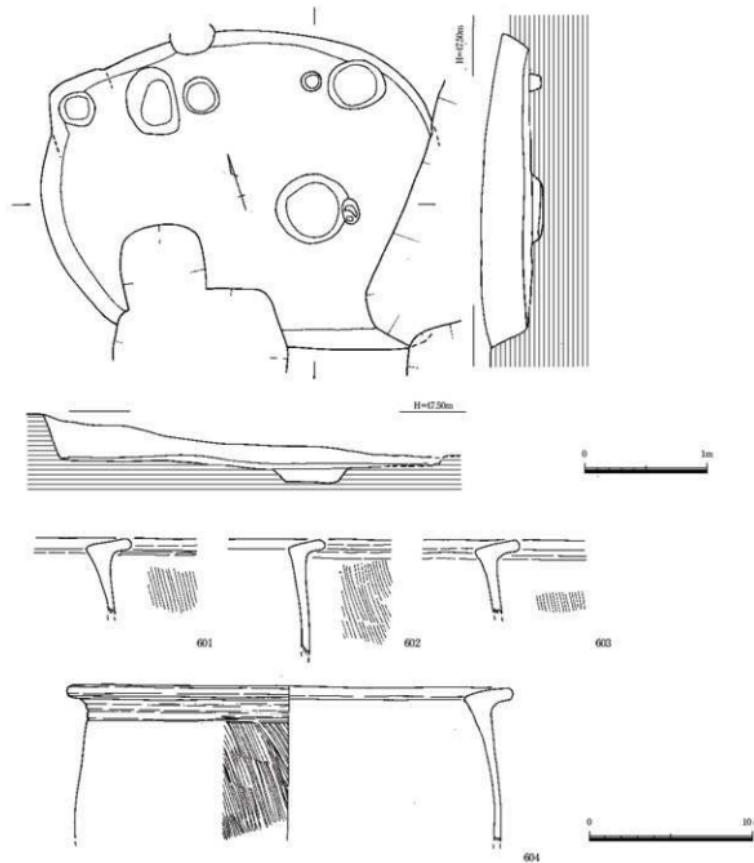
SK0504 (第143図、写真314)

調査区南側で検出する。SK0504→SC0503の先後関係となり、埋土は灰オリーブ色土である。東西長3.3m、南北長2.6mの長円形に復元できる。床面は平坦で検出面からの深さは40cmである。弥生時代中期中頃に位置付けられる。

出土遺物（第143図） 601～604は壺の口縁部破片である。断面は逆L字形を呈し、口縁部上面は内傾する。胴部の膨らみは少なく、外面は縦刷毛を行う。

SK0505 (第144図、写真315)

調査区中央で検出する。埋土は黒褐色である。東西長2.5m、南北長3mの均整のとれた長方形に復元できる。床面北東側に被熱痕跡が認められ、埋土中央南側上面には50cmほどの範囲に炭化物が広



第143図 SK0504及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

がっていた。弥生時代中期に位置付けられる。

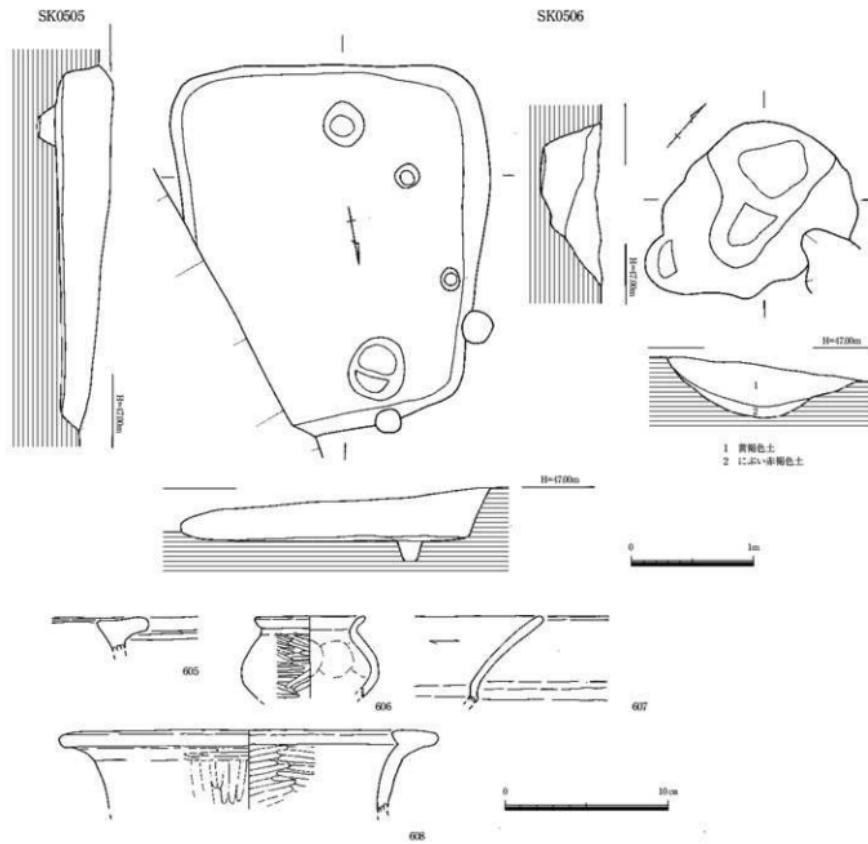
出土遺物（第144図） 605は逆L字形の口縁部破片である。606は小型の壺である。内外面ナデによる。607は薄手の口縁部破片である。内外面ナデを行う。608は粘土帯を貼付し断面彫形に整形する。

SK0506 (第144図、写真316・317)

調査区北側で検出する。平面は不整形で、断面はすり鉢状に深くなる。2層は焼土と考えられるが埋土には炭化物等は含まれておらず、被熱痕跡も認められない。遺物は出土していない。埋土から弥生時代中期の遺構と考えられる。

(4) ピット出土遺物 (第146図609~617)

概要の項で述べたように、ピット出土遺物では弥生時代中期中頃～古墳時代初頭のものが大半を占



第144図 SK0505・0506及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

め、北側で中期前半の遺物が少量出土している。また古墳時代以降の遺物は混入と考えられるものが極少量認められる。またSB0502で報告したものを含め、掘り方が方形もしくは弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物を含むピットを第145図に図示している。

609・610は外面タタキを行い、内面刷毛による長胴の壺である。611は小型の鉢で内外面刷毛目による。612・613は縄文土器。614～617は壺の口縁部破片である。

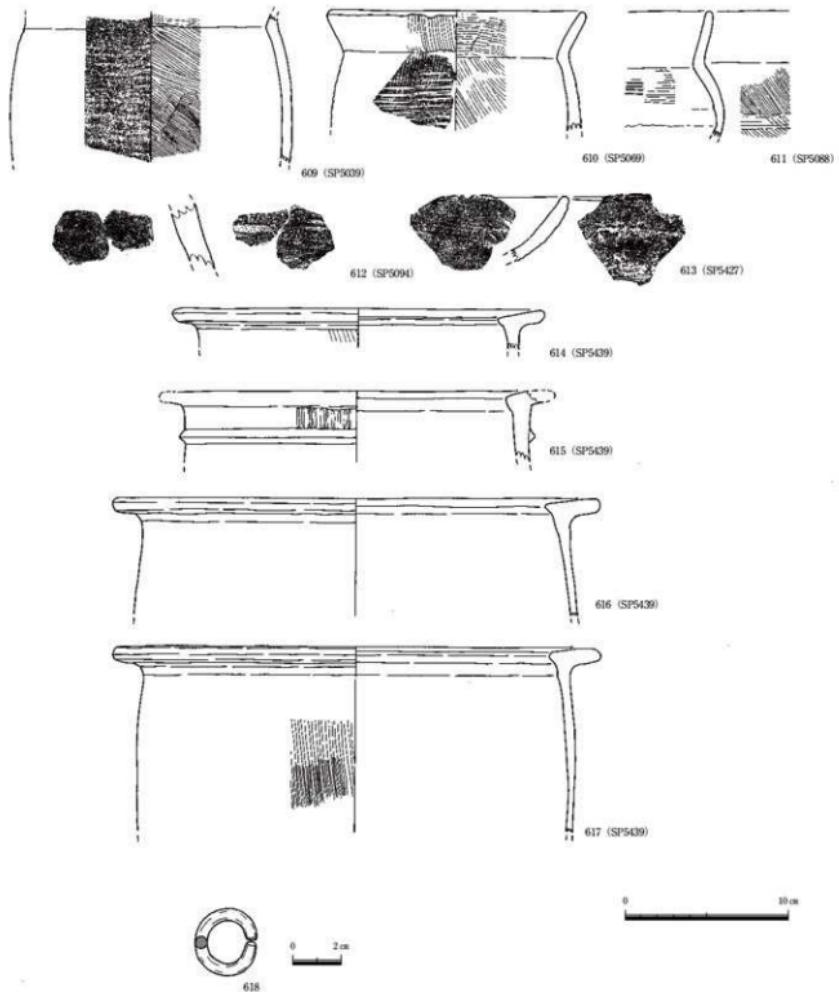
(5) その他の出土遺物（第146・147図、写真354）

618は雨天後に調査区上面で採取した耳環である。5区西側の丘陵上には以前には古墳時代の円墳が存在していたようであり、搅乱を受けた遺物が丘陵部より転落したものであろう。

619～628は調査区南端部において黄褐色土上面に堆積した黒褐色土包含層掘り下げ時に出土したも

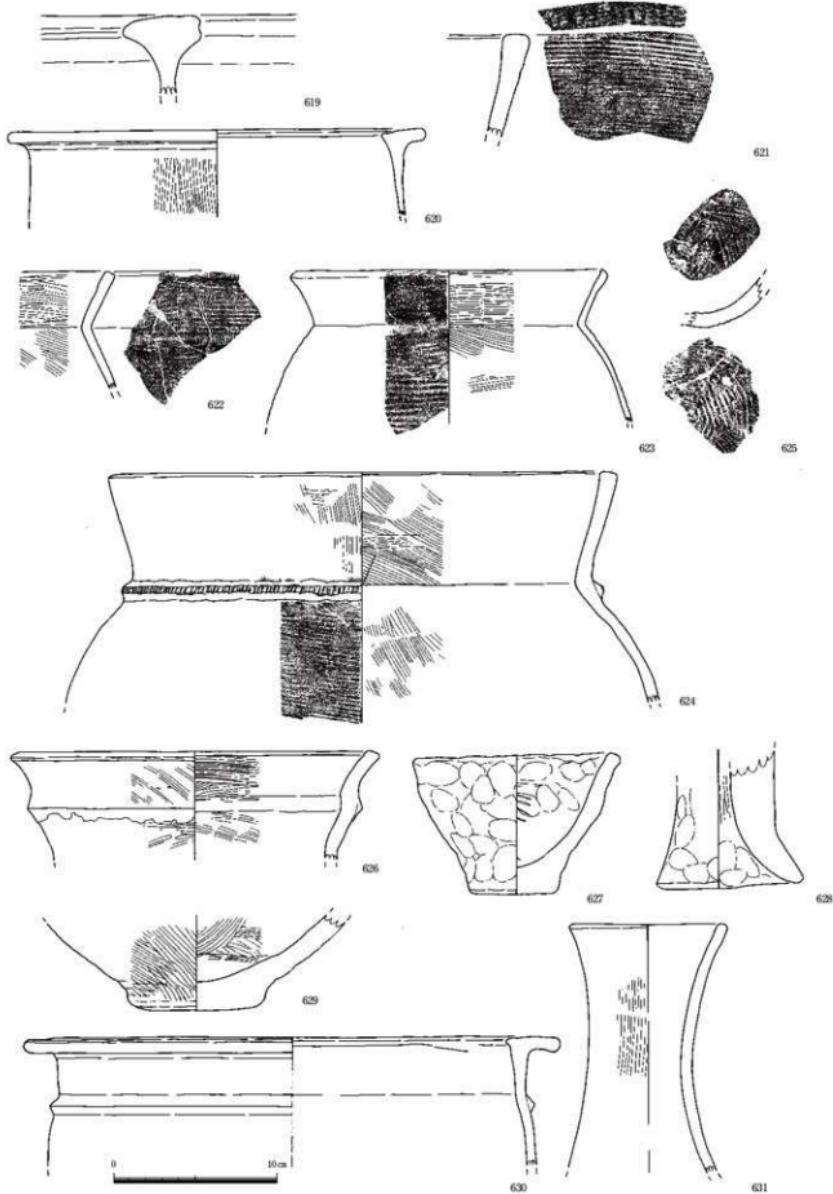


第145図 5区構造配置図（上面と下面重ね図 1/200）



第146図 その他の出土遺物1 (618は1/2、その他は1/3)

のである。比較的多くの遺物を包含しているが、ここでは弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を主体とし、中期中頃～後半の遺物がこれに加わっている。時期的には比較的まとまっているが、1・2・5区で確認したこの黒褐色土包含層上面から掘り込まれた遺構は認められず、形成時期は不明である。629～631は5区南側検出時に出土した遺物である。



第147図 その他の出土遺物2 (1/3)

7 小結

岸田遺跡は扇状地形が自然開析によって舌状に分離した砂礫台地、およびその前面にひろがる沖積扇状平野に位置する。第1次調査地点は、室見川に近い遺跡北東端部に位置し、1・2・3・5区は台地前面の沖積扇状地上、4区は扇状地が台地化した砂礫台地上に立地する。調査地点はこれまでの農地開発に伴う削平により大きな改変を受けている。台地上および斜面ではより削平が進んでおり、失われた遺構も多いと考えられるが、低地部では比較的遺構の遺存状況は良好であり、竪穴住居跡を中心とした生活遺構を多数確認している。

第1次調査地点における主な検出遺構・遺物は弥生時代前期末～中世前半代の広範囲にわたるが、遺構の主体は弥生時代前期末～古墳時代中期である。時期が不明瞭な遺構も多いが、各調査地点での主な検出遺構を記す。なお、1区の詳細については『岸田遺跡1』（1256集）を参照いただきたい。

1区

弥生時代

前期末～中期初頭以前 SC29

前期末～中期初頭 SC28・SC30・SC31

中期前半 SC34・SC35

中期後半 SC26・SC36・SC39

不明 SC27・SC32・SC37・SC38

弥生時代終末～古墳時代前期

SC01・SC02・SC03・SC05・SC07・SC08・SC09・SC11・SC13・SC14・SC15・SC23・SC24

古墳時代中期初頭～前半

SC04・SC06・SC10・SC16・SC20・SC22

2区

弥生時代中期前半～中頃 SC0207・SC0208・SK0209・SK0210

弥生時代終末～古墳時代前期 SB0206・SC0201・SC0202・SC0203・SC0204・SC0205

3区

弥生時代中期後半 SK0304

弥生時代終末～古墳時代前期 SC0301・SC0309・SK0303

古墳時代中期前半 SC0302

4区

弥生時代

中期初頭～前半 SK0444・SK0489・SK0497

中期前半～中頃 SC0426・SK0406・SK0454

中期中頃～後半 SC0453・SC0483・SC0484・SC0495

中期後半～末 SC0485・SC0486・SK0487・SK0490・SK4168・SK4170

不明 SC0405

弥生時代前期末～弥生時代後期後半 土坑墓・木棺墓・甕棺墓

弥生時代終末～古墳時代前期 SB0491

5区

弥生時代中期中頃 SC0503・SK0504・SK0505

弥生時代終末～古墳時代前期 SB0502

4区で検出した埋葬遺構群は土坑墓・木棺墓が8基、甕棺墓が78基の合わせて86基である。これらは調査区中央の空閑地をはさんで北群46基と南群40基に分けることができる。北群は削平で失われたもののを除くとほぼ完掘しており、南群はさらに南側に墓域を広げるものと考えられる。

埋葬の開始は前期末～中期初頭に位置付けられ、北群ではSR0437（銅剣副葬）、南群ではSR0498、SR4917、K0457、K0471（銅剣副葬）、K0473（銅剣・把頭飾・銅矛副葬）、K4918等がこの時期に当たる。その後K0499、K4916（銅剣・銅矛副葬）がK0471、K0473と対をなすように埋葬され、南群の中核となる。更に南群は墓域を広げ、K0482（銅剣・銅矛副葬）を中心とした小群も認められるようになる。南群ではこの後も継続的に埋葬が行われ、埋葬は中期末で終了する。北群ではSR0437の後いつたん埋葬が途絶え、中期中頃に南北両端において埋葬が再開される。中期後半には鉄戈を副葬したK0443が埋葬される。北群においても主な埋葬は中期末までに終えているが、後期後半のK0416や時期不詳ながらSR0425・0431など一部後期にも埋葬が断続的に行われているようである。

岸田遺跡・松木田遺跡・長峰遺跡は早良平野最南端に位置する一連の遺跡群であり、これまでの調査でも、これより南のいわゆる奥早良では弥生時代～古代のまとまった遺構はほとんど確認されておらず、早良平野における弥生～古墳時代の南限域と捉えることができる。そこで岸田遺跡第1次調査で確認した遺構の変遷を周辺の調査と合わせて概観したい。

岸田遺跡でまとまった遺構・遺物が確認されるのは弥生時代前期末以降である。前期末～中期初頭には低地部に堅穴住居跡が数棟認められ、集落が出現する。この時期には台地上において木棺墓・甕棺墓が埋葬を開始しており、そのうちの3基には青銅武器の副葬が認められる。松木田遺跡においても明確な生活遺構は確認されていないが、北端部斜面にはこの時期の包含層が存在するとともに、4次調査5区において土坑墓・木棺墓を主体とした埋葬遺構群が検出されている。中期前半には集落が拡大し、低地部のみならず台地上にも堅穴住居跡が認められるようになる。この時期の甕棺墓2基からも青銅器の副葬が確認されている。これ以降中期後半から末にかけて集落は急速に拡大を続け、台地上では埋葬遺構群に近接して堅穴住居跡が営まれている。また、1次調査においてはこの時期の遺物が最も多く出土している。更に、埋葬遺構としては台地上に鉄戈を副葬した大型の甕棺墓が認められる。中期後半～末には長峰遺跡や松木田遺跡において多くの生活遺構・埋葬遺構が確認されており、遺跡群における弥生時代集落の最盛期と位置付けることができる。これ以降後期には急速に集落は解体し、生活遺構・遺物は見られなくなるが、台地上ではわずかながら断続的に理葬が行われている。

その後、生活遺構が再び出現するのは弥生時代終末期になってからである。台地上では掘立柱建物が1棟認められるのみであるが、低地部には前代を超える多くの堅穴住居跡が確認される。中でも平面10m×7m程度の大型堅穴住居跡SC23・SC24・SC0201が整然と並んで確認されている。3棟の共時性については不明であるが、集落の中心的機能を有する建物と位置付けることができよう。また弥生時代終末期～古墳時代前期にかけては松木田遺跡においても堅穴住居跡が広がっている。この後短期間の断絶を経て、古墳時代中期にも集落が認められるが、前代と比べると小規模なものにとどまっている。更に古墳時代後期には岸田遺跡においては遺構・遺物はほとんど見ることができず、松木田遺跡においても遺構は継続しているが、集落の縮小は明らかである。

古代・中世の姿は必ずしも明らかでないが、松木田遺跡では鉄器生産関係の遺構・遺物が確認されており、岸田遺跡においても炭窯を3基検出している。また岸田遺跡での中世に位置付けられる建物跡は必ずしも明らかでないが、ピットからは中世前半の遺物が出土している。長峰遺跡においても建物跡が確認されており、遺跡群では生活の場としての利用が継続している。

岸田遺跡第1次調査出土赤色顔料の調査

田上勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

岸田遺跡の壺棺内から採取された赤色顔料について、蛍光X線による定性分析をおこなった。分析資料は表のとおりで、7基の壺棺出土の9資料である。青銅器に付着していたものはサンプリングして分析し、赤色顔料が混じった土壌は、洗浄や選別はせず、そのまま赤色部分を測定した。

1 K0471の資料は鉄(Fe)のピークと青銅由来の銅(Cu)・鉛(Pb)のピークが認められる。水銀(Hg)のピークが認められないで水銀朱ではなくベンガラである。

2~4 K0473の資料は水銀のピークと硫黄(S)のピークが認められるので水銀朱である。ほかに青銅由来の銅・鉛のピークが認められる。

5 K0459の資料は水銀のピークと硫黄のピークが認められるので水銀朱である。鉄は土壌由来であろう。

6 K0482の資料は水銀のピークと硫黄のピークが認められるので水銀朱である。銅剣か銅矛の銷に付着していたので、銅のピークが認められる。また、鉄は土壌由来であろう。

7 K4915の資料は水銀のピークと硫黄のピークが認められるので水銀朱である。鉄は土壌由来であろう。

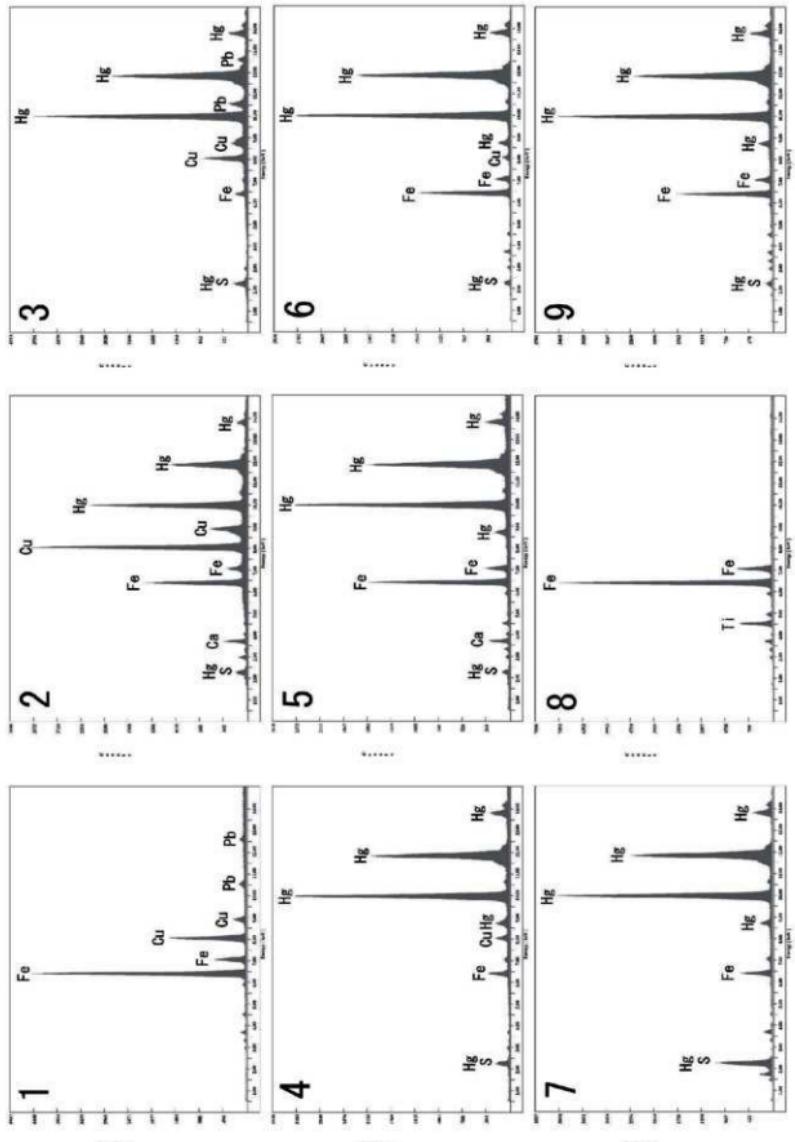
8 K0442の資料は水銀のピークが認められないで水銀朱ではない。資料はやや赤っぽい程度であり、鉄のピークが明瞭であるが、赤くない土壌部分とそれほど結果に違いがなかったので、赤色顔料が含まれていると断定できなかった。

9 K0443の資料は水銀のピークと硫黄のピークが認められるので水銀朱である。鉄は土壌由来であろう。

岸田遺跡の6基の壺棺から赤色顔料が検出され、内訳はベンガラ1基、水銀朱5基であった。利用時期は中期初頭から中期後半にわたり、副葬品が出土した壺棺に多く認められる。しかしながら副葬品を持たない壺棺からも水銀朱が検出されており、副葬品を持たないながらもやや上位の者の墓なのであろう。

表 分析資料と結果

No.	出土遺構	型式(時期)	副葬品	分析資料	
1	K0471	金海式(中期初頭)	銅剣	銅剣に付着した赤色顔料	ベンガラ
2				銅剣に付着した赤色顔料	水銀朱
3	K0473	金海式(中期初頭)	銅剣・銅矛・把頭飾	把頭飾に付着した赤色顔料	水銀朱
4				下壺の赤色顔料混じりの土	水銀朱
5	K0459	須玖式(中期中頃)	なし	下壺の赤色顔料混じりの土	水銀朱
6	K0482	汲田式(中期前半)	銅剣・銅矛・玉類	青銅器銷に付着した赤色顔料混じりの土	水銀朱
7	K4915	須玖式(中期中頃)	なし	下壺の赤色顔料混じりの土	水銀朱
8	K0442	立岩式(中期後半)	なし	赤色顔料?混じりの土	×
9	K0443	立岩式(中期後半)	鉄戈	赤色顔料混じりの土	水銀朱



蛍光X線スペクトル